岐阜県教育文化財団文化財保護センター
調査報告書　第87集

野笹遺跡 Ⅲ

２００４
財団法人　岐阜県教育文化財団

序

美濃加茂市は、木曽川、飛騨川が合流する開けた盆地にあります。古くから木曽川水運の港町として、また中山道など主要街道の宿場町として栄えてきました。現在も、岐阜・名古屋・東濃・飛騨を結ぶ交通の要所となっており、鉄道や国道などの幹線交通路が集まっています。恵まれた地理的環境は、旧石器時代から現代に至るまで、連綿とした人々の生活をはぐくみ、多くの遺跡となって残っています。

野笹遺跡は、一般国道248号道路改良工事に伴う発掘調査で、木曽川の河岸段丘上に広がる縄文時代から現代にかけての長い時代にわたる生活の跡が次第に明らかになってきました。平成８・９年度の調査では、縄文時代から中世にかけての集落跡が見つかり、特に古墳時代後期の竪穴住居跡は23軒に及びました。平成11・12年度の調査では、古墳時代の住居跡４軒、溝数条をはじめ多くの遺構と、横穴式石室を持つ円墳１基が見つかりました。

このたびの調査では、平成８・９年度に確認された、堰を持つ中世の大溝の続きが見つかりました。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、美濃加茂市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成16年３月

財団法人　岐阜県教育文化財団

理事長　日　比　治　男

例　言

1　本書は、岐阜県美濃加茂市野笹町２丁目字紙屋に所在する野笹遺跡（岐阜県遺跡番号21211―08845）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、一般国道248号道路改良工事に伴うもので、岐阜県基盤整備部可茂建設事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成14年度までは財団法人岐阜県文化財保護センター）が実施した。

3　発掘調査は、平成14年度に、整理作業は平成15年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆は、第１章と第３章は藤岡比呂志、それ以外は近藤正枝が行った。また編集は近藤が行った。

6　発掘調査における地形測量・空中写真測量、作業員雇用、現場管理、掘削などの業務と、遺物の洗浄・注記は、大日コンサルタント株式会社に委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、STUDIO SKYに委託して行った。

8　石器の実測・観察表作成・文章執筆は、株式会社アルカに委託して行った。結果は第４章中に掲載した。

9　発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）

可児光生　千藤克彦　藤村俊　松岡千年　三島美奈子　渡辺博人
美濃加茂市教育委員会　美濃加茂市野笹町２丁目自治会

10　本文中の方位は、国土座標第Ⅶ系の座標北を示している。

11　土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

凡例

1　出土遺物の実測の縮尺は、石器が2/3、1/3、陶器・磁器が1/3である。

2　遺構の略号は下記のものを用いた。

柱穴・小穴　P　自然流路　NR

なお、遺構番号は１番から通番で付し、調査時のものをそのまま使用している。

目　　次

序
例言
はじめに……1
第１章　調査の経緯……2
　第１節　調査にいたる経緯 ……(藤岡) 2
　第２節　発掘調査の経過と方法 ……(藤岡) 2
第２章 遺跡の環境 ……6
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……6
第３章　基本層序 ……(藤岡) 8
第４章　遺構と遺物……12
　第１節　遺構・遺物の概要……12
　第２節　遺構と遺物……13
　第３節　包含層出土遺物 ……(近藤・馬場・高橋) 27
第５章　まとめ……45
遺物観察表
図版

挿図目次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　野笹遺跡内地区別図……3
第３図　調査前地形測量図・試掘位置図・
　　調査範囲図……5
第４図　周辺の遺跡分布図……7
第５図　遺構全体図……8
第６図　基本層序（１）……9
第７図　基本層序（２）……11
第８図　01溝、NR平面図・断面図……14
第９図　堰平面図・断面図 ……15
第10図　01溝出土遺物① ……16
第11図　01溝出土遺物② ……17
第12図　自然流路出土遺物① ……18
第13図　14溝、02溝出土遺物 ……19
第14図　05・15溝平面図・断面図 ……20
第15図　15溝礫平面図 ……21
第16図　15溝出土遺物①……22
第17図　15溝出土遺物②……23
第18図　05溝出土遺物……24
第19図　07・08土坑平面図・断面図……25
第20図　P09・10・12平面図・断面図 ……26
第21図　包含層出土遺物……27
第22図　剥離技術についての説明図……30
第23図　包含層出土石器（１）……36
第24図　包含層出土石器（２）……37
第25図　包含層出土石器（３）……38
第26図　包含層出土石器（４）……39
第27図　包含層出土石器（５）……40
第28図　包含層出土、縄文時代晩期後半～
　　弥生時代の石器・その他……41
第29図　01溝、自然流路遺物X軸投影分布図 …46
第30図　遺物種別散布状況図……47

第31図　野笹Ⅰ・Ⅳ区
01溝、05溝平面図 ……48
第32図　遺構変遷図……49
第33図　土器組成・陶器用途別グラフ……51

表目次

表1　時期区分 ……12
表2　遺構一覧 ……23
表3　石材別石器製作作業概要 ……28
表4　器種と剥片剥離技術の関係 ……32
表5　器種と素材剥片形態の関係 ……32
表6　石材・器種と刃部属性の関係 ……32
表7　石材・器種と形態形成加工の関係 ……33
表8　石材・刃部属性と形態形成加工の関係…33
表9　石材・形態形成加工と剥片剥離技術の関係…33
表10　器種別土器組成表 ……50
表11　用途別陶器・磁器組成表 ……50
表12　器種別土器組成表（質量） ……51
表13　石器組成表 ……52
表14　石材別個数表 ……52
表15　土器観察表 ……53
表16　石器観察表 ……59

図版目次

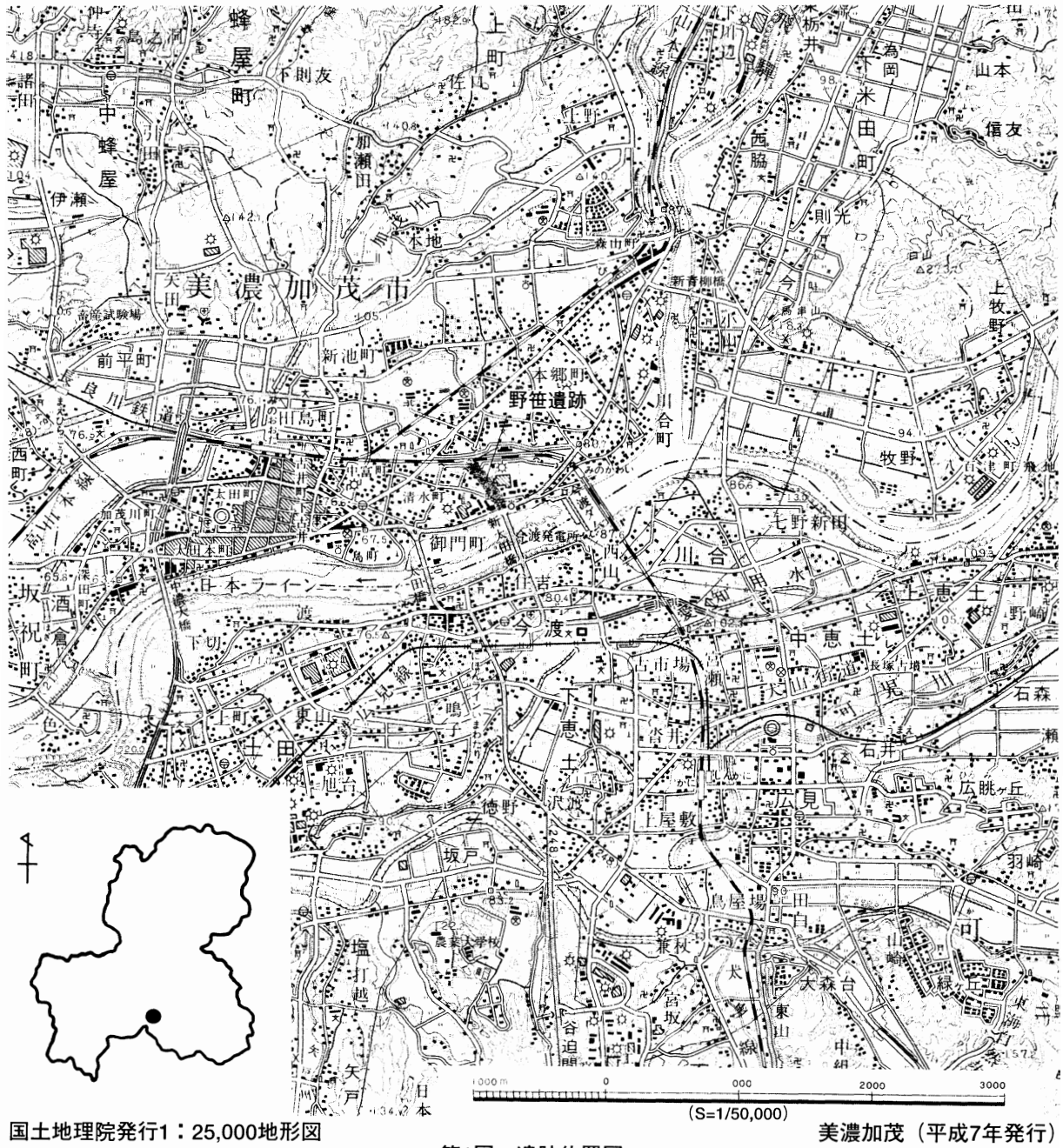
図版1　遺跡全景、作業風景
図版2　壁断面、01溝・NR　全景・断面
図版3　11堰・14溝　全景・断面
図版4　02・03・05・15溝全景、調査区全景
図版5　05・15溝、07・08土坑全景・断面
図版6　01溝出土遺物（1）
図版7　01溝出土遺物（2）
図版8　01溝出土遺物（3）
図版9　01溝出土遺物（4）
図版10　01溝出土遺物（5）、自然流路出土遺物（1）
図版11　自然流路出土遺物（2）
図版12　自然流路出土遺物（3）、14・02溝出土遺物
図版13　05・15溝出土遺物（1）
図版14　05・15溝出土遺物（2）
図版15　05・15溝出土遺物（3）
図版16　05･15溝出土遺物（4）、包含層出土遺物（1）
図版17　包含層出土遺物（2）、01溝・自然流路出土遺物
図版18　自然流路、14・15・05溝、包含層出土遺物
図版19　包含層出土石器（1）
図版20　包含層出土石器（2）
図版21　包含層出土石器（3）
図版22　包含層出土石器（4）、剥片・石核

文章中図版

文章中図版1　剥離開始部の幅の計測 ……34
文章中図版2　石庖丁の使用痕 ……43

はじめに

本報告書は、既刊の『野笹遺跡Ⅰ』及び『野笹遺跡Ⅱ』の続編である。『野笹遺跡Ⅰ』で報告したⅠ区は、遺跡の中央部にあたり、『野笹遺跡Ⅱ』で報告したⅡ区・Ⅲ区は、Ⅰ区の北側に続く地区がⅢ区、Ⅰ区の南に続く地区がⅡ区である。本報告書で報告するⅣ区はⅠ区の西に続く地区で、同一遺跡内の1地点である。したがって、「遺跡の環境」については、『野笹遺跡Ⅰ』の記述と重複するため、詳細な記述を避けることとする。報告書名のローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは分冊を意味するもので、Ⅰ区～Ⅳ区のように「区」を付した方は、遺跡内の地点を表すものである。



国土地理院発行1：25,000地形図　　美濃加茂（平成7年発行）

第1図　遺跡位置図

第１章　調査の経緯

第１節　調査にいたる経緯

当遺跡の発掘調査は、岐阜県基盤整備部建設管理局可茂建設事務所による一般国道248号線道路改良工事に伴うものである。この道路建設予定地周辺は、周知の遺跡（縄文時代）や古墳があり、比較的遺跡分布密度の高い地域である。平成７年度に岐阜県教育委員会が道路予定地を試掘したところ、遺跡を確認し、「野笹遺跡」と命名され、当センターが平成８～９年度にⅠ区を、平成11～12年度にⅡ、Ⅲ区の発掘調査を実施している。

一般国道248号道路改良工事の設計変更に伴い、Ⅰ区の南西部隣に道路工事予定地ができたため、平成14年５月１日に試掘確認調査を行ったところ、Ⅰ区で確認した大溝（ＳＲ１）の延長部と、溝、土坑、小穴などが見つかり、遺跡が南西部に広がることを確認した。これらの結果を踏まえて、５月８日に岐阜県可茂建設事務所・県教育委員会社会教育文化課・財団法人岐阜県文化財保護センターの三者による平成14年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会を開催し、本発掘が必要であると判断し、当センターが平成14年度に発掘調査を実施した。

第２節　発掘調査の経過と方法

１　調査期間

平成14年６月24日～８月20日

２　グリッド設定方法（第3図）

調査区内は、Ⅰ区に隣り合うため、Ⅰ区で使用した国土座標（日本測地系）に合わせ、磁北を基準として５ｍ×５ｍの方形区画（グリッド）を設定した。Ⅰ区は一辺８ｍのグリッドであったが、Ⅳ区は調査範囲が狭いため、５ｍのグリッドとし、グリッド名称はⅣ区単独での名称とした。グリッド杭の名称は北から南へ１～６、東から西へＡ～Ｆとして、グリッドの名称は北東杭で呼称することにした。

３　層序

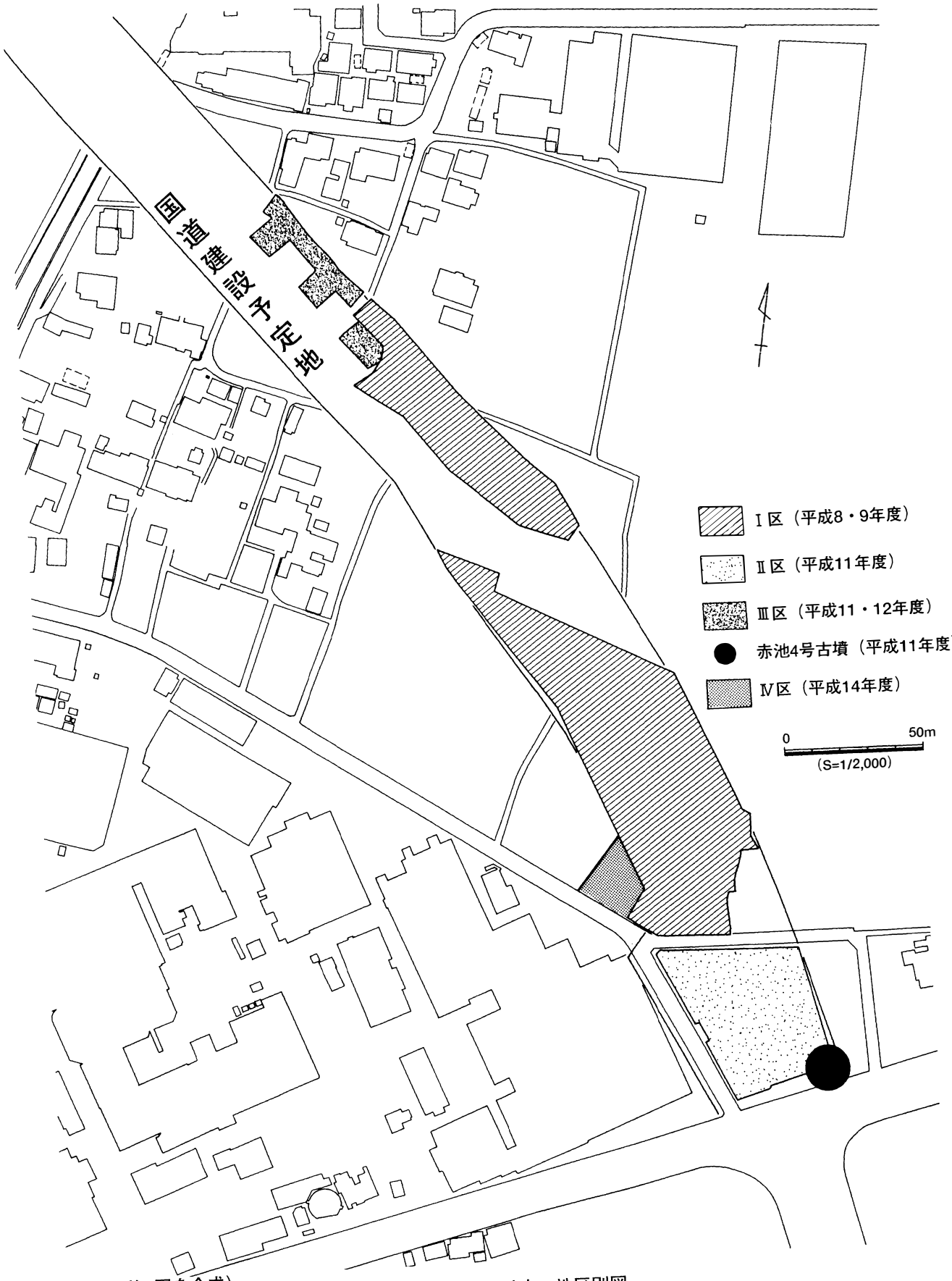
詳細は第３章で述べるが、遺物包含層を中心とする基本層序はⅠ～Ⅲのローマ数字、遺構内の埋土は算用数字で呼称することとした。

４　調査対象面積

500㎡

５　調査の経過

６月10日に重機による表土掘削を行った。手掘りによる遺構検出を行う途中で、撹乱が広範囲にわたって確認できたため、撹乱部分は重機で取り除いた。その後、遺構検出を手掘りで行うと同時に、調査区壁面において層位の確認と記録を行った。遺構掘削を手掘りで行い記録をとった。遺物は層位



（野笹Ⅱ第2図を合成）

第2図　野笹遺跡内　地区別図

別、グリッド別に一括で取り上げ、遺構出土遺物はトータルステーションによって取り上げた。遺構掘削後に空中写真撮影による測量を行い、01溝下の自然流路を掘削し、遺物の取り上げを行った。調査の詳細については、調査日誌抄として記述する。

6　遺物・調査記録の整理作業

平成15年度に、出土遺物・調査記録の整理作業を行った。遺物の洗浄・注記ならびに土器の硬化剤処理は現地で完了しているため、これらの作業以降の段階から始めた。

7　発掘調査及び整理作業の体制

	平成14年度	平成15年度
理事長	服部卓郎	日比治男
副理事長兼事務局長		高橋宏之
副理事長		平光明彦
専務理事兼事務局長	成戸宏二	
常務理事兼センター所長		福田安昭
常務理事兼経営部長	福田安昭	
経営部次長兼経営課長	福田照行	
経営課長		川瀬崇敏
調査部長	武藤貞昭	武藤貞昭
調査部次長	片桐隆彦	
担当調査課長	藤岡比呂志	高木徳彦
担当調査員	藤岡比呂志	近藤正枝
整理作業従事者	春日井典子　後藤悦子　野尻みどり	

8　調査日誌抄

6月20日　基準点測量。
6月21日　現場事務所設置。
6月24日　調査範囲に安全柵設置。調査開始。
　　調査区壁面の整形、清掃。
6月26日　層位確認、南東壁トレンチ掘削と調査。
　　地山面検出。
6月28日　遺構包含層（Ⅱ・Ⅲ層）掘削、
　　遺構検出作業開始。
7月2日　南東壁清掃、セクション図作成。
7月3日　南西壁清掃、セクション図作成。
　　重機による撹乱部分除去作業開始。
7月4日　北西壁清掃、セクション図作成。05溝検出。
7月5日　重機による撹乱除去作業終了。
7月8日　遺構検出終了。01溝、堰検出。
7月9日　遺構掘削開始、01溝の断割開始。
　　15溝検出。
7月11日　01溝の断割終了、分層、記録。
7月16日　堰の精査。
7月18日　土坑掘削。02・03溝、小穴検出。
7月22日　01溝の覆土精査開始。15溝断割。
　　各務原市教育委員会渡辺博人氏来訪。
7月25日　01溝の覆土精査終了。02・03溝完掘。
7月30日　空中写真撮影測量。
7月31日　自然流路精査開始。

8月1日　北西壁断割開始。

8月5日　自然流路精査終了、北西壁断割終了、
分層、記録。

8月7日　美濃加茂市教育委員会可児光生氏来訪。

8月8日　堰の石組除去後、覆土精査。

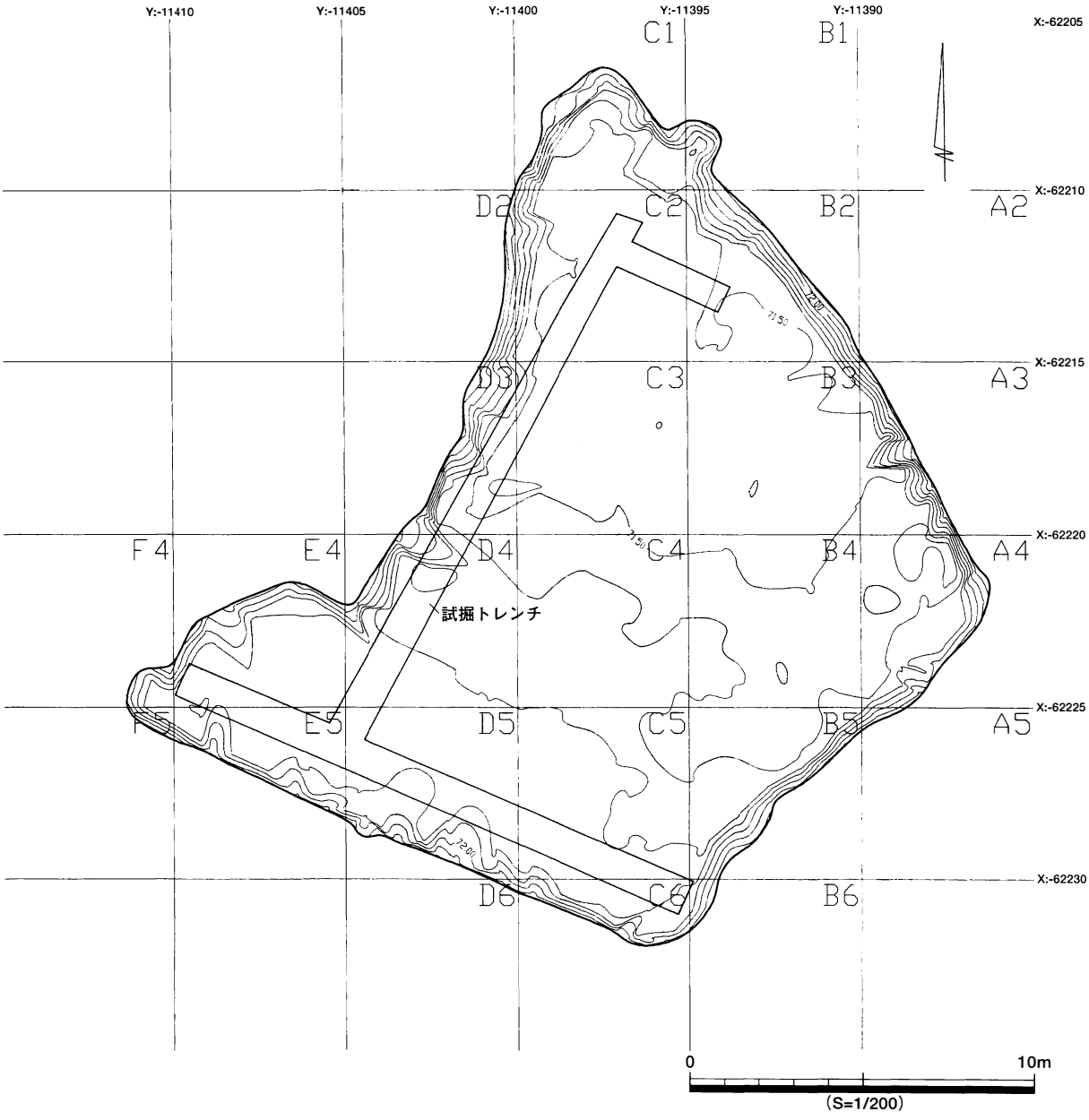
8月9日　美濃加茂市教委藤村俊氏来訪。

8月13日　美濃市教育委員会三島美奈子氏来訪。

8月14日　遺構掘削終了。

8月19日　平面実測終了。調査区最終全景撮影。

8月20日　午前で現場作業終了。
午後、岐阜県可茂建設事務所へ引き渡し。



第3図　調査前地形測量図・試掘位置図・調査範囲図

第 2 章　遺跡の環境

第 1 節　地理的環境

当遺跡は、木曽川によって形成された河岸段丘面上に立地する。この河岸段丘は、高位段丘 2 面、中位段丘 2 面、低位段丘 5 面に区分される（詳細は『野笹遺跡Ⅰ』参照）。調査区は低位段丘の中でも現河床からみて 2 番目に低い段丘上にある。木曽川は上流から多くの砂をもたらすため、砂が非常に多く堆積している。調査前は、畑として利用されていた。

第 2 節　歴史的環境

これまで知られている美濃加茂市内の遺跡の多くは、低位段丘上と中位段丘上にあたる加茂野台地上に所在する。しかし、近年の開発に伴い、高位段丘上で新たな遺跡が発見されてきている。ここでは、当遺跡が所在する低位段丘上の遺跡を中心に紹介する。ここで示した遺跡の範囲は、野笹遺跡Ⅱを転用している。また、文章も野笹遺跡Ⅱを転用している。

旧石器時代

木曽川の対岸にある川合遺跡群（可児市）で、ナイフ形石器などの遺物が出土している。

縄文時代

早期の押型文土器が、牧野小山遺跡や冨田清友遺跡で確認されている。牧野小山遺跡では、早期～晩期の遺物が確認されている。主体となる時期は中期後半で、大量の遺物や遺構が報告されている。

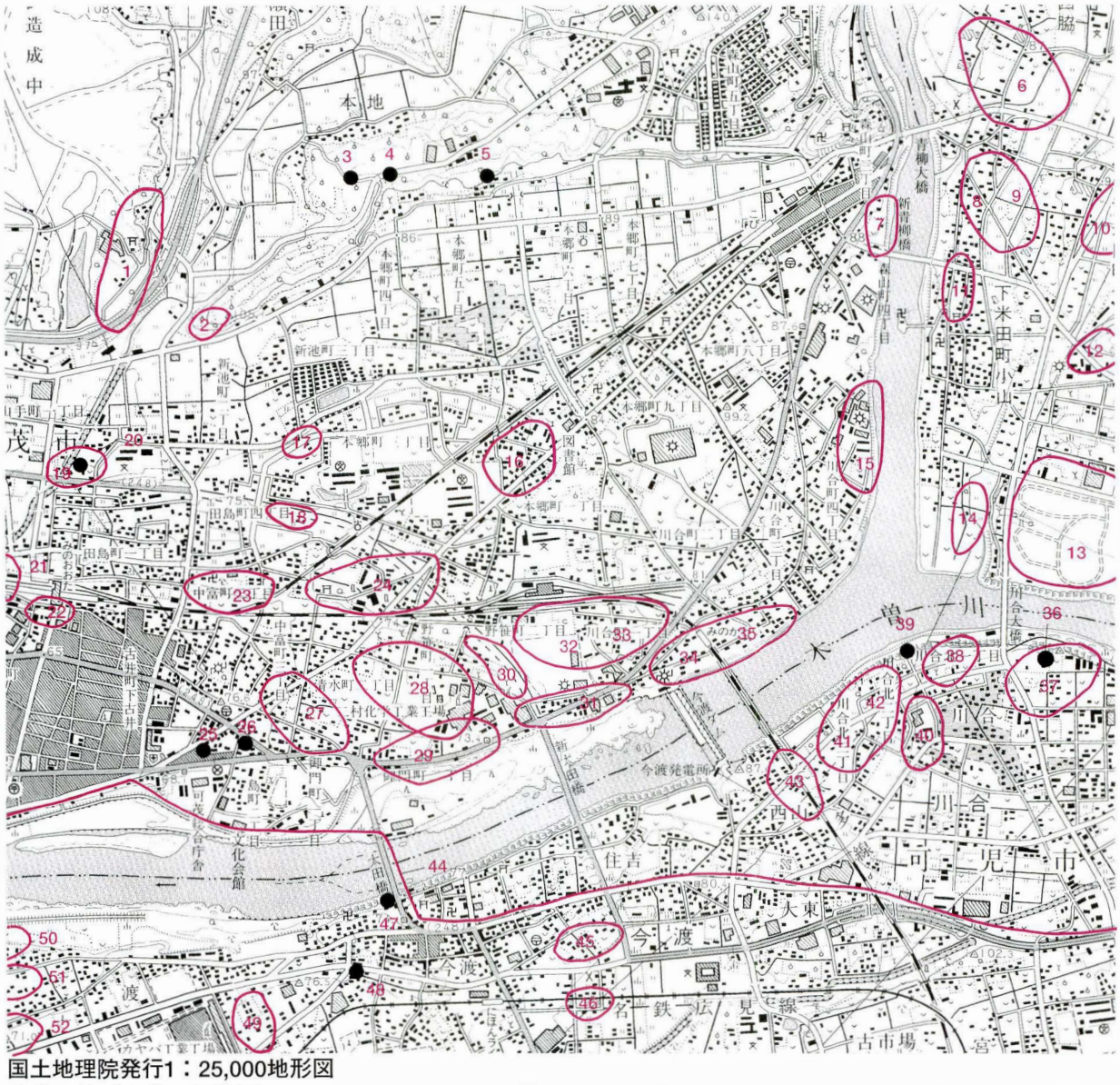
弥生時代～古墳時代

尾崎遺跡、牧野小山遺跡、今遺跡で住居跡が検出されている。後田遺跡では、弥生時代前期の遠賀川式土器が出土している。当遺跡に隣接する亀淵遺跡では、弥生時代後期～古墳時代初頭のパレススタイル土器が出土している。また二ツ塚遺跡からは、弥生時代前期～中期の条痕文系土器が出土している。

古墳は、かつて後期の群集墳が市内の各地で知られていたようであるが、耕作や市街化で消滅している。赤池古墳群は 1 ～ 3 号までが確認され『美濃加茂市史』にその記載がある。赤池 4 号古墳は発掘調査され、野笹遺跡Ⅱに報告されている。近くに二ツ塚古墳がある。

古代・中世

古代寺院跡については、瓦が採集され伝承が残る例もあるが、いずれも正式な調査は行われていない。中世の遺跡については、調査例が少なく今後の調査が期待される。Ⅰ・Ⅲ区で検出された堰と敷石を伴う大溝は、良好な資料と言える。



国土地理院発行1：25,000地形図
美濃加茂（平成13年発行）
野笹Ⅱ第5図を転用

（S=1/25,000）

1　尾崎遺跡（弥生～中世）
2　一夜堀遺跡（弥生）
3　火塚男塚遺跡（古墳）
4　姫塚古墳（古墳）
5　元禅隆寺跡（近世）
6　深渡遺跡群（縄文～弥生）
7　森山遺跡（弥生）
8　長福遺跡（弥生）
9　長福古墳群（古墳）
10　今遺跡（弥生～中世）
11　小山観音北遺跡（弥生）
12　廻間古墳群（古墳）
13　牧野小山遺跡（縄文～古代）
14　島崎遺跡（弥生）
15　川合東遺跡群（縄文～弥生）
16　本郷遺跡（弥生）
17　石坂遺跡（弥生）
18　仲迫間遺跡（縄文～近世）
19　大塚古墳（古墳）
20　大塚遺跡（弥生）
21　井口遺跡（弥生）
22　後田遺跡（弥生）
23　中富遺跡（縄文～弥生）
24　裏迫間遺跡（縄文～弥生）
25　神明堂古墳（古墳）
26　塚弓古墳（古墳）
27　火塚古墳（古墳）
28　亀淵遺跡（弥生）
29　亀淵古墳群（古墳）
30　野笹遺跡（縄文～近世）
31　赤池古墳群（古墳）
32　二ツ塚遺跡（縄文～弥生）
33　二ツ塚古墳群（古墳）
34　川合西古墳群（古墳）
35　川合西遺跡群（縄文～弥生）
36　東畑古墳（古墳）
37　川合遺跡（縄文～古墳）
38　稲荷塚古墳群（古墳）
39　コダマ塚古墳（古墳）
40　次郎兵衛塚古墳群（古墳）
41　宮之脇遺跡群（縄文～中世）
42　宮之脇古墳群（古墳）
43　西野遺跡（古墳）
44　旧中山道（近世）
45　今渡遺跡（縄文～近世）
46　今渡金星遺跡（近世）
47　今渡渡船場の跡（近世）
48　今渡下畑古墳（古墳）
49　土田東山古墳群（古墳）
50　土田神浦遺跡（縄文）
51　八幡古墳群（古墳）
52　土田定安遺跡（古墳）

第4図　周辺の遺跡分布図

第 3 章　基本層序

基本層序はⅠ区の南側と同じである。「野笹遺跡Ⅰ」で述べられているⅠ、Ⅱ層の 2 層が確認できる。

Ⅰ層：暗褐色、黒褐色　砂質土　耕作土

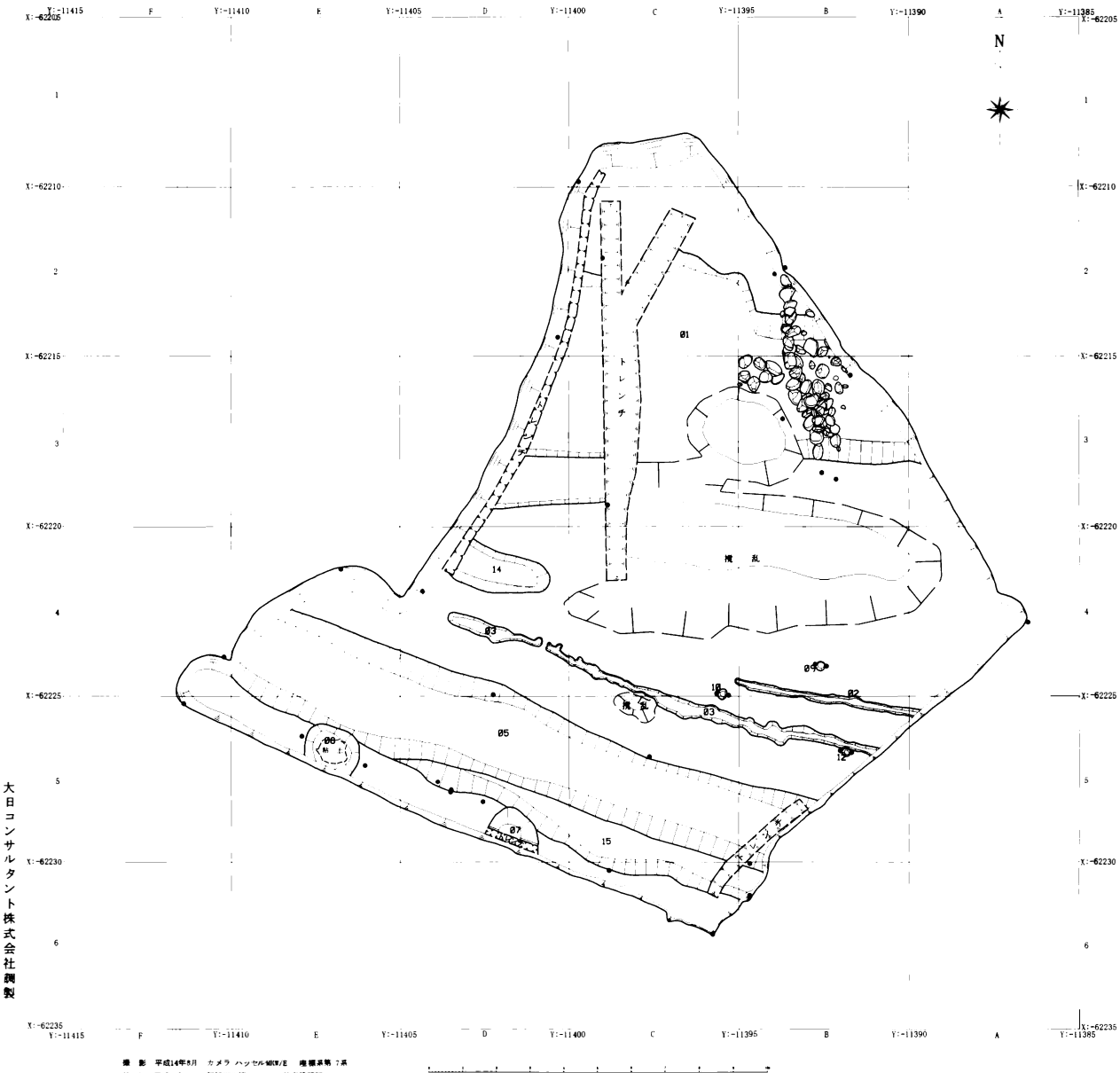
表土で、撹乱をかなり受けており、場所によって堆積状況が異なる。

Ⅱ層：黒褐色　砂質土

遺物包含層である。遺構は、Ⅱ層直下から掘り込まれている。Ⅰ区ではⅡ層直下は中世後半以降の遺構検出面である。

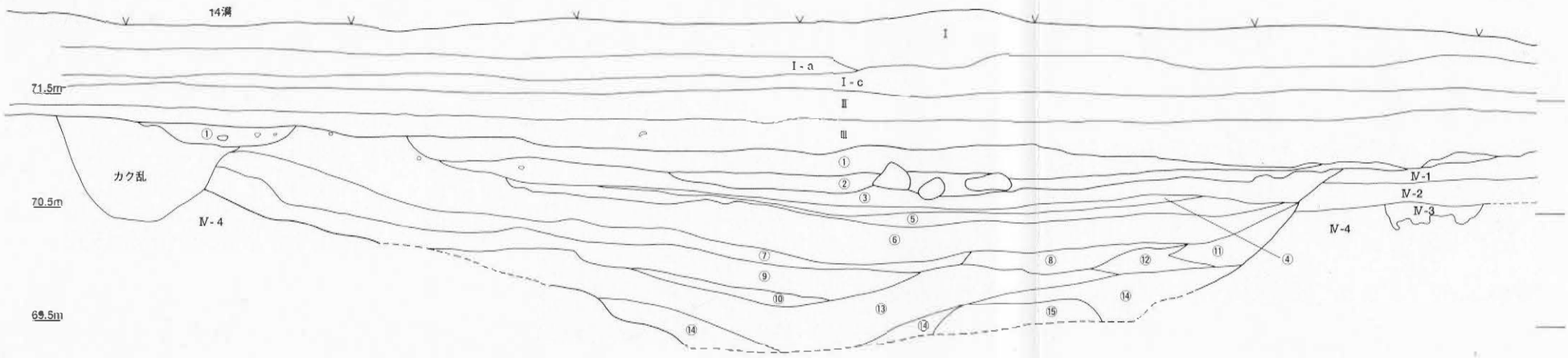
Ⅲ層：明黄褐色　砂

地山である。野笹遺跡ⅠではⅣ層にあたる。調査区の南半分には地山中にレンズ状に礫層が分布しており、05溝・15溝の底部に礫が一面に広がっている。Ⅰ区のⅢ層は局所的にのみ存在するもので、Ⅳ区では確認されていない。



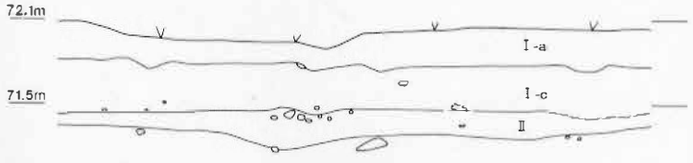
第5図　遺構全体図（S=1/200）

①西壁断面（01溝、壇、自然流路、14溝）

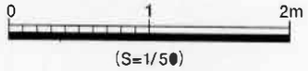


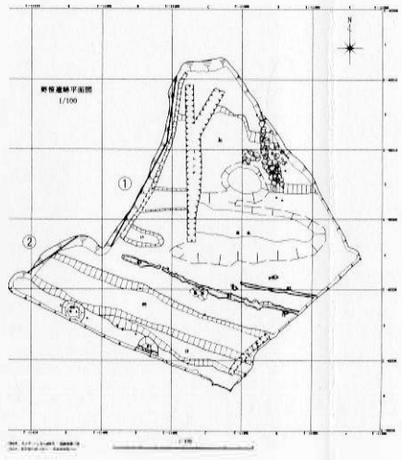
	Ⅰ			表土	
耕作土	Ⅰ-a	10YR3/3	暗褐	耕作土	
耕作土	Ⅰ-c	10YR3/2	黒褐	耕作土	現代の廃棄物を含む。
	Ⅱ	10YR1/3	暗褐	シルト	均質の砂粒を含む。炭化物細粒をまばらに含む。しまりあり、粘性弱い。
	Ⅲ	10YR3/2	黒褐	シルト	均質の砂粒を含む。地山土を斑に含む。しまりあり、粘性弱い。
14溝	①	10YR3/2	黒褐	シルト	細砂粒（2.5Y5/2）が混入、細砂粒がレンズ状に堆積。
01溝	①	10YR3/2	黒褐	シルト	細砂粒が均質に混入。
	②	2.5Y5/1	黄灰	細砂	①が極わずかに混入。
NR	③	2.5Y3/2	黒褐	シルト	細砂粒が混入。部分的に細砂粒がレンズ状に堆積。
	④	10YR4/1	褐灰	細砂	③との混土。部分的に細砂粒がレンズ状に堆積。
	⑤	10YR2/1	黒	シルト	細砂粒が混入。部分的に細砂粒がレンズ状に堆積。
	⑥	10YR2/2 ～ 2.5Y5/1	黒褐	シルト	南（10YR2/2黒褐）から北（2.5Y4/1黄灰）に向けて漸次細砂粒の量を増す。
	⑦	2.5Y4/2	黄灰	細砂	黒褐色シルトとの混土。④に比べ黄色味を帯びる。部分的に細砂粒がレンズ状に堆積。
	⑧	2.5Y5/2	暗灰黄	砂	粒子が粗い。黒褐色シルトがわずかに混入。径1cm以下の小礫を層状に含む。
	⑨	10YR3/1	黒褐	シルト	細砂粒が斑状に混入。
	⑩	2.5Y4/2	黄灰	砂	黒褐色シルトとの混土。④に比べ黄色味を帯びる。
	⑪	2.5Y4/1	黄灰	細砂	黒褐色シルトがわずかに混入。
	⑫				径3cm大の小礫層。
	⑬	2.5Y6/1	黄灰	細砂	少し黒ずむ黄灰色（2.5Y4/1）砂粒が帯状に堆積。
	⑭	2.5Y6/1	黄灰	砂	下部に至るほど砂が細かくなる。
	⑮	2.5Y5/2	暗灰黄	砂	極めて粗い砂層中に径5cm大の礫を多量に含む。
地山	Ⅳ-1	2.5Y4/1	黄灰		
地山	Ⅳ-2	2.5Y4/2	黄灰		
地山	Ⅳ-3	10YR3/2	黒褐		
地山	Ⅳ-4	2.5Y5/1	黄灰		

②西壁断面

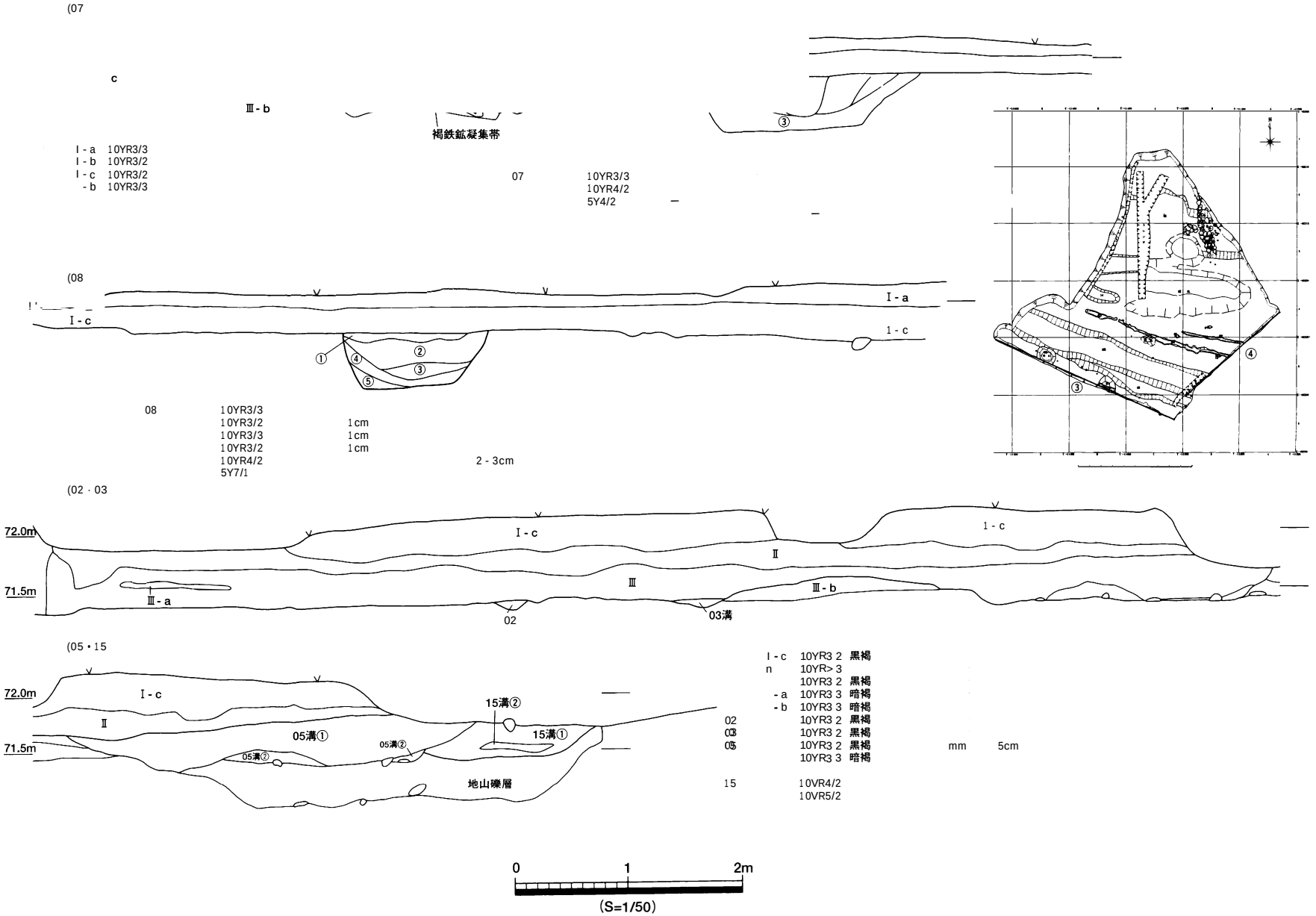


耕作土	Ⅰ-a	10YR3/3	暗褐	
耕作土	Ⅰ-c	10YR3/2	黒褐	現代の廃棄物を含む。
	Ⅱ	10YR1/3	暗褐	シルト 均質の砂粒を含む。炭化物細粒をまばらに含む。しまりあり、粘性弱い。





第6図　基本層序（1）


(07
c
Ⅲ-b
褐鉄鉱凝集帯
I-a 10YR3/3
I-b 10YR3/2
I-c 10YR3/2
-b 10YR3/3
07 10YR3/3
10YR4/2
5Y4/2
(08
I-a
I-c
1-c
08 10YR3/3
10YR3/2 1cm
10YR3/3 1cm
10YR3/2 1cm
10YR4/2
5Y7/1
2-3cm
(02・03
72.0m
71.5m
I-c
Ⅱ
Ⅲ
Ⅲ-a
Ⅲ-b
02
03溝
1-c
(05・15
72.0m
71.5m
I-c
Ⅱ
05溝①
05溝②
15溝①
15溝②
地山礫層
I-c 10YR3 2 黒褐
n 10YR> 3
10YR3 2 黒褐
-a 10YR3 3 暗褐
-b 10YR3 3 暗褐
10YR3 2 黒褐
10YR3 2 黒褐
10YR3 2 黒褐
10YR3 3 暗褐
15 10VR4/2
10VR5/2
mm 5cm
0 1 2m
(S=1/50)

第7図　基本層序（2）

第４章　遺構と遺物

第１節　遺構・遺物の概要

包含層出土の遺物は層位、グリッドごとに一括で取り上げ、遺構出土の遺物はトータルステーションによって取り上げている。土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗、中近世陶磁器と時期幅広く出土しているが、遺構から出土した遺物は15世紀のものが一番新しく、遺構の時期と考える。15世紀以外の遺構から出土した遺物は、溝をつくった際にかきまわされているものと思われる。石器は縄文～弥生時代の石鏃・フレイク・石核・打製石斧、弥生時代中期の石庖丁などが出土している。打製石斧と石庖丁以外の石材はほとんど下呂石である。下呂石の原石は拳大より小さい円礫で、石鏃をつくるためのものと思われる。下呂石は近くの木曽川から採取したものと思われる。

当遺跡のⅠ・Ⅱ・Ⅲ区からは縄文時代、弥生時代の住居跡が確認されているが、Ⅳ区では検出されていない。本報告書では、遺構出土の遺物と包含層出土の遺物を分けて掲載する。

表１　時期区分（『野笹遺跡Ⅰ』第１表転用）

区分	Ⅰ区	Ⅳ区遺構	Ⅳ区遺物	時期	土器型式による細分
１期	○			縄文時代中期末	咲畑・醍醐Ⅰ　船元・里木Ⅴ　賀曽利EⅡ
２期	◎			縄文時代中期末	咲畑・醍醐Ⅱ　賀曽利EⅢ
３期	◎		○	縄文時代中期末	咲畑・醍醐Ⅲ　賀曽利EⅣ
４期	○			縄文時代後期	称名寺～賀曽利B、福田KⅡ～縁帯文系
５期	○		○	縄文時代晩期	馬見塚
			○	弥生時代前期前葉初頭	樫王
６期	○		○	弥生時代前期	水神平
７期	◎		○	弥生時代中期前葉	朝日
８期	○			弥生時代中期中葉	貝田町
９期				弥生時代中期後葉	高蔵
10期	◎		○	弥生時代後期	山中
11期	◎		○	弥生時代末～古墳時代初頭	欠山・廻間Ⅰ
12期	◎			古墳時代前期	
13期	◎		○	古墳時代後期	
14期	◎		○	古代	
15期	◎	○	○	中世前期	山茶碗第３～６型式（12～13世紀前半）
16期	◎	○	○	中世後期	山茶碗第７～11型式（13世紀後半～15世紀）
17期	◎	○	○	近世	瀬戸美濃連房

Ⅰ区の◎は遺構・遺物の確認を、Ⅰ区の○は遺物のみの確認を示す。

第２節　遺構と遺物

01溝（第８・10・11図）

２Ｂ・Ｃ、３Ａ～Ｄに位置する。01溝は東西方向に長く、西に傾斜している。調査区の中では一番低いところに位置する。１，２層が溝の埋土で３～６層が自然流路である。この溝は自然流路を利用してつくられているようである。３層からの出土遺物は２層出土のものに類似し、土師器、石器が多量に出土している。また、１層と３層出土の須恵器が接合している。これらのことから、下層に遺構があったか、北からの流れ込みである可能性が高い。

この溝はⅠ区で検出された北東方向に伸びる大溝につながる。出土遺物から12～13世紀の遺構と思われる。Ⅰ区で検出したものは、幅９～10m、深さ約0.5mで、断面形は浅い擂鉢状をしている。Ⅳ区で検出したものは、撹乱を受けており、上場は南西隅でのみ確認されている。また、この南西隅（Ｄ３）からは土師器や石器などが集中して出土しており、流れのよどみ部分か、遺構であった可能性がある。この溝の幅は７～８ｍ、深さは0.25mである。また、Ⅰ区で確認された堰と同じ遺構を伴い、溝の南に平行する細い溝を検出しているが、撹乱を受けているため導水施設の詳細は確認できない。更にⅠ区では、溝の底から敷石遺構を確認しているが、Ⅳ区では検出していない。

掲載遺物は、縄文時代中期（１・２）、弥生時代前期前葉（３～13）、弥生時代前期（14～16）、弥生時代前期～中期の胴部破片（17～26）、弥生時代中期前葉（27～35）、弥生時代後期（36）、弥生時代末～古墳時代初頭（37～39）、古墳時代前期（40）の土器、古墳時代７世紀以前の土師器（41～49）、７世紀以降の土師器（50～54）、７世紀の須恵器（55～60）、８世紀の須恵器（61～63）、12～13世紀の山茶碗（64～71）、14～15世紀の山茶碗（72）である。

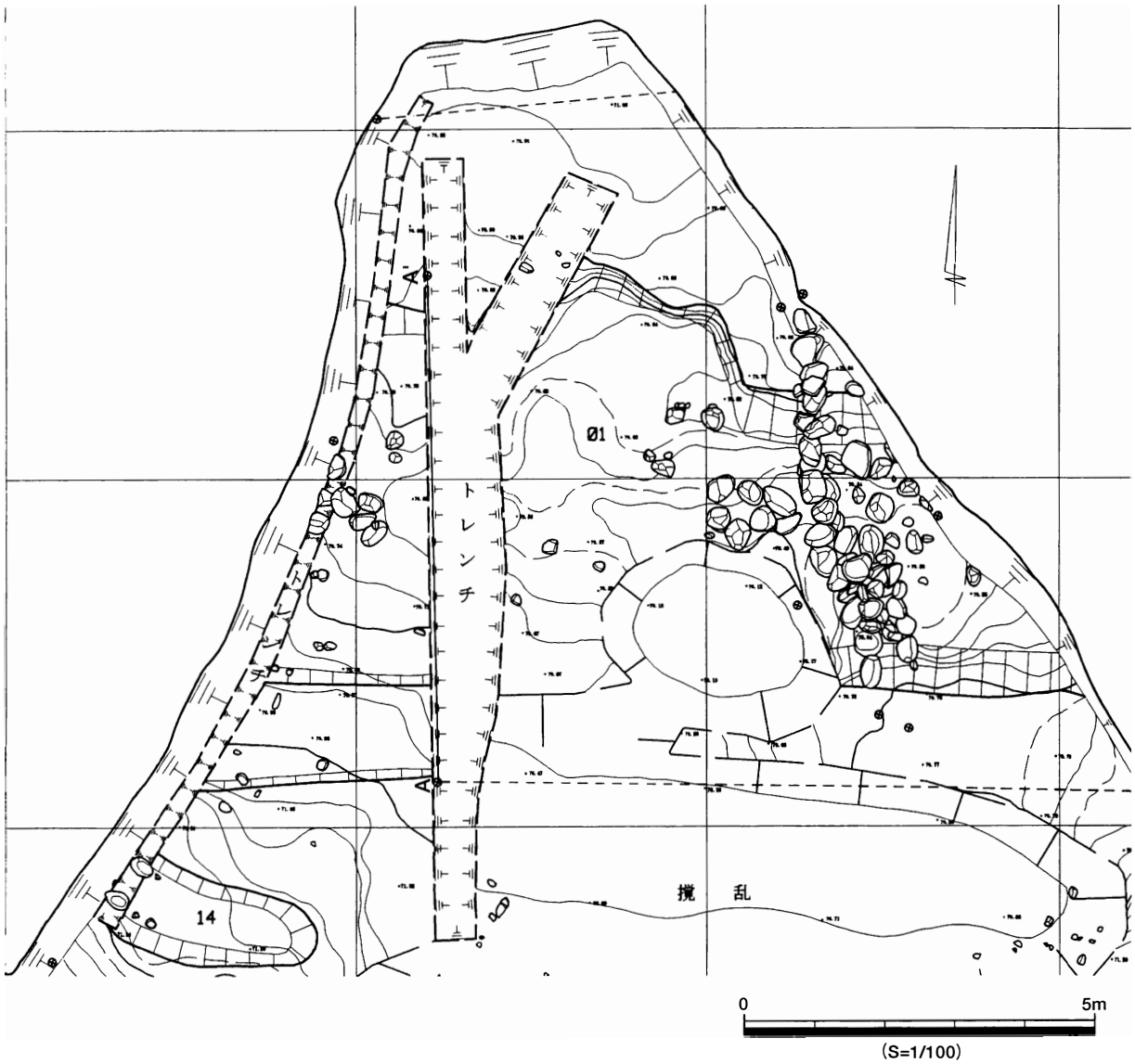
堰（第９図）

01溝の東壁付近２・３Ｂで検出した。堰の構築面は２層底部である。北側は調査区外へ続く。堰は40cm大の川原石を上下２段に積んだ２列の石組みで、幅１～1.5m、長さ6.5mである。大型の石が01溝と直交する方向に配石されており、平面形は中央部が下流に下がった「く」の字型をしている。Ⅰ区の堰に見られるような、木の板等を川原石の下に渡すような付随施設の痕跡は検出できなかったが、01溝の南にある14溝は01溝に平行するようである。堰の南端でごくわずかだが炭化物が見られ、石組みの中には被熱した石も見られる。被熱した石の周囲は被熱していないことから、石組みを構築した際に被熱した石が紛れ込んだ可能性が高い。

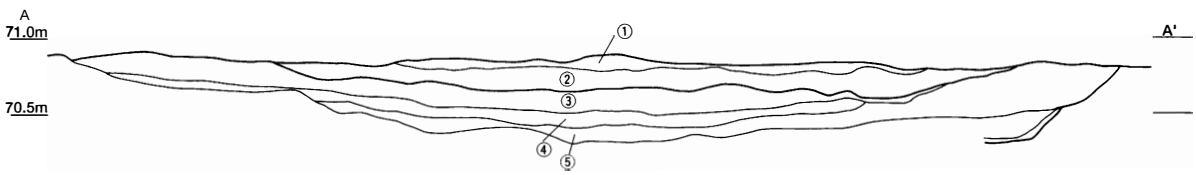
自然流路（NR）（第８・12図）

01溝の下から検出され、深さは1.5mほどある。埋土は３～６層で、遺物のほとんどは３層から出土している。６層直上からも土師器等が数点出土している。

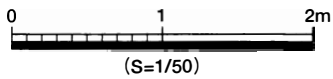
掲載遺物は、縄文時代中期（73）、縄文時代後期（74・75）、縄文時代晩期（76～78）、弥生時代前期前葉（79・80）、弥生時代中期前葉（81）、弥生時代前期～中期の胴部破片（82～86）、弥生時代前期（87・88）、弥生時代中期前葉（89・90）、弥生時代中期（91）、弥生時代中期～後期初頭（92・93）の土器、古墳時代７世紀以前の土師器（94）、７世紀の須恵器（95～99）、８世紀の須恵器（100）、12～13世紀の山茶碗（101・102）である。



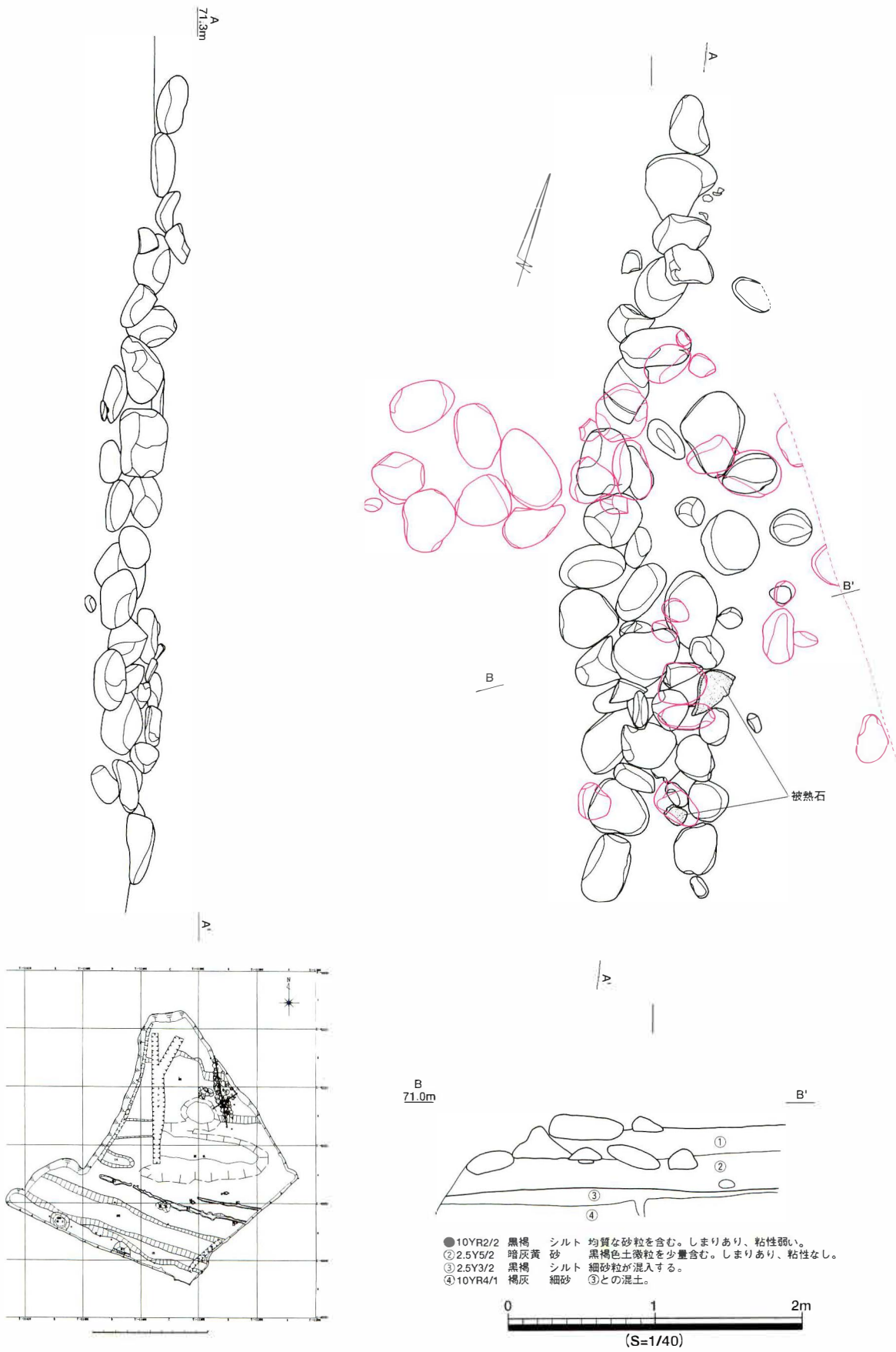
(01　NR)



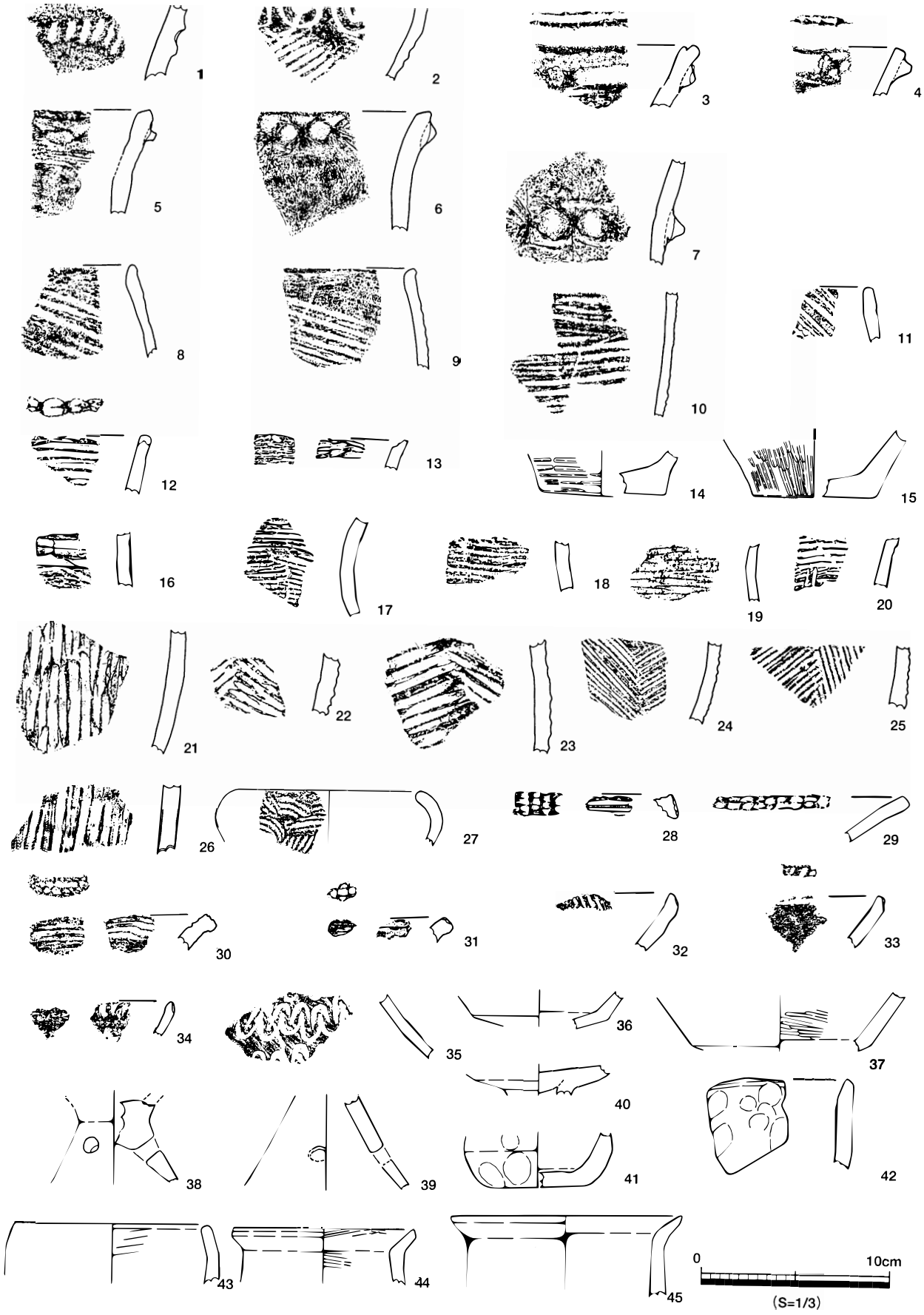
01	10YR3/2
	2.5Y5/1
NA	2.5Y3/2
	10YR4/1
	10YR2/1



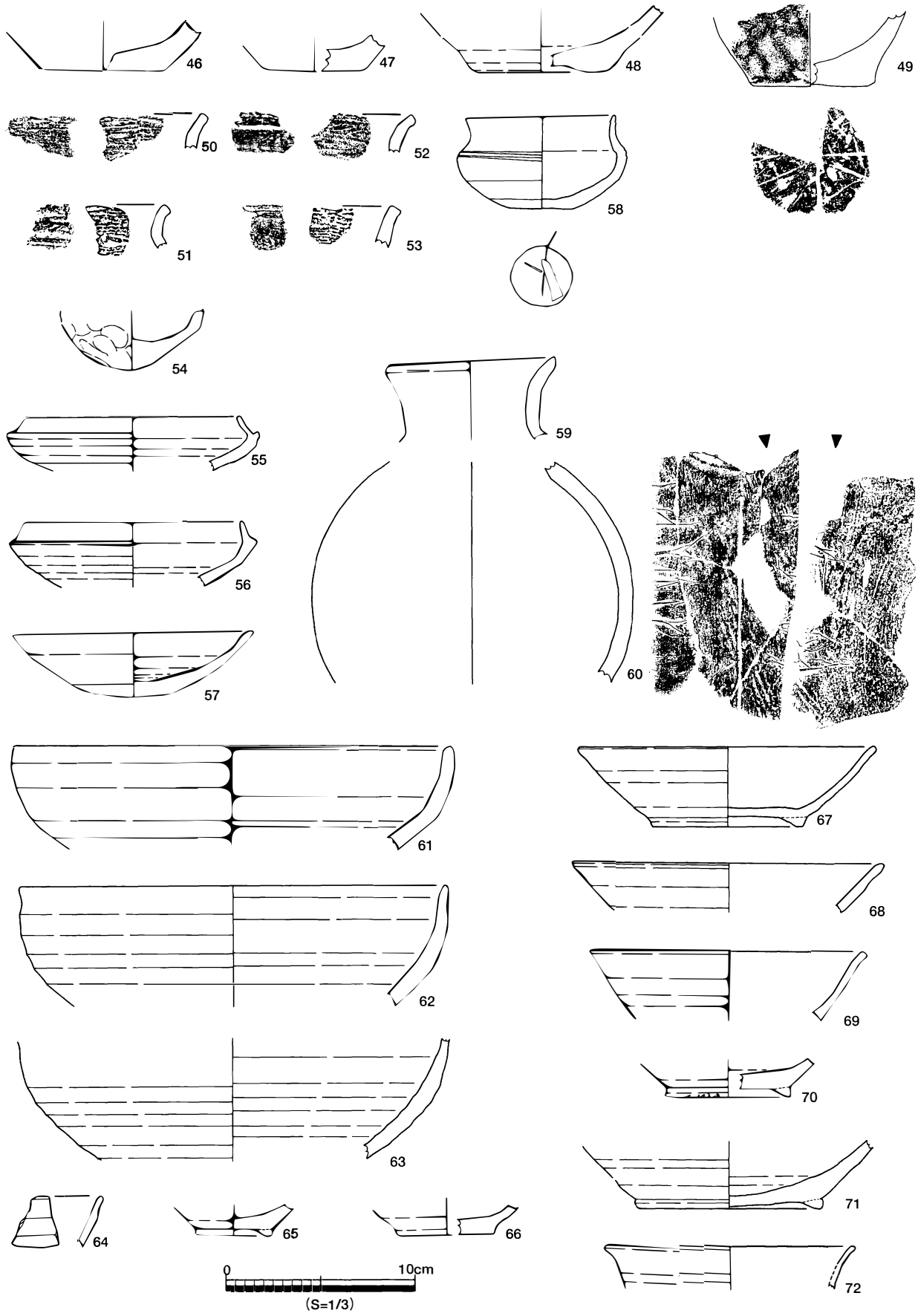
第8図　01溝、NR　平面図・断面図


A
71.3m
A'
A
B'
B
被熱石
A'
B
71.0m
B'
①
②
③
④
●10YR2/2　黒褐　シルト　均質な砂粒を含む。しまりあり、粘性弱い。
②2.5Y5/2　暗灰黄　砂　黒褐色土微粒を少量含む。しまりあり、粘性なし。
③2.5Y3/2　黒褐　シルト　細砂粒が混入する。
④10YR4/1　褐灰　細砂　③との混土。
0
1
2m
(S=1/40)

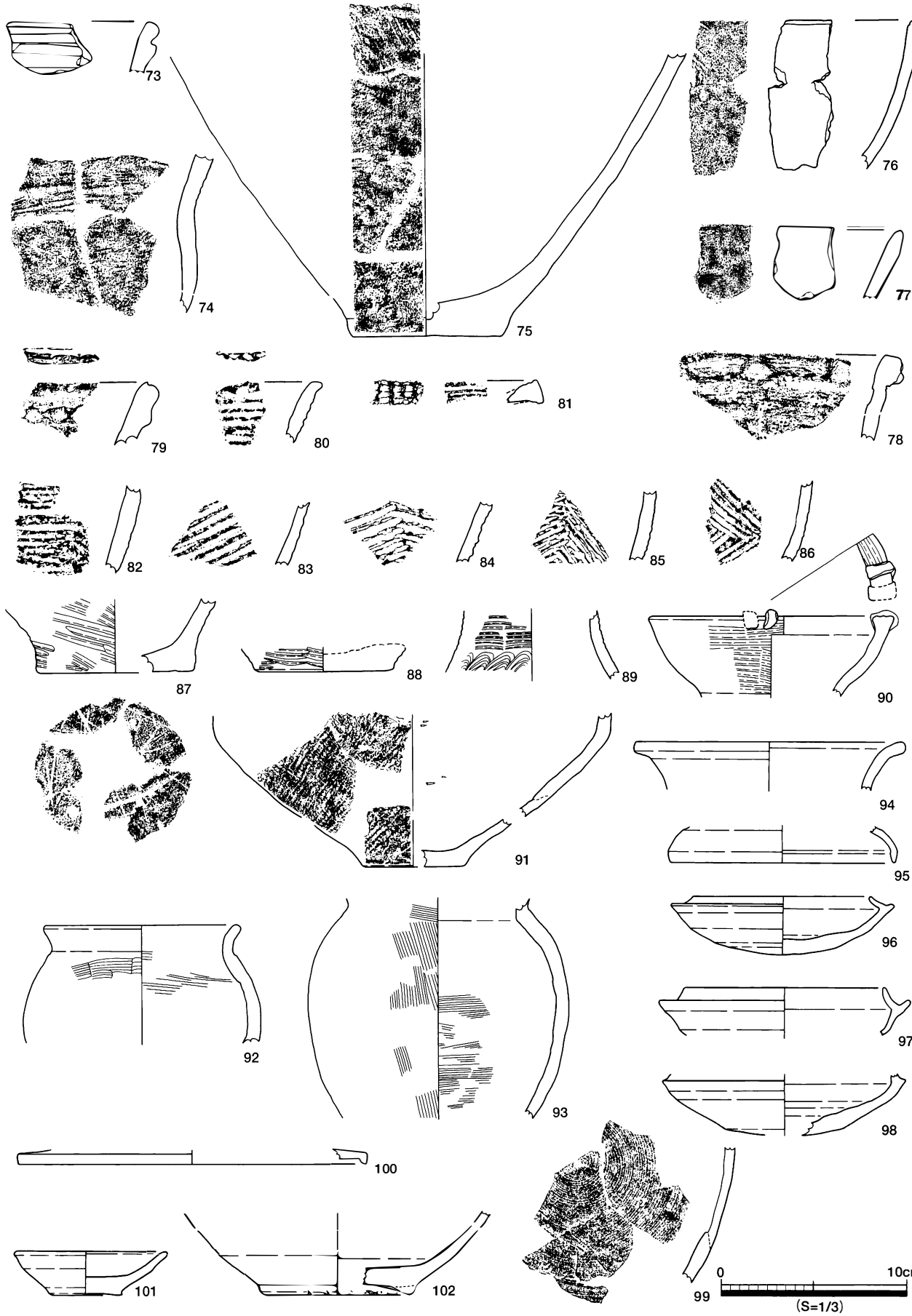
第9図　堰　平面図・断面図



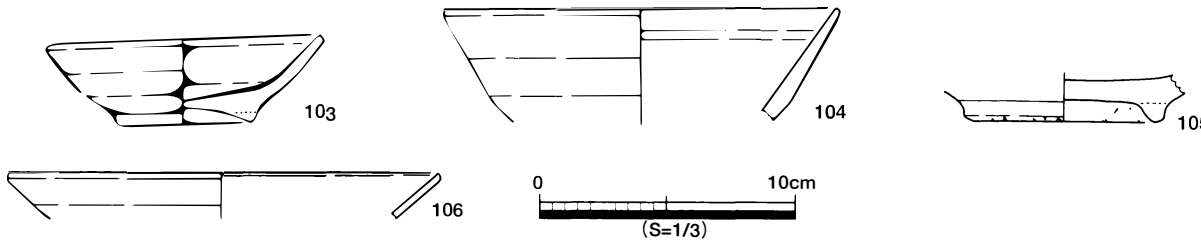
第10図　01溝　出土遺物①



第11図　01溝　出土遺物②



第12図　自然流路　出土遺物①



第13図　14溝、02溝　出土遺物

14溝（第７・８・13図）

４Ｄに位置し、自然流路直上で検出している。調査区の西側へ続く。上面は削平されている。01溝の南側で検出したため、01溝に平行する導水施設である可能性が高い。東側は撹乱を受けており、Ⅰ区のSR1の付施設SW1-Nとは連続しないが、同じ性格のもので取水のための溝であると考えられる。幅1.4m、深さ0.18mで、自然流路を切っている。出土遺物は12世紀中頃の山茶碗（103～105）、14～15世紀の山茶碗（106）、土師器、縄文土器等である。

02溝（第13・14図）

４Ｂ、５Ａ・Ｂに位置し、地山直上で検出した。幅0.26m、深さ0.08mで、東側は調査区外に続く。05溝に平行しているため、時期が同じである可能性が高い。14～15世紀の山茶碗が出土している。

03溝（第14図）

５Ｂ・Ｃ、４Ｃ・Ｄに位置し、地山直上で検出した。幅0.43m、深さ0.08mで、東側は調査区外に続く。遺物は出土していないが、05溝に平行しているため、時期が同じである可能性が高い。

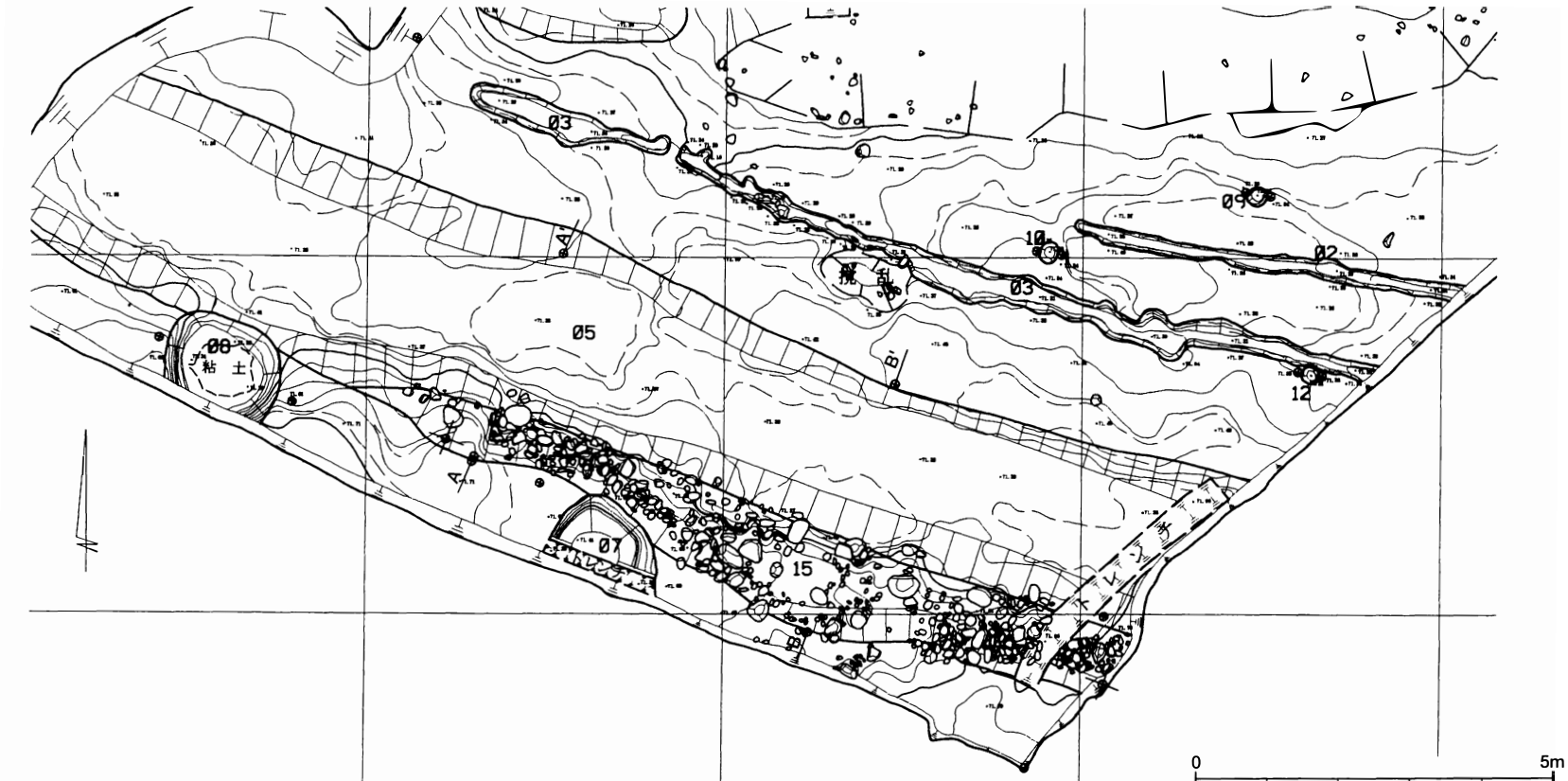
15溝（第14～17図）

５Ｂ～Ｄ、６Ｂ・Ｃに位置する。Ａ－Ａ′のあたりから05溝に切られて自然消滅しており、05溝よりも浅い。残存部で幅1.5m、長さ12m、深さ0.15mである。地山の礫のほとんどが被熱し、煤が付着している。被熱礫は散在している。05溝に切られている部分には礫も残存しない。

出土遺物から15溝は15世紀ごろのもので、05溝とは時期差がほとんどないと考えられる。掲載遺物は、弥生時代前期の土器（107）、８世紀の須恵器（108～110）、灰釉陶器（111）、12～13世紀の山茶碗（112～116）、14～15世紀の山茶碗（117～130）、時期不明国産白磁碗（131）、古瀬戸（132～143）、15世紀前半の陶器（132・133）、15世紀後半の陶器（136～140）、17世紀の天目茶碗（144）である。

05溝（第14・18図）

５Ｃ～Ｆ、４Ｄ・Ｅに位置する。北西方向と南東方向の調査区外に続いていく。幅2.4m、深さ0.3mで、北西方向に傾斜する。地山は拳大の礫が自然堆積する礫層で、礫が遺構全面に敷かれているように見える。礫の推積状況は、溝の北側半分に拳大以下の小形の石が密にみられ、南側半分には人頭大の川原石がある。南東隅はⅢ層中から検出しはじめたが、中央付近から北西方向は地山で検出した。Ｂ-

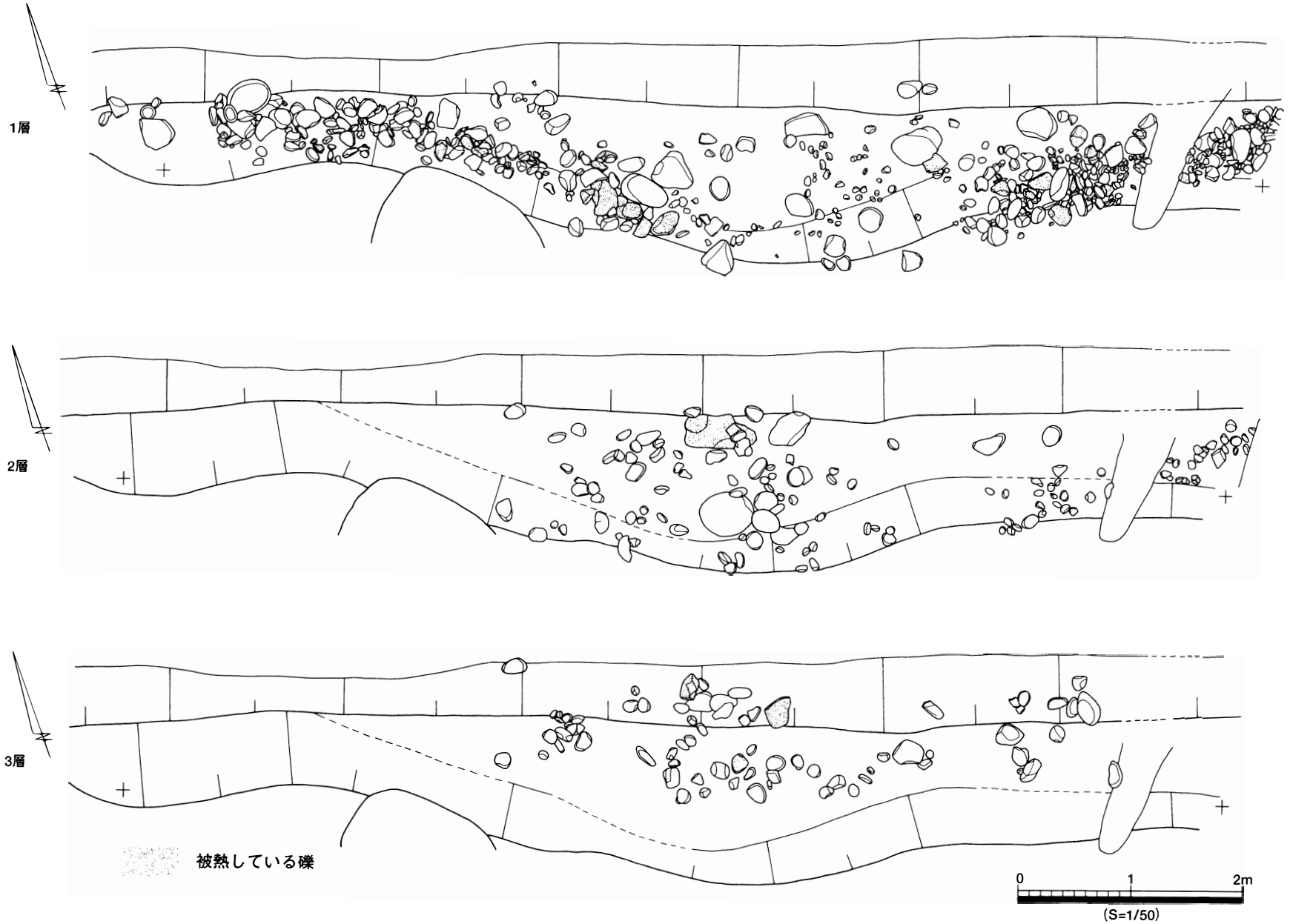


① 10YR3/2　黒褐　シルト 均質の砂粒を含む。地山土を斑に含む。しまりあり、粘性弱い
② 10YR3/2　黒褐　シルト 幅数mm、長さ5cm程度のレンズ状に地山土がわずかに堆積。しまりあり、粘性弱い。
③ 10YR3/3　暗褐　シルト 地山土を斑状に①より若干多く含む。しまりややあり、粘性弱い。
④ 10YR4/2　灰黄褐　シルト 地山土と微粒状の褐鉄鉱を含む。しまりあり、粘性弱い。

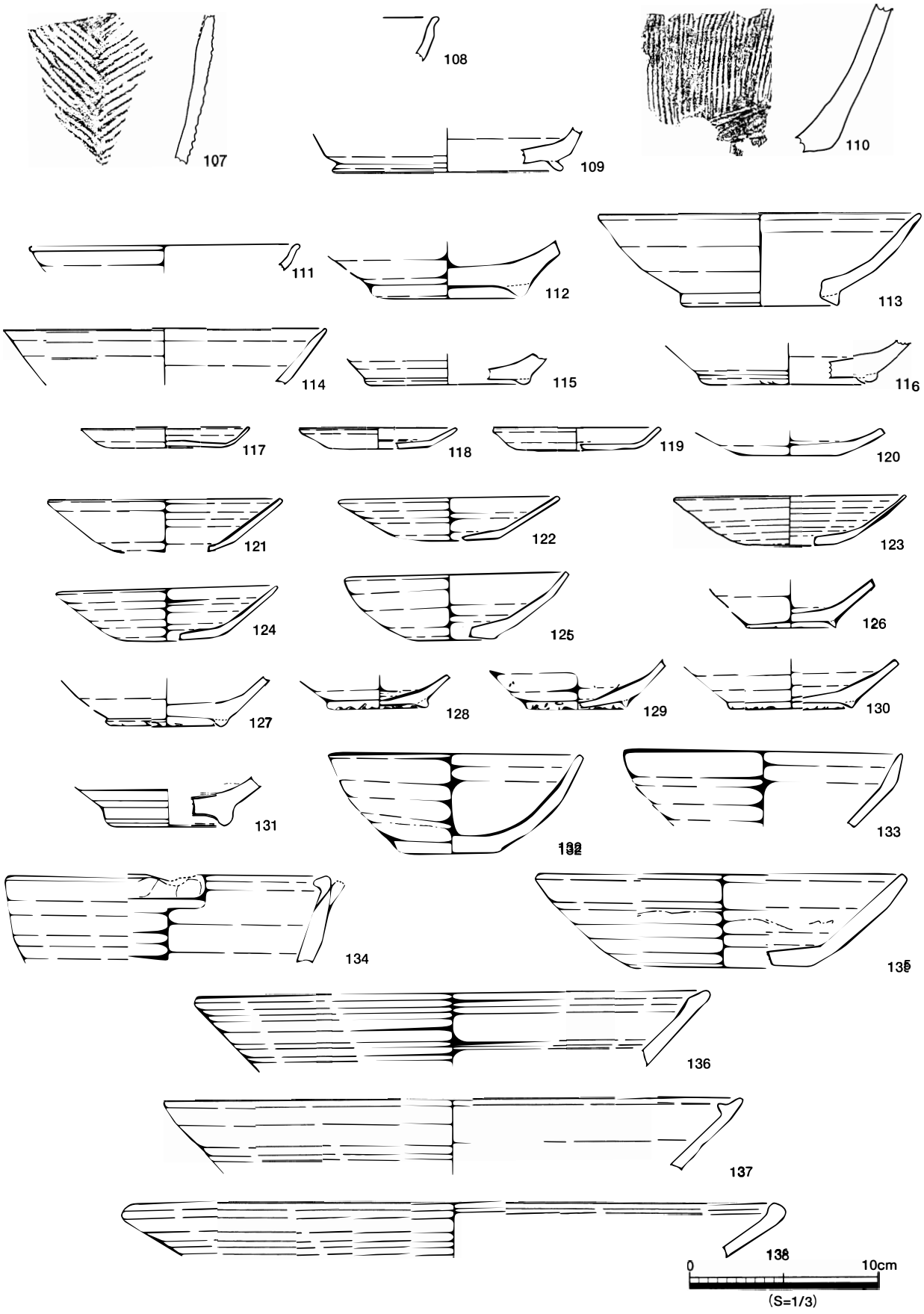
① 10YR3/2　黒褐　シルト 均質の砂粒を含む。地山土を斑に含む。しまりあり、粘性弱い
② 10YR3/2　黒褐　シルト 幅数mm、長さ5cm程度のレンズ状に地山土がわずかに堆積。しまりあり、粘性弱い。
③ 10YR3/3　暗褐　シルト 暗褐色シルト中に地山砂粒が混じる。しまりあり、粘性弱い。
④ 10YR4/2　灰黄褐　シルト 地山土と微粒状の褐鉄鉱を含む。しまりあり、粘性弱い。

0　1　2m
(S=1/20)

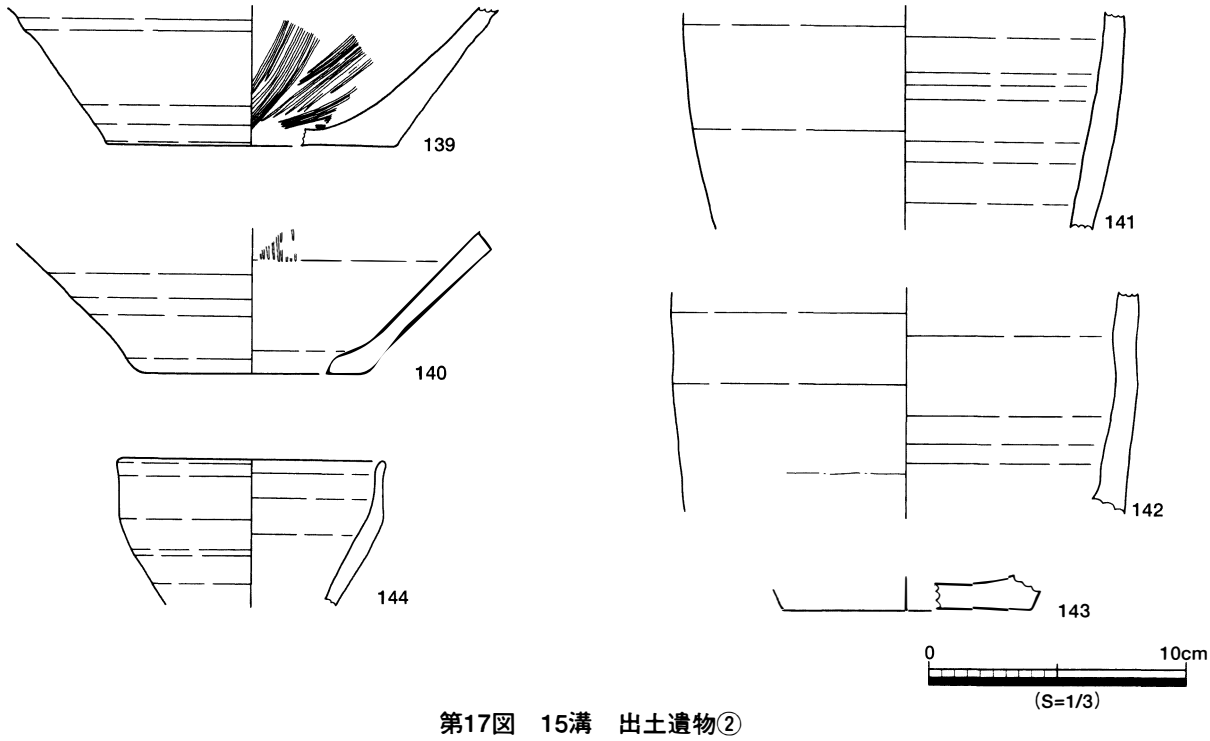
第14図　05・15溝　平面図・断面図



第15図　15溝　礫平面図



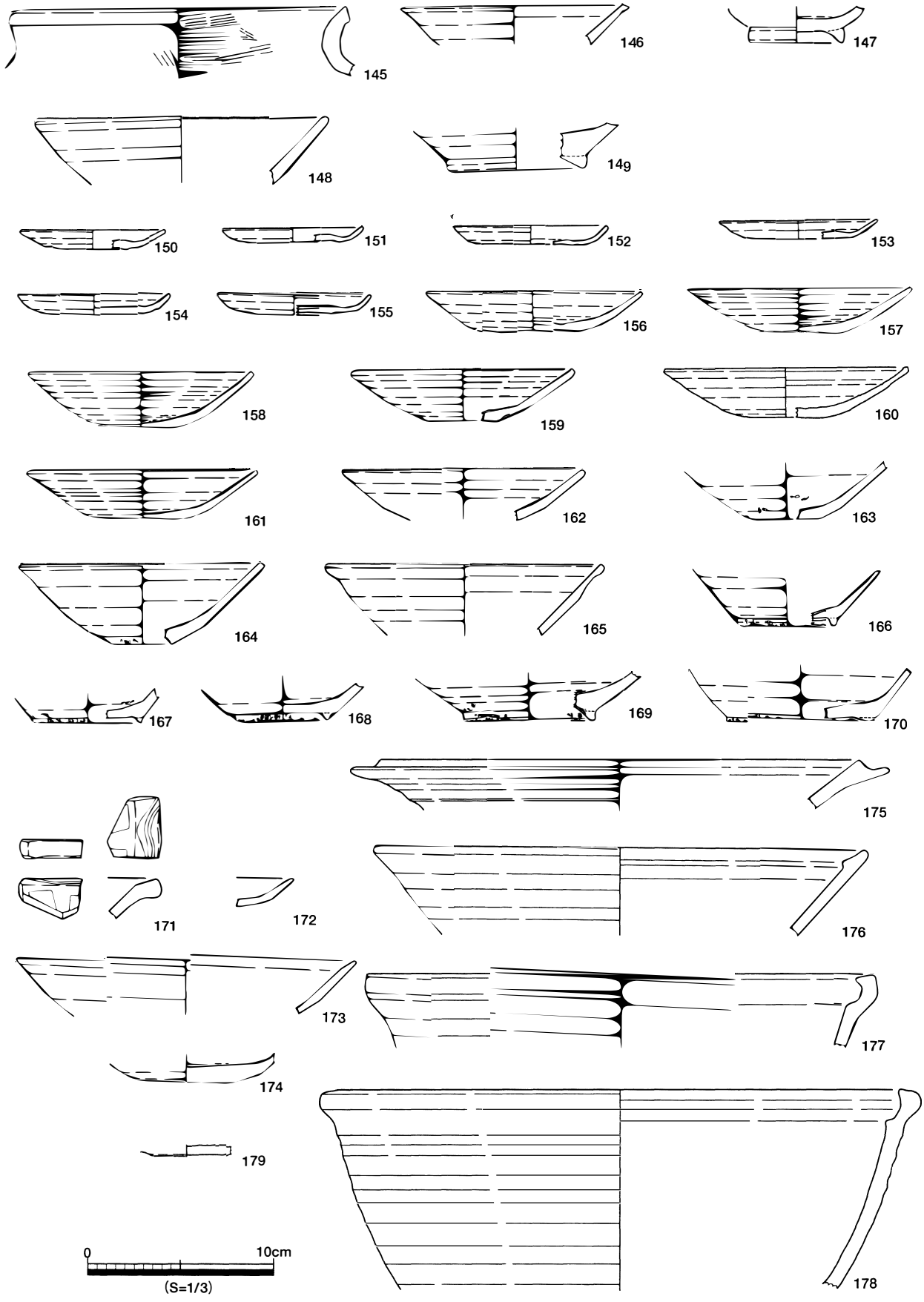
第16図　15溝　出土遺物①



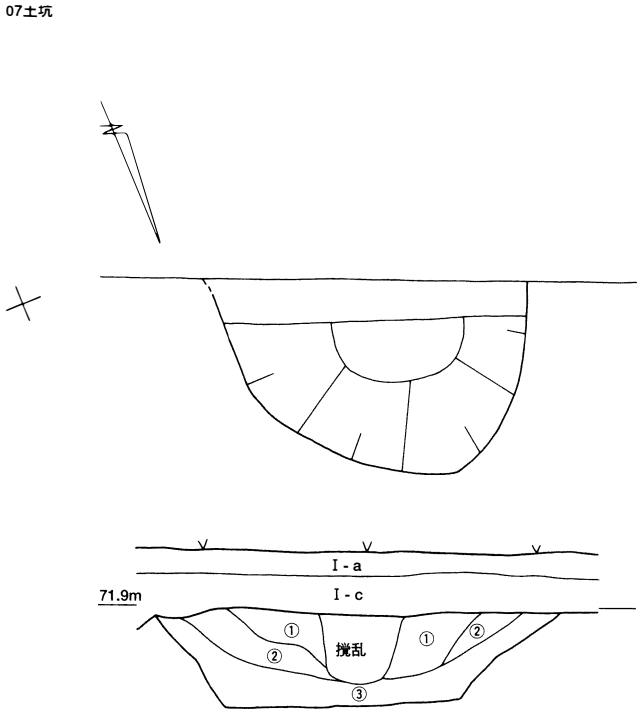
第17図　15溝　出土遺物②

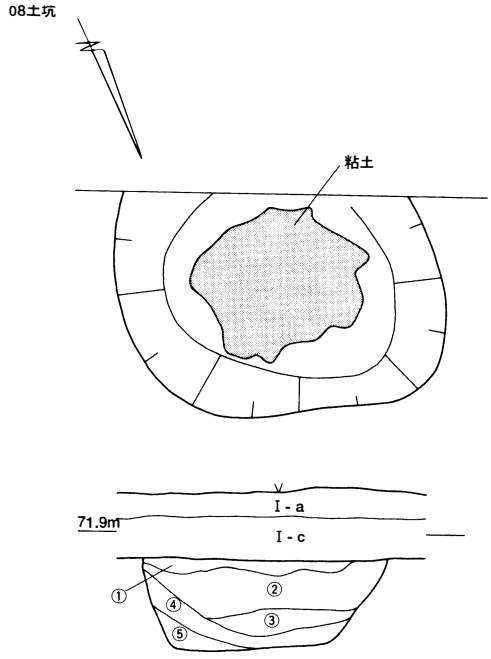
表2　遺構一覧

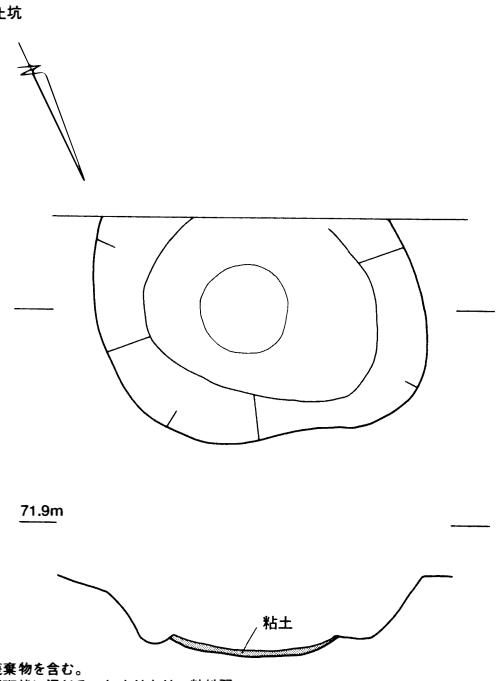
	遺構名	グリッド	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	時　期	出土遺物	備　　考
1	01溝	2B・C、3A~D	(13.0)	9.60	0.50	12~13世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	NRを利用してつくる。
2	堰	2・3B	(6.5)	1.5~3.0	0.50	12~13世紀		01溝に直交。01溝の1・2層に構築。
3	NR	2B・C、3A~D	(13.0)	10.00	1.80	7 世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	01溝の下から検出。
4	14溝	4D	(2.7)	1.40	0.18	12~13世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	01溝に平行。
5	02溝	4B、5A・B	5.5	0.26	0.08	15世紀	山茶碗、縄文土器、土師器	05溝に平行。
6	03溝	5B・C、4C・D	13.2	0.43	0.08	15世紀		05溝に平行。
7	15溝	5B~D、6B・C	(11.5)	1.50	0.30	15世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	05溝に切られる。
8	05溝	5C~F、4D・E	(16.5)	3.60	0.40	15世紀	縄文土器、弥生土器、土師器、石器、須恵器、山茶碗、中世陶器	15溝を切る。
9	07土坑	5D	2.10	(1.0)	0.50	近世	土師器、石器	15溝を切る。
10	08土坑	5E	1.70	(1.3)	0.50	近世	出土遺物無し。	05溝を切る。底部に粘土版。
11	09 小穴	4B	0.30	0.22	0.03	近世以降		
12	10 小穴	4・5C	0.28	0.28	0.06	近世以降		
13	12 小穴	5B	0.22	0.22	0.15	近世以降		03溝を切る。



第18図　05溝　出土遺物

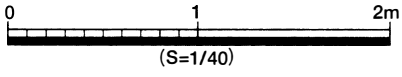






耕作土	Ⅰ-a	10YR3/3	暗褐	
耕作土	Ⅰ-c	10YR3/2	黒褐	現代の廃棄物を含む。
	①	10YR3/3	暗褐	均質の砂粒を含むしまりややあり、粘性弱い。
	②	10YR4/2	灰黄褐	暗褐色土に地山が斑状に混じる。しまりあり、粘性弱い。
	③	5Y4/2	灰オリーブ	地山土を主体とし暗褐色土を少量含む。しまりややあり、粘性弱い。
	攪乱			現代の廃棄物、ビニール片等を含む。

耕作土	Ⅰ-a	10YR3/3	暗褐	
耕作土	Ⅰ-c	10YR3/2	黒褐	現代の廃棄物を含む。
	①	10YR3/3	暗褐	地山土が斑状に混じる。しまりあり、粘性弱い。
	②	10YR3/2	黒褐	1cm大の小礫をまばらに含む。しまりややあり、粘性弱い。
	③	10YR3/3	暗褐	1cm大の小礫をまばらに含む。地山土をまばらに含む。
	④	10YR3/2	黒褐	1cm大の小礫をまばらに含む。地山土を斑状に含む。しまりややあり、粘性ややあり。
	⑤	10YR4/2	灰黄褐	暗褐色土と地山土が混在、2～3cm大の小礫をまばらに含む。しまりややあり、粘性ややあり。
	粘土	5Y7/2	灰白	



第19図　07土坑、08土坑　平面図・断面図

B′と東壁の断面から溝が切り合っていることを確認した。やや浅い15溝を切って05溝がつくられている。

出土遺物は14～15世紀の山茶碗（150～170）が多く出土している。この他には11世紀後半～12世紀初頭の山茶碗（148・149）、12～13世紀の山茶碗、土師器皿（172・173）、古瀬戸（174～178）、常滑、須恵器、灰釉陶器（146・147）、７世紀の土師器（145）、縄文土器等がある。出土遺物から05溝は15溝と時期差がほとんどなく、15世紀の遺構と思われる。少数だが05溝から17世紀の遺物が出土している。

１層から出土した171は、14世紀の龍泉窯系の青磁盤で、野笹Ⅰの1054（表採）と、野笹Ⅱの328（1d出土）は同一個体の可能性が高く出土位置も近い。

07土坑（第19図）

５Dに位置し、調査区南側に続く。調査区の中では一番標高が高い所に位置する。地山面で検出しているが、地山は耕作で削平されている。断面中央の撹乱には現代の廃棄物が混入している。15溝を切っており、08土坑と性格が類似しているため、17世紀以降のものと考える。埋土は３層に分層され、下層にいくにしたがって地山の砂が混じる。

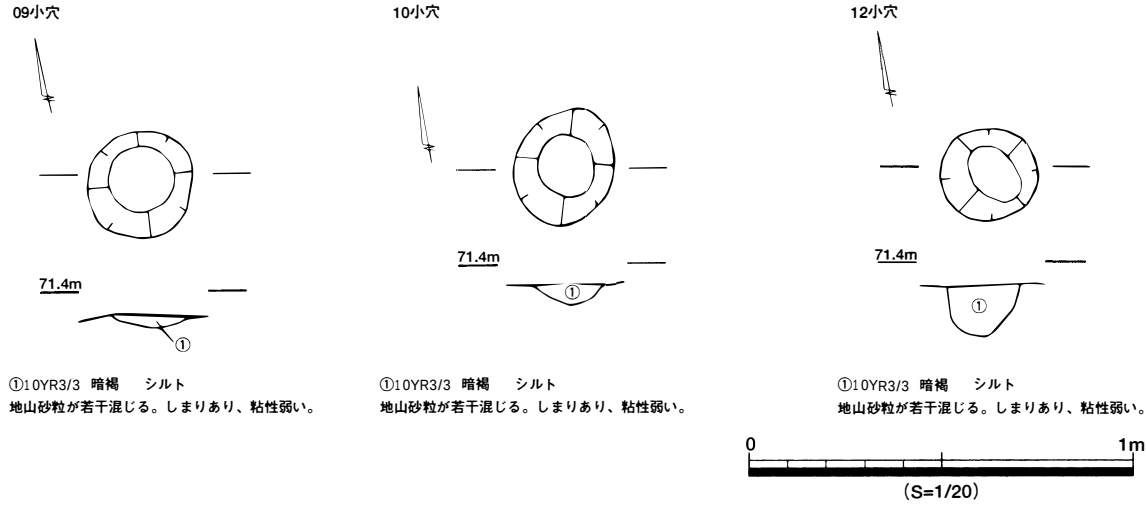
遺物は１・２層から縄文土器、土師器、フレイク、石鏃が出土している。

08土坑（第19図）

５Eに位置する。調査区の南側に続く。07土坑と同様に耕作で削平されている。底部には１ｍ×0.7mの範囲で厚さ3cmの粘土が版状に貼ってある。遺物は出土していない。05溝を切っているため17世紀以降のものと考える。

09・10・12小穴（第６・14図）

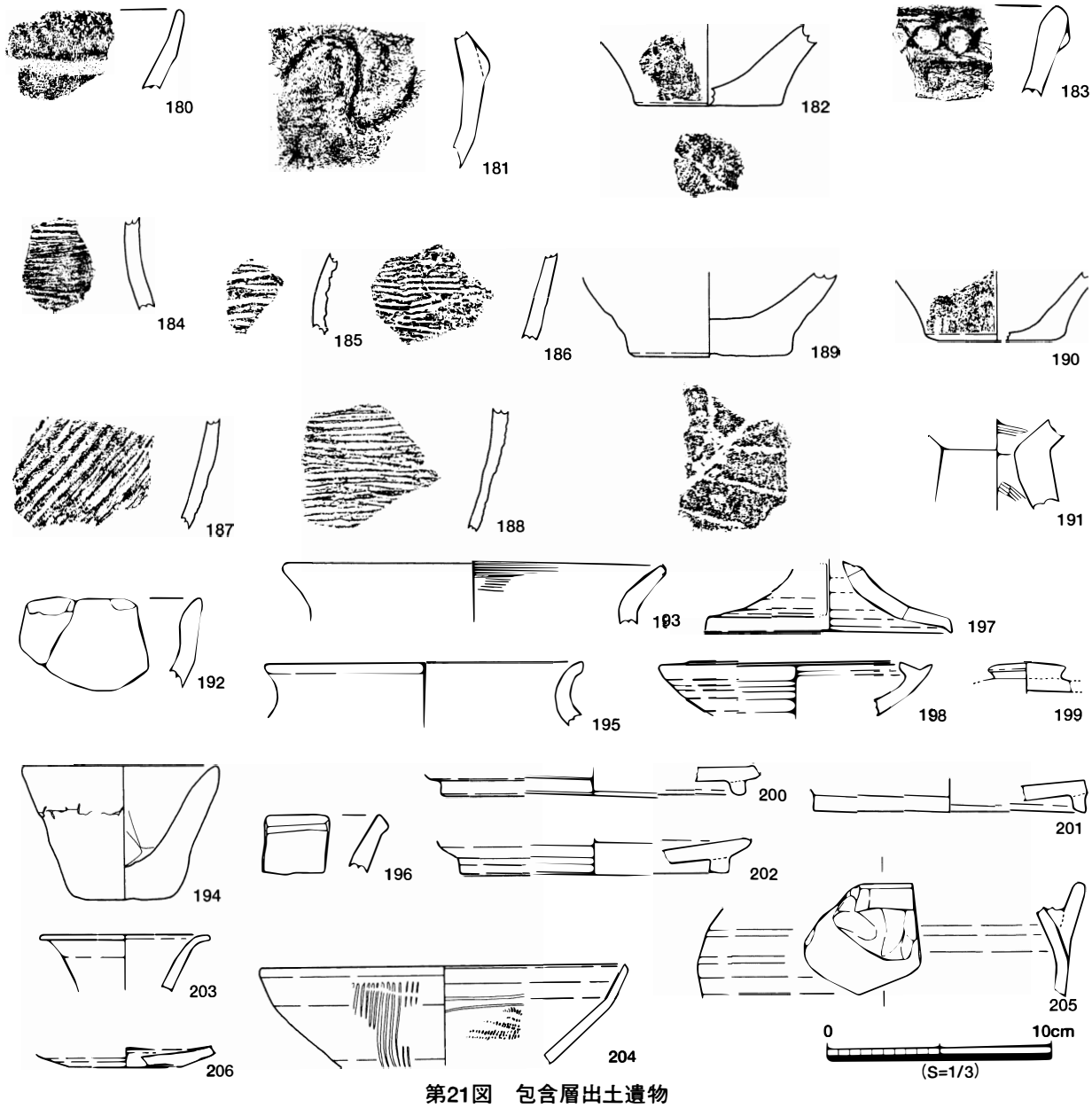
09小穴は４B、10小穴は４・５C、12小穴は５Bに位置する。これらの小穴は大きさや深さが類似することからほぼ同時期のものと考えられるが、12小穴が03溝を切っていることから近世以降の新しい時期のものと思われる。



第20図　P09、P10、P12　平面図・断面図

第 3 節　包含層出土遺物

包含層から出土した遺物は、破片数の多いものから、縄文時代中期の土器（180・181）、縄文時代晩期の土器、14～15世紀の山茶碗、土師器（192～196）、弥生時代前期～中期の土器（183～190）、6～8 世紀の須恵器（197～202）、陶器（205・206）、土師器皿等である。輸入磁器は 2 点出土しており、204は12世紀の同安窯系青磁碗である。194の土師器鉢は輪積み痕が残り器壁も厚い。縄文土器、弥生土器、須恵器の量は01溝・自然流路に次いで多く出土しており、当調査区では遺構は検出されていないが、北からの流れ込みか、中世以降の撹乱にあった可能性が考えられる。



第21図　包含層出土遺物

野笹遺跡の剥片石器群について

1.はじめに

①属性表について

石器の属性表は石器の記述の基本となる台帳である。この属性表を分析することで、野笹遺跡の石材・器種・剥離技術の関係を明らかにできる。

本稿では図化対象とした石器について属性表を作成し、クロス集計を行うことで属性間の有意な結びつきを明らかにする手順をとる。属性表の項目で特に石器の製作技術に関係のある項目は次の通りである。

刃部属性：刃部の剥離技術の種類かもしくは使用痕の有無を記入。

形態形成加工：石器の形態を形づくる際の剥離技術の種類を記入。

剥片剥離技術：剥片石器の素材剥片の剥離技術の種類を記入。

素材剥片形態：剥片石器の素材の種類を記入。石核の場合、この欄は剥離された剥片の種類を記入。

原石の種類：角礫・亜角礫・亜円礫・円礫のいずれに原石が相当するのかを記入。

②出土状態と分析の方針の決定

今回の調査分で出土した野笹遺跡の石器群は、中世・近世の遺物とともに出土したものが殆どであり、中世・近世時代により攪乱された層に含まれていた石器である。このため、時期の判明する良好な出土状態の石器群は認められなかった。中には磨製石庖丁のように明らかに弥生時代の石器が含まれているが、その他の石器は縄文・弥生の石器が混在しているようである。ただし、混在している下呂石製の石器群の中に、過去分析した剥離技術とデザインのデータより数点は時期の推定が可能な石器が認められた。したがって、まず下呂石製の剥片石器群については剥離技術の記述を中心に分析を行った。その他の石器については器種ごとに所見を加えた。なお、磨製石庖丁については、使用痕分析を行い、石庖丁が実際に使用されたものであることを確認している（使用痕分析P42を参照）。

③石材の概要

野笹遺跡は剥片石器の素材が多く、石鏃・石錐等小形の剥片石器については下呂石が大多数で、わずかに黒曜石とチャート製を含む。打製石斧は合計20点出土しており、ホルンフェルス製・泥岩製である。打製石斧は遺跡内で未成品が認められず遺跡外から持ち込まれていると考えられる。他に粘板岩・泥岩製の磨製石庖丁・大型直縁刃石器等が出土している。

以下に、まず野笹遺跡の石材ごとの石器製作作業の概要をまとめてみた。

表3　石材別石器製作作業概要

	石材	量	石核	剥片剥離技術	石核消費の程度	製作される石器
大量母岩搬入資料	下呂石	多	卵大の円礫	HvD中心 HD有り	低い	石鏃・尖頭器状石器・削器等
少量母岩搬入資料	チャート	極少	不明	不明	不明	石鏃・削器
少量母岩搬入資料	黒曜石	極少	3cm程度の亜角礫	作業なし	—	使用痕剥片
完成品搬入資料	ホルンフェルス・泥岩	少	なし	作業なし	—	打製石斧
完成品搬入資料	粘板岩・泥岩	極少	なし	作業なし	—	磨製石包丁・大型直縁刃石器

完成品搬入資料：遺跡内での石器製作行為の認められない搬入された石器。
作業なし：遺跡内での剥片剥離作業の行為が認められない状態。

2.分析用語について

本稿で使用する分析用語についてここで説明する。

①剥離技術についての説明

剥離技術は右手の技術：ハンマーと身振り／左手の技術：素材の持ち方に分解できる（角張2002）。石器の製作工程段階に応じて、本稿では剥片剥離技術もしくは二次加工技術と呼んでいる。それぞれ内容は同じである。

ただし、剥離技術を理解するためには、亀裂の開始から始まり、末端へ力が抜けるまでの過程における剥片の形成過程を理解する必要がある。特に、剥離の発生部分（剥離開始部）の状態は非常に重要で、そこにはハンマー材質や先端形状を復原する情報が詰まっている。剥離の発生部分の型にはヘルツ型・楔型・曲げ型の三種があるが（第22図１、山田・志村1989）、このうちハンマー材質を判定する際に有効なのはヘルツ型と楔型である。より石核に対し変形しないハンマーを用いれば、ヘルツ型の発生部に形成されるコーンは明瞭にハンマー形状を残すように盛り上がる。この物理現象を利用して設定したのが、本稿のソフトハンマー（S）／ハードハンマー（H）の区別であり、あくまでコーンの形状と盛り上がり度合いから判定された区別である（第22図２～５、太田2003）。

そして変形しないハンマーの強い圧縮の力や先の尖るハンマーの場合は楔型を生ずる。なお、楔型は石核の縁辺から打点が離れている場合や石核の縁辺角が90度以上の場合、そして両極打撃の場合はヘルツ型よりも優勢に生じやすいことも指摘されている（山田・志村1989）。この物理現象を利用して本稿で設定したのが、ハードハンマーの垂直打撃（HvD）である。これはハンマーを石核の外側に抜くことで剥離を発生（ヘルツ型がここでは生じる）させる方法ではなく、薪割りのように打点の真下方向に亀裂を生じさせる打撃方法である。このため、ヘルツ型と同様かもしくはそれ以上の高い圧縮力を剥離の際必要とする。以上までが、本稿でのハンマー材質の特定基準である。

次に、身振りの特定基準を説明する。石器製作づくりにおいて身振りは直接・間接・押圧の三種しかない（角張2002）。剥離面に残された属性からこれら身振りを特定するのに有効な属性を抽出することができれば、確率的に身振りの特定が可能となる。身振りの特定で注目すべき属性は、打点の位置（剥離面の並び）・打面の厚さ・剥離軸の軌跡・剥離面の規模の4つである（第22図６・７）。この属性からハンマーを直接振り下ろす直接打撃（D）、パンチを石器に予めあてがいパンチを打撃する間接打撃（I）、ハンマーを予めあてがい剥離する押圧剥離（P）を特定した。目視でハンマーを振り下ろせば力を多く加えることはできたとしても、ハンマーの当たる箇所はコントロールできずにバラバラとなる。剥離面は大きいものの不整形で、打点の位置はバラバラである。一方で予めパンチなりハンマーなりを石器に当てておけば、ねらった場所を剥離することが可能となる。その分、打点の位置や剥離面、そして打面の厚さは揃うことになる。ハンマーを予め当てている分、力は打点から真っ直ぐに抜けやすいため、剥離軸は直線状になりやすい。ここまでが、身振りの特定基準の概要であり、角張淳一氏（角張2002）に準拠している。

以上の基準でハンマー材質・身振りを特定し、属性表に記入する。

②器種の用語について

ここでは本稿で使用する器種名のうち、特に必要なものを挙げている。これ以外の器種については標準的な器種名を使用した。

図22−1　剥離開始部のタイプ

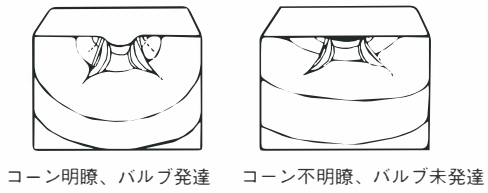


図22−2　コーンとバルブのタイプ
（剥離開始部のタイプがコーンタイプの場合）

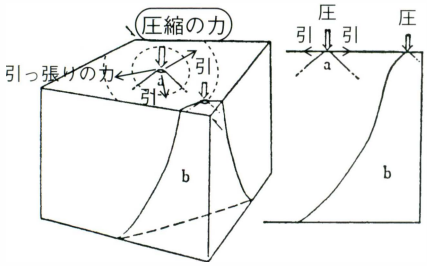
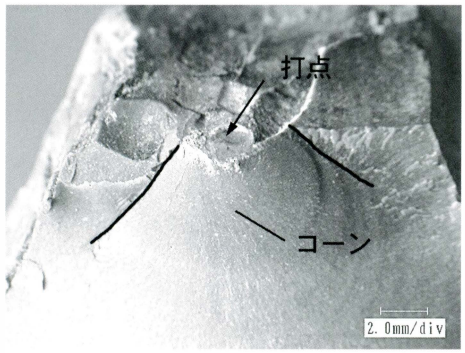
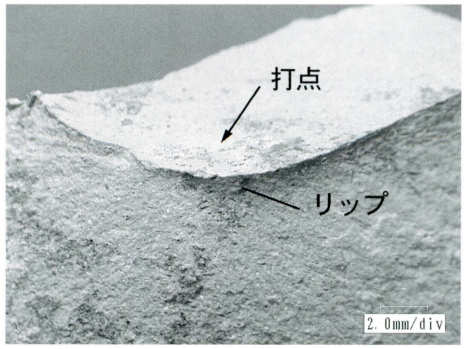


図22−3　「割れ円錐」のモデル
（松沢 1979を一部改変）



←石材は頁岩である。打点の直下に形成されたコーン（円錐）が明瞭である。鉄は、明らかに頁岩に対し変形しない材質である。この場合、石核内部により大きな圧縮の力を与えることができるため、明瞭なコーンを形成する。

図22−4　かなづちをハンマーとして剥離した場合



石材は頁岩である。打点の直下に形成されたコーン（円錐）が不明瞭である。またリップが形成されている。鹿角が頁岩よりも変形する材質のため、鹿角ハンマー自身の変形のためにエネルギーの大半が使われてしまう。故に石核内部に充分な圧縮の力を加えることができず、コーンを明瞭に形成するまでに至らない。

図22−5　鹿角をハンマーとして剥離した場合

（＊図22− 4・5 については、太田公彦氏（太田2001）の先行研究がある。）

第22図　剥離技術についての説明図

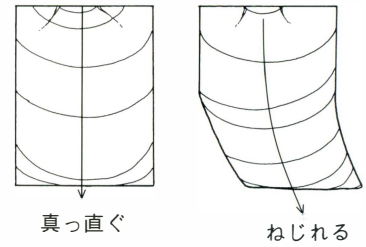


図22−6　剥離軸のタイプ

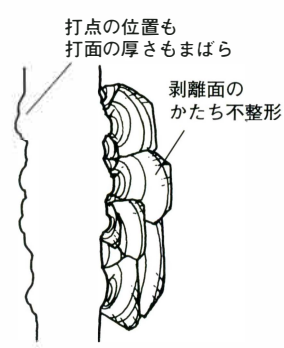


図22-7-1　直接打撃

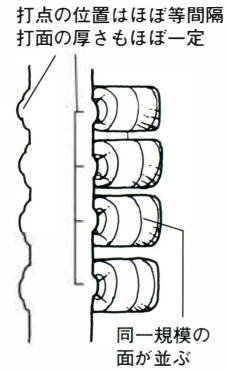


図22-7-2　間接打撃

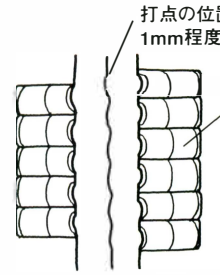


図22-7-3　押圧剥離

図22−7　直接・間接・押圧の打点の位置・剥離面の諸特徴（模式図）

HvD剥片：ハードハンマーの垂直打撃で剥離された剥片のことを指す。

矩形剥片：縦長・横長剥片のどちらにも属さないような剥片。

3.下呂石製剥片石器群の分析

下呂石製剥片石器群の分析において説明する剥離技術には、(1) 目的的剥片を剥離するための剥離技術（剥片剥離技術)、(2) 石器の形態を形成するための剥離技術（形態形成加工の技術)、(3) 石器の刃部を形成するための剥離技術（刃部形成加工の技術)、の三種類がある。(2) と (3) はいわゆる二次加工技術と呼ばれる部類のものである。ここでは (1) の剥片剥離技術について説明する。

まず剥離技術を、前節の内容に従って設定する。記号は角張2002に準拠する。

HD：ハードハンマーの直接打撃である。

HvD：ハードハンマーの垂直打撃である。

SP：ソフトハンマーの押圧剥離である。

広SP：SPの幅の広いもので、剥離開始部の幅が4～6mm程度である（文章中図版1 P34参照)。

S'P：硬いソフトハンマーの押圧剥離である。

広S'P：S'Pの幅の広いもので、剥離開始部の幅が4～6mm程度である。

SD：ソフトハンマーの直接打撃である。

S'D：硬いソフトハンマーの直接打撃である。

SI：ソフトハンマーの間接打撃である。

S'I：硬いソフトハンマーの間接打撃である。

素刃：刃部加工のない場合に記入。

MF：使用により生じた剥離痕が認められる場合、記入。

①下呂石製剥片石器群の剥片剥離技術と二次加工技術について

〔原石・石核・両極石核について〕

野笹遺跡の下呂石の原石種は、確認できるものに限り卵大の円礫（第25図242・243）のみである。

石核（第24図230～233）・両極石核（第24・25図234～240）では11点中9点がハードハンマーの垂直打撃による剥片剥離技術で、2点がハードハンマーの直接打撃であった（表４)。野笹の剥片剥離技術はハードハンマーによる垂直打撃が卓越している状況が推定される。下呂石製剥片石器群では両極石器の多さが目立つが、これはハードハンマーの垂直打撃による剥片剥離が卓越していることの裏づけ現象であると考えられる。剥離された剥片の素材形態はハードハンマーの垂直打撃の剥片（HvD剥片）8点、ハードハンマーの直接打撃（HD）の矩形剥片2点で、やはりHvD剥片が卓越している（表５)。

〔二次加工のある石器について〕

さて、二次加工をもつ石器をみてみよう。刃部形成の加工は、ソフトハンマーの押圧剥離（SP）12点、硬いソフトハンマーの押圧剥離（S'P）4点、幅広のソフトハンマーの押圧剥離（広SP）3点、広SP+SIが1点、広S'P+S'Iが1点である。残りは特に加工のないものや直接打撃の単独加工である（表６)。形態形成の加工は、SPが12点、S'Pが4点、広SPが3点、S'Dが3点、なしが3点で、これらが主体となる（表７)。

では次に、二次加工の技術の刃部形成加工と形態形成加工の組み合わせを分析しよう（－の前が刃

部形成加工、後が形態形成加工。以下同じ）。集計の結果、a）SP-SPが12点、b）S'P-S'Pが4点、c）広SP-広SPが3点、d）素刃+mf-S'Dが1点、e）S'D-S'Dが1点、f）広SP+SI-広SP+SIが1点、g）広S'P+S'I-広S'P+S'Iが1点であった（表８）。このうち、a）～c）は凹基鏃や有茎鏃、そして石鏃未成品等の二次加工技術である。dとe）は削器の二次加工技術である。f）～g）は石鏃の大形版である尖頭状石器の二次加工技術である。なお、形態形成加工にHvDが認められる石器（第23図226・227）は石鏃の素材と推定されるものであり、二次加工に両極打撃が行われている例である。

さらに、形態形成加工と素材の剥片剥離技術の組み合わせを分析すると、29点17点が組み合わせ不明であるが、SP-Dが2点、広SP-Dが1点、S'P-HvDが1点、広SP+SI-Dが1点、HvD-HvDが2点という結果を得た（表９）。つまり、石鏃関連資料には直接打撃かもしくは垂直打撃で剥離された素材剥片が使われているという傾向が判明し、これは先の石核・両極石核の剥片剥離技術と同じ傾向になった。

表4　器種と剥片剥離技術の関係

	剥片剥離技術			
器種	HD	HvD	適用外	総計
原石			3	3
石核	2	2		4
両極石核		7		7
総計	2	9	3	14

表5　器種と素材剥片形態の関係

	素材剥片形態（石核の場合、剥離される剥片形態）					
器種	HvD	HvD剥片	矩形剥片	適用外	不明	総計
原石				3		3
石核	1	1	2			4
両極石核		6			1	7
総計	1	7	2	3	1	14

表6　石材・器種と刃部属性の関係

		刃部属性								
石材	器種	SP	広SP	広SP＋SI	広S'P+S'I	S'P	素刃＋mf	S'D	なし	総計
チャート	凹基鏃	1								1
	有茎鏃	2								2
	削器					1				1
チャート 計		3				1				4
下呂石	凹基鏃	4	1							5
	有茎鏃	4								4
	石鏃未成品	4	1			1				6
	尖頭器状石器		1		1					2
	尖頭器状石器未成品			1						1
	二次加工剥片					3			1	4
	削器						1	1		2
	使用痕剥片						1			1
	両極石器								2	2
	作業面再生剥片								1	1
	剥片								1	1
下呂石 計		12	3	1	1	4	2	1	5	29
黒曜石	使用痕剥片						1			1
黒曜石 計							1			1
総計		15	3	1	1	5	3	1	5	34

表7　石材・器種と形態形成加工の関係

		形態形成加工								
石材	器種	SP	広SP	広SP＋SI	広S'P＋S'I	S'P	S'D	HvD	なし	総計
チャート	凹基鏃	1								1
	有茎鏃	2								2
	削器								1	1
チャート 計		3							1	4
下呂石	凹基鏃	4	1							5
	有茎鏃	4								4
	石鏃未成品	4	1			1				6
	尖頭器状石器		1		1					2
	尖頭器状石器未成品			1						1
	二次加工剥片					3	1			4
	削器						2			2
	使用痕剥片								1	1
	両極石器							2		2
	作業面再生剥片								1	1
	剥片								1	1
下呂石 計		12	3	1	1	4	3	2	3	29
黒曜石	使用痕剥片								1	1
黒曜石 計									1	1
総計		15	3	1	1	4	3	2	5	34

表8　石材・刃部属性と形態形成加工の関係

		形態形成加工								
石材	刃部属性	SP	広SP	広SP＋SI	広S'P＋S'I	S'P	S'D	HvD	なし	総計
チャート	SP	3								3
	S'P								1	1
チャート 計		3							1	4
下呂石	SP	12								12
	広SP		3							3
	広SP＋SI			1						1
	S'P					4				4
	広S'P＋S'I				1					1
	素刃＋mf						1		1	2
	S'D						1			1
	なし						1	2	2	5
下呂石 計		12	3	1	1	4	3	2	3	29
黒曜石	素刃＋mf								1	1
黒曜石 計									1	1
総計		15	3	1	1	4	3	2	5	34

表9　石材・形態形成加工と剥片剥離技術の関係

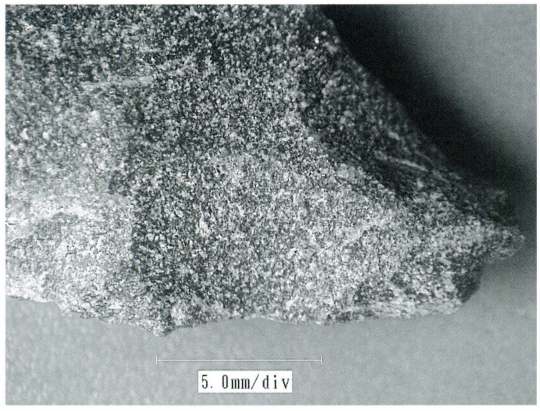
		剥片剥離技術				
石材	形態形成加工	D	HD	HvD	不明	総計
チャート	SP				3	3
	なし			1		1
チャート 計				1	3	4
下呂石	SP	2		1	9	12
	広SP	1			2	3
	広SP＋SI	1				1
	広S'P＋S'I				1	1
	S'P			1	3	4
	S'D	1	1		1	3
	HvD			2		2
	なし		1	1	1	3
下呂石 計		5	2	5	17	29
黒曜石	なし	1				1
黒曜石 計		1				1
総計		6	2	6	20	34

②下呂石製剥片石器群の二次加工技術とつくられる石器の関係

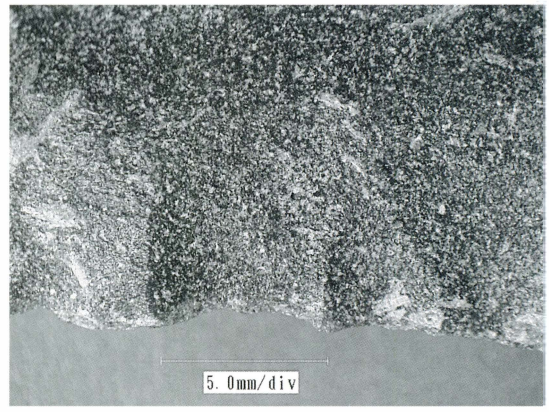
次に①で示した二次加工技術の特徴とつくられる石器の関係についてみてみることにする。SP-SPは12点中12点とも未成品を含む石鏃関連資料で認められる（第23図208～210、212、213など）。つまり、野笹遺跡では、押圧剥離が石鏃の剥離技術として強く結びついているのである。

二番目に、広SPについてみてみよう。広SP-広SPは3点（第28図268、269、276）とも凹基鏃や尖頭器状石器に認められるが、他方尖頭器状石器においては、広SP+SI-広SP+SI（第28図278）もしくは広S'P+S'I-広S'P+S'I（第28図277）のように広SP以外の二次加工技術と複合状態でも認められる。広SPは石鏃の大形化した尖頭器状石器にも結びつく傾向にあるといえる。

三番目には、S'Dが削器の刃部形成加工と形態形成加工に結びついていることが判明した（第23図218・219）。



268



276

文章中図版1　剥離開始部の幅の計測（幅広のソフトハンマーの押圧剥離）

③下呂石製剥片石器群のまとめ

野笹遺跡の下呂石製剥片石器群の所見をまとめると次のようになる。

1. まず剥片剥離には円礫が用いられ、ハードハンマーの垂直打撃（HvD）で分割したり、分割した剥片をHvDで剥離する。実際に得られる剥片はHvD剥片かもしくはHDの矩形剥片に偏っている。
2. 凹基鏃や有茎鏃およびその未成品の二次加工技術はSPを主体とする。
3. 大形の石鏃である尖頭器状石器の二次加工技術は広SPを伴う複合技術に偏る。
4. 2と3のうち、縄文晩期後半から弥生時代所産の石鏃は、有茎鏃の4点と広SPを伴う石鏃・尖頭器状石器5点の計9点と考えられる（第28図268・269・272～278）。剥離開始部の幅が5mm程度の幅広の押圧剥離は縄文晩期後半以降。弥生時代の中期後半まで伊勢湾・東美濃～中部高地で認められる剥離技術である。なお、野笹遺跡と同様の幅広の押圧剥離か石鏃に認められる遺跡に愛知県牛牧遺跡が挙げられる。牛牧遺跡でも有茎鏃と凹基鏃が野笹遺跡と同様、混在している。

4.その他の石器器種の説明

ここでは下呂石製剥片石器群以外の器種について説明する。

①チャート製の剥片石器群

チャート製の剥片石器群では、凹基鏃1点・有茎鏃2点・削器1点が出土している。石鏃の二次加工技術はSPである。有茎鏃（第28図270・271）は縄文晩期後半～弥生時代所産のものと考えられる。

②磨製石庖丁・大形直縁刃石器・打製石鎌状石器

形態的に整った磨製石庖丁が1点出土した（第28図279）。明らかに弥生時代所産のものであるが、時期を特定するまでに至らなかった。紡錘形の石庖丁で器体は丁寧に研磨される。注目すべきは刃部の面と研ぎ出す研磨の線状痕が太くはっきりと認められる点である。線状痕については、かなり目の荒い砥石（荒砥）が使用されているようである（使用痕分析P42参照）。畿内や長野盆地の磨製石庖丁に野笹遺跡のようなはっきりとした線状痕を残す研磨痕はまず見られない。在地の研磨技術なのであろうか。今後追究すべき課題である。

なお、この磨製石庖丁の刃部付近にパッチ状にBタイプの使用痕光沢が認められた（使用痕分析P42参照）。イネ科植物を対象とした道具であったことがわかる。

また大形直縁刃石器が1点出土している（第28図280）。粘板岩製で刃部をHDで加工している。風化のため使用痕等は認められなかった。磨製石庖丁とともにセットをなすものであろう。打製石鎌状の石器も1点出土している（第28図281）。刃部には摩耗・刃こぼれが認められるものの、風化のため使用痕光沢を特定するまでには至らなかった（使用痕分析P42～43参照）。

③打製石斧

打製石斧は19点の完成品と1点の未成品が出土している（第26図・第27図262・263）。石材別にすると、ホルンフェルス製14点、泥岩製6点である。全て縄文時代所産の打製石斧と思われ、弥生時代に特徴的な石鍬は認められなかった。

打製石斧の形態形成加工はハードハンマーの直接打撃（HD）かもしくはそれに類するもので、打製石斧の両側辺および刃部が形成される。素材には横長剥片が用いられる割合が高い。

刃部には摩耗・刃こぼれが認められるものの、明瞭な土ずれ痕はあまり認められなかった。このような特徴は縄文中期前半期の打製石斧に特徴的な使用痕の付き方で、縄文中期後半の加曽利E式以降の打製石斧に明瞭な土ずれ痕が認められることと対照的である（池谷勝典氏の御教示による）。

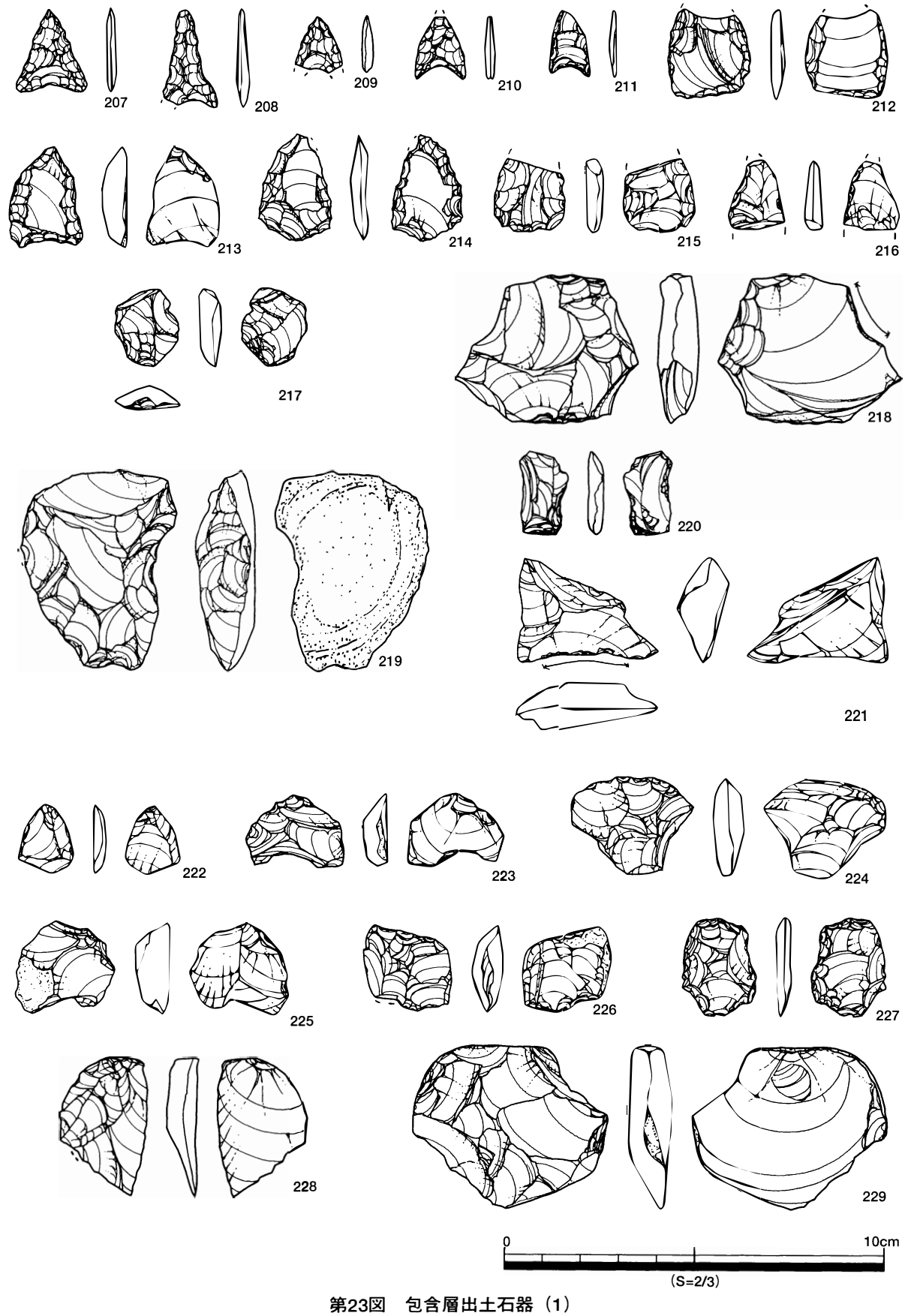
④敲石

敲石が2点出土している。うち第27図267の敲石は石器製作の「ハンマー」ともいうべき重厚感のある敲石である。このような敲石は大形の剥片石器の素材を石核から剥がすのに最適である。267の石器を手で持ち使用することを想像するのは難しく、斧のように木の柄に装着して使用したと考えられる。裏面の器体中央左の剥離は、柄との装着の固定のためであろうか。また表面の敲打痕は柄に装着するときのクサビ止めの跡の可能性がある。

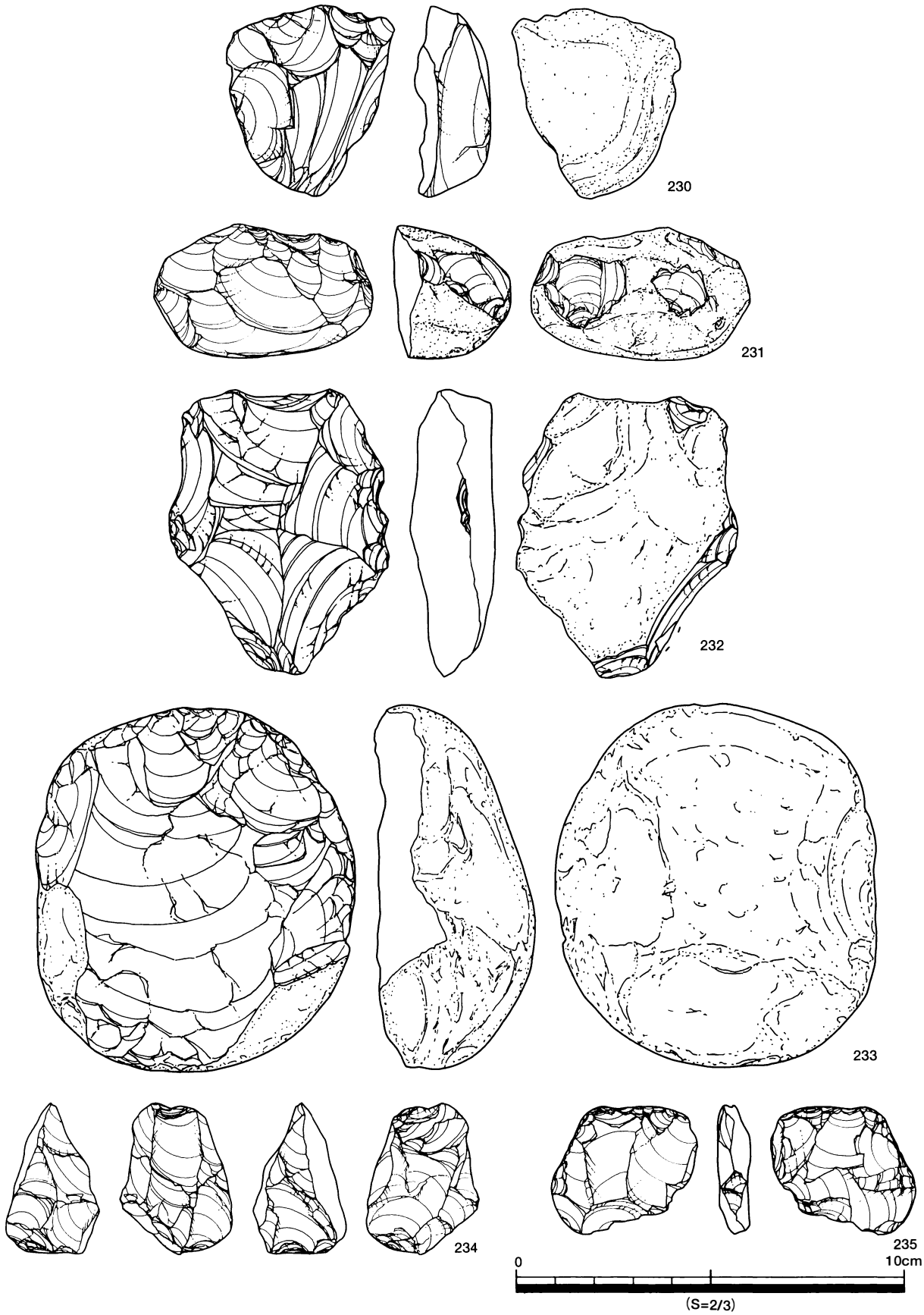
5.まとめ

今回の調査で出土した石器には、磨製石庖丁のように明らかに弥生時代の石器が出土した。この磨製石庖丁に伴う土器の時期については明らかにできなかったが、野笹I・IIの調査分では弥生中期前半の土器がまとまって出土しており、この土器との関連性が注目される。また、使用痕光沢が確認できたことも大きな成果であった。今後磨製石庖丁の位置づけに果たす使用痕分析の役割は大きいであろう。大型直縁刃石器や打製石鎌状石器については、風化のため使用痕光沢を特定できるまで至らなかったが、磨製石庖丁とセット関係をなすのか、興味深い。

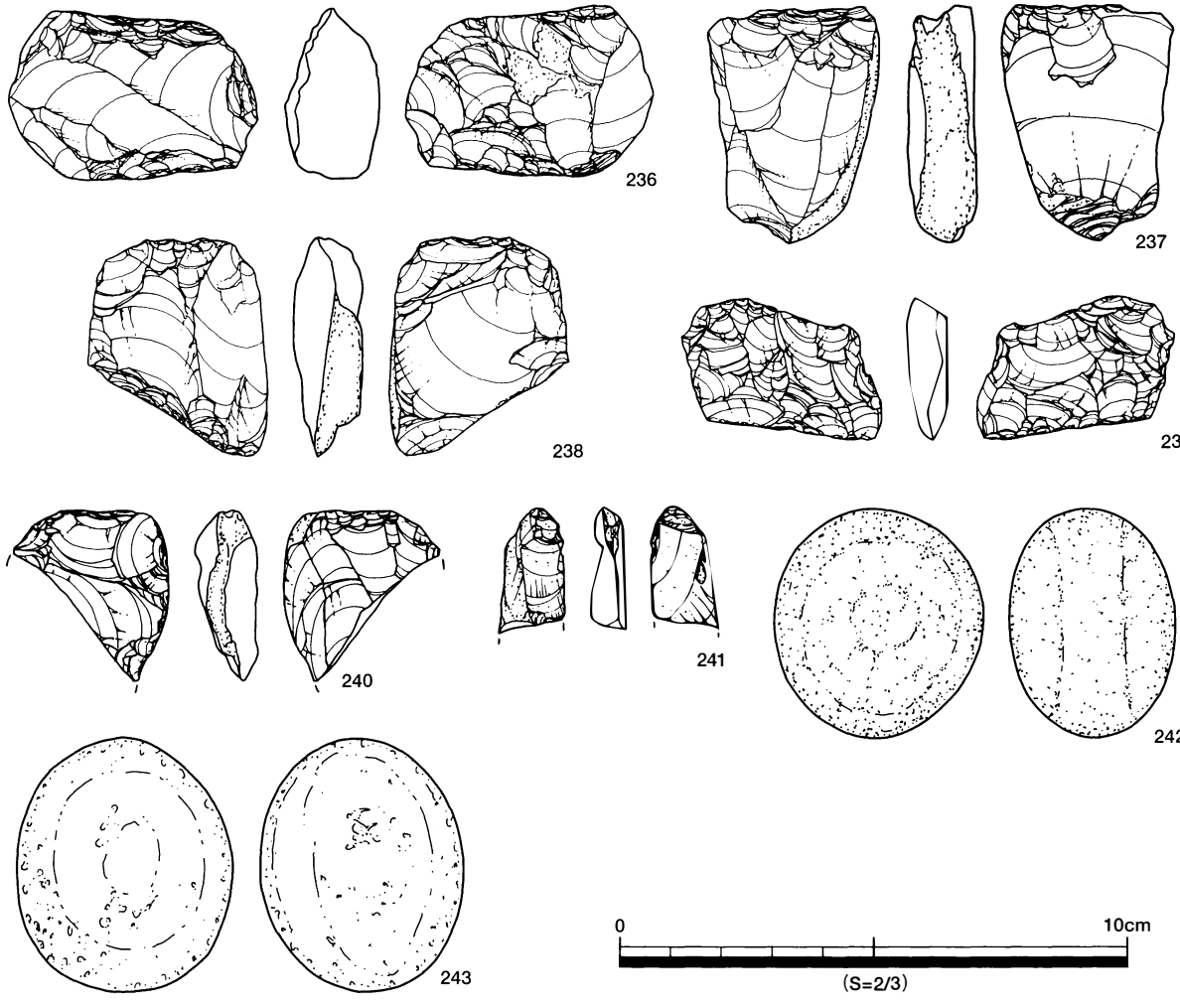
また、今回の調査分で、幅の広い押圧剥離面を留める石鏃や尖頭器状石器を確認した。この幅の広い押圧剥離をもつ石鏃類は、縄文晩期後半から弥生中期の伊勢湾・東美濃～中部高地に分布している。



第23図　包含層出土石器（1）



第24図　包含層　出土石器（2）



第25図　包含層　出土石器（3）

時期をある程度特定できる石鏃として今後注目する必要がある。

なお弥生前期から中期前半期の中部日本各地には、石鏃などの晩期以来の小形剥片石器に大陸系磨製石器を単品で伴うという例が認められる。今回調査分の野笹遺跡の石器組成はその点、弥生前期～中期前半期の組成に似ている。仮に今回出土の磨製石庖丁も弥生前期～中期前半に伴うものならば、収穫具として疑いようのない事例となるわけであり、伊勢湾～東美濃の弥生時代文化を考える上で重要な事例である。　（馬場伸一郎）

註）

1．愛知県埋蔵文化財センター2001『牛牧遺跡』

引用文献

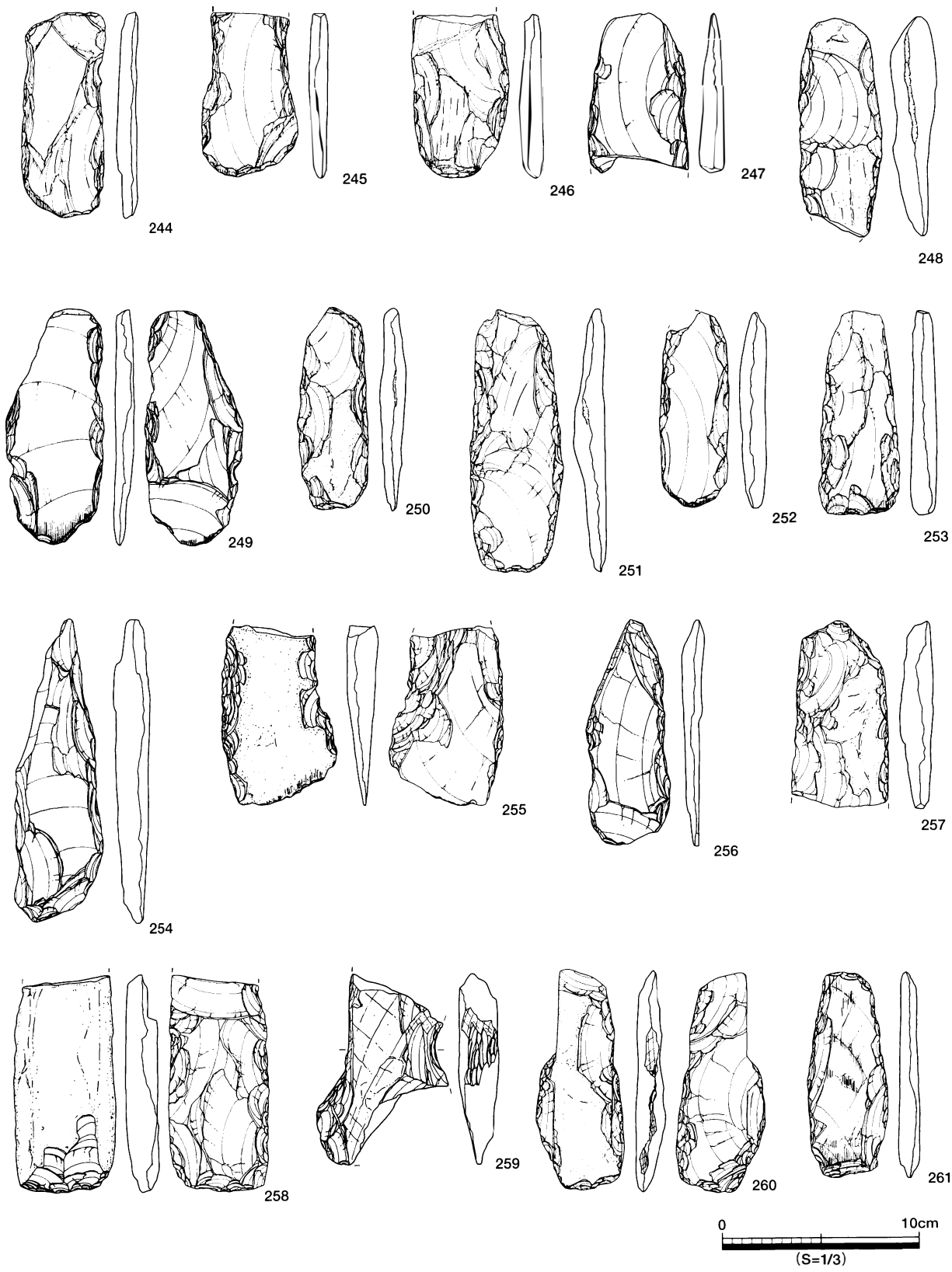
太田公彦2003「ハンマーと石材の関係について」『アルカ研究論集』第1号

角張淳一2002「石器研究の展望」『利根川』23

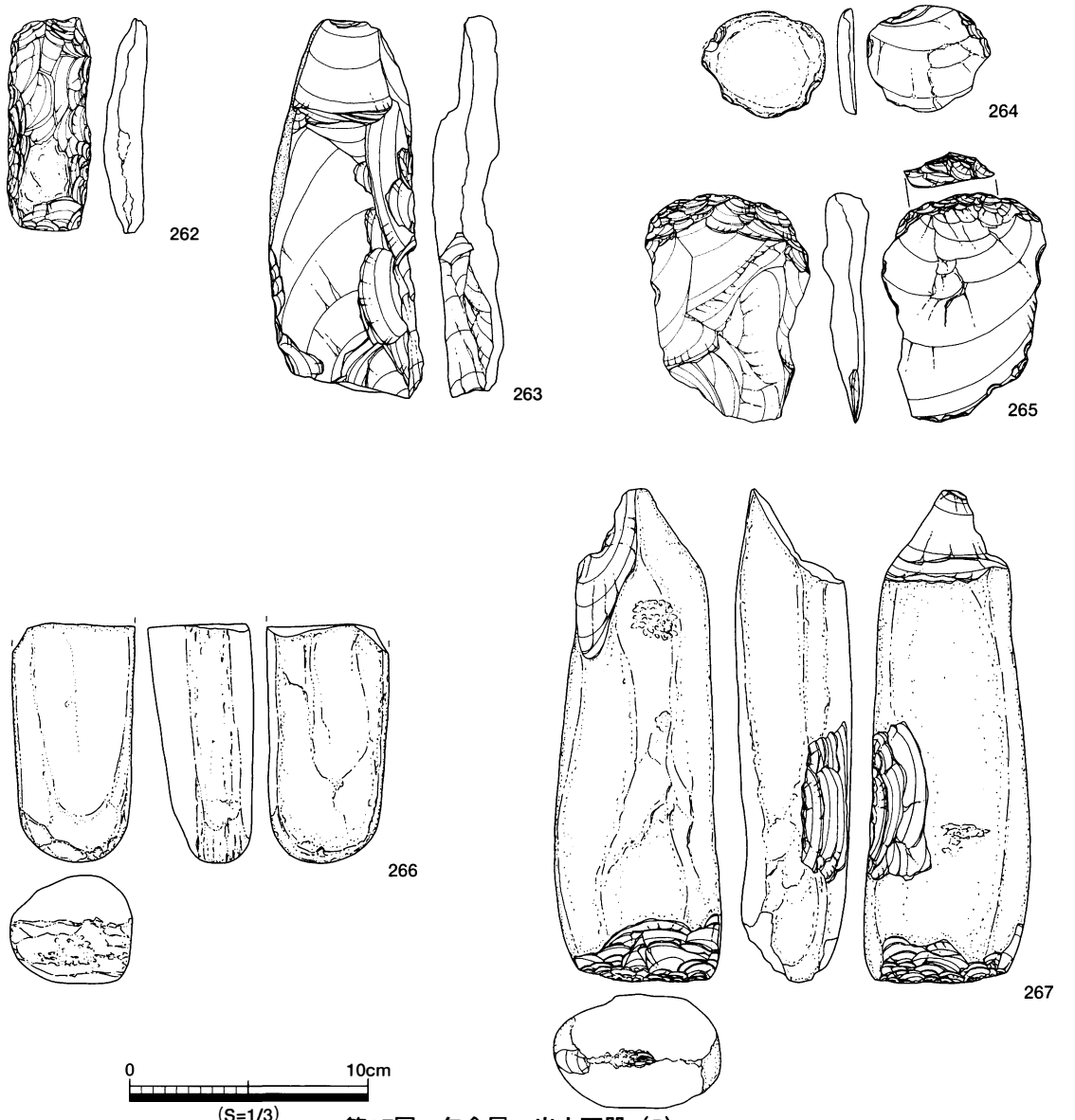
山田しょう・志村宗昭1989「石器の破壊力学（1）（2）」『旧石器考古学』38・39

参考文献

馬場伸一郎2003「石材・技法・石器の種類からみた長野の弥生時代石器」『中部弥生時代研究会第7回例会発表要旨集』



第26図　包含層　出土石器（4）



第27図　包含層　出土石器（5）

野笹遺跡出土石庖丁の使用痕分析

1.はじめに

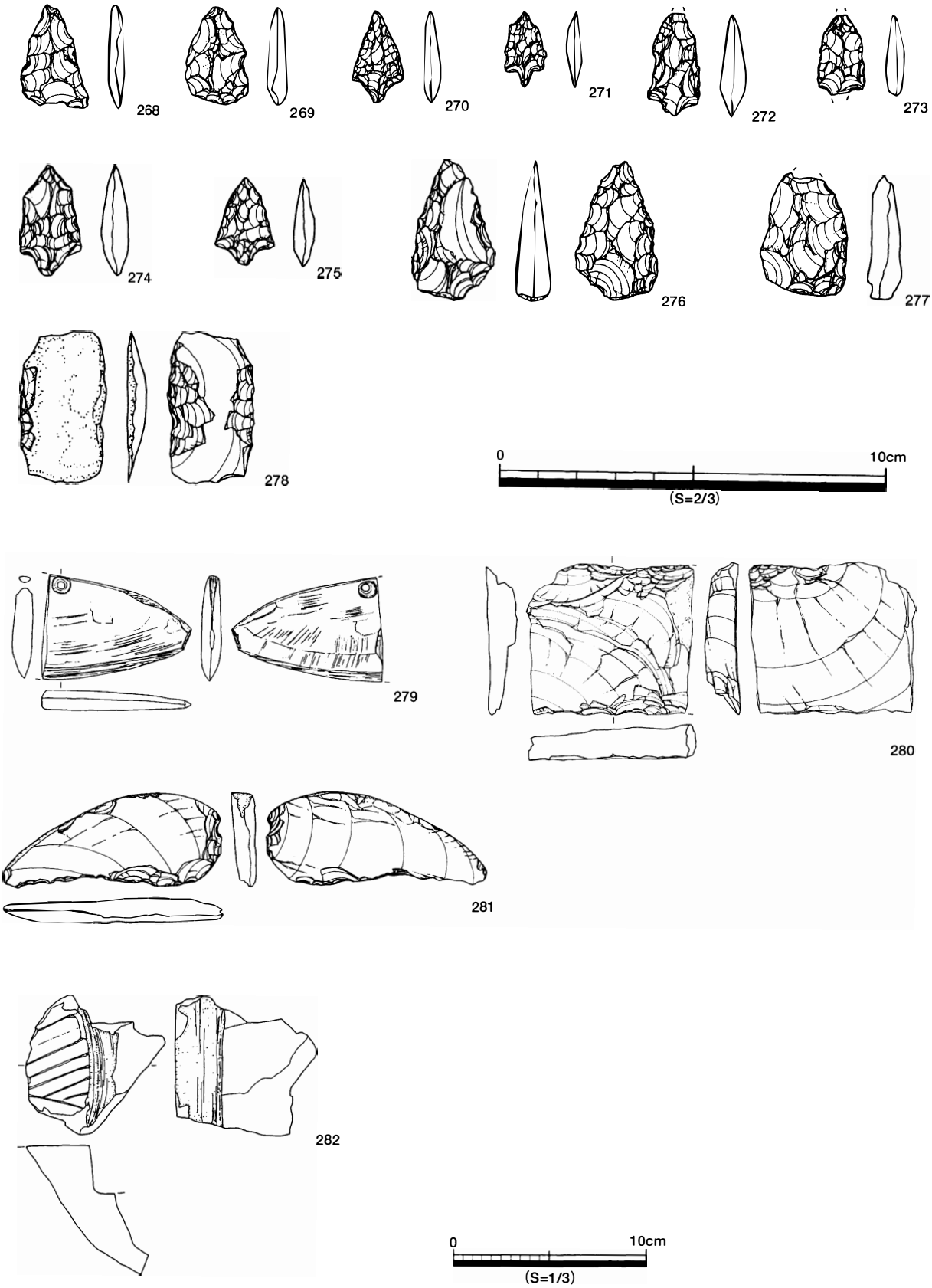
野笹遺跡出土の磨製石庖丁、打製石鎌状石器、大形直縁刃石器の使用痕分析を行った。

野笹遺跡は濃尾平野の北端付近の盆地内に位置する。南の平野部には、朝日遺跡などこの一帯を代表する弥生時代の環濠集落が分布する。朝日遺跡では磨製石庖丁と大形直縁刃石器が検出されており、磨製石庖丁をもちいた収穫技術・伝統があったことが伺える。また野笹遺跡では、前の報告で穿孔のない磨製石庖丁が出土し、植物質で生じる光沢が確認されており、収穫具の存在を示唆した。さらに今回の調査で磨製石庖丁が出土したことは、濃尾平野一帯の収穫技術を考える上でも重要であるといえよう。

この報告では使用痕分析を通して、濃尾平野北端におけるこれら石器の機能について究明したい。

2.観察方法

キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ（VH-7000）による低倍率ズーム（VH-Z05）と高倍



第28図　包含層出土、縄文時代晩期後半～弥生時代の石器・その他

率ズームレンズ（VH-Z450）を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍～40倍と450倍～1000倍（倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる）である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕光沢分類は梶原・阿子島の分類基準によっている(梶原・阿子島 1981)。微小剥離痕の名称は、阿子島（阿子島 1981）を用いた。

3.分析結果

磨製石庖丁は、中世の01溝の1層から出土しており、時期を特定することはできなかった。

［形態］粘板岩製の磨製石庖丁である。中央部で破損しているが、全体の形態は残存部分から、紡錘形である。

［刃部］刃部は両刃で、外湾の形態である。刃角は60から65度である。両面に顕著な研ぎ面がみられ、しのぎ部分が明瞭である。しのぎ部分の研磨は(文章中図版２－10)刃部に沿った方向にみられ、石庖丁体部を整形している研磨面(図版２－11)と比較して、深く粗い研磨面である。この部分には下で述べるように使用痕光沢は確認できないことから、刃部の研ぎ直しによる研磨と考えられる。そのため、刃部の研ぎ直しと体部の整形研磨の砥石が異なっていたと考えられる。

裏面の刃部縁辺に線状痕が縁辺に対して直交方向に走るのが確認できた(文章中図版２－9)。

［穿孔部分］紐孔は、背部そばに1孔みられた。両面から穿孔している。表面には、背に向けて摩耗しているのが確認でき(文章中図版２－7)、裏面では石器の内側方向に摩耗が伸びるのが確認できた(図版２－8)。穿孔部分に紐を掛けたさいに、表面に指をかけて紐を引っ張るようにもつため、表面穿孔部分の背側に、裏面穿孔部分の内側方向に摩耗したと考えられる。

［使用痕］

光沢：石庖丁の両面にBタイプ光沢がみられた(文章中図版２－2,4)。Bタイプ光沢は主に植物質の被加工物で生じる光沢であり、同種光沢が各地の遺跡で出土した石庖丁に確認されている。研磨が顕著にみられるしのぎ部分には光沢はみられなかった(図版２－1)。表面側は背部分の稜にも光沢がみられたが(図版２－3)、裏面には背部分と紐孔部分近くにまでは光沢は広がっていない(図版２－5、6)。

線状痕：高倍率では確認できなかった。低倍率では、裏面側に縁辺に対して直交方向に走る線状痕(文章中図版２－9)がみられた。被加工物がこの部分に接触することで生じたと考えられる。

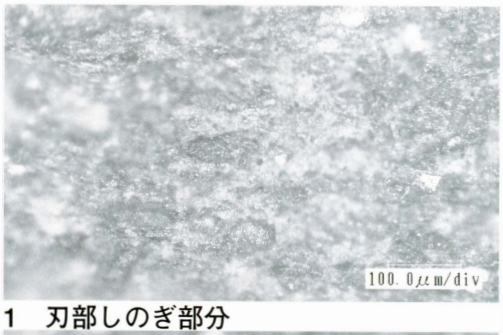
※推定される作業

穿孔部分の摩耗状況と、光沢の広がりから、植物質の被加工物が推定される。線状痕が直交方向にみられることから、被加工物を指と石庖丁の表面でおさえ、刃部を梃子として、つまみ上げるように石器を動かしたので、直交方向に線状痕が形成されたと推定される。

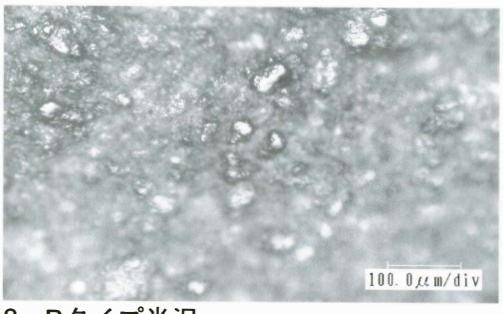
以上のことから、被加工物を摘みとるように使用したと考えられる。

また研磨面と光沢の分布からこの石庖丁が刃部の研ぎ直しがされていたことが判明した。かつ体部整形の研磨面と研ぎ面が異なり、用いた砥石が異なる可能性がある。このことから、石庖丁を製作する人間と、石庖丁を使用する人間の間で、異なる砥石を使用していたことが考えられる。石庖丁の製作と使用の間に技術的な差があり、石庖丁の流通などを考える上で重要である。

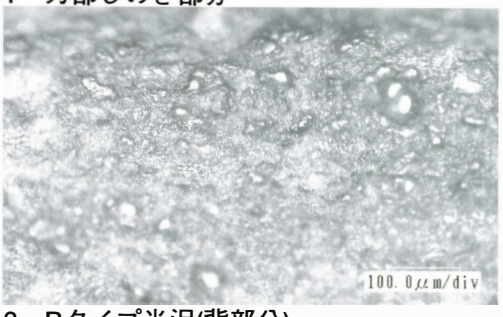
大形直縁刃石器と打製石鎌状石器2点を同じく使用痕分析を試みた。共に中近世の溝から出土し、



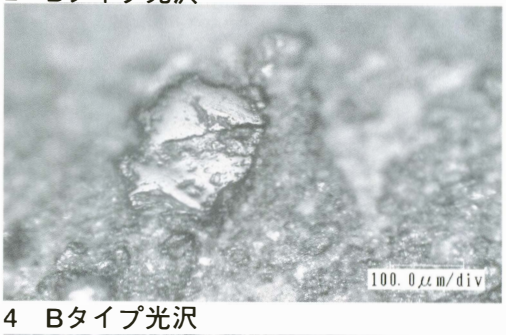
1　刃部しのぎ部分



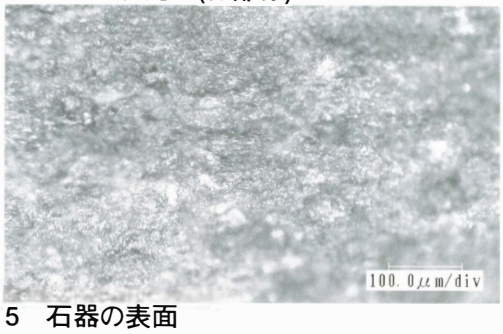
2　Bタイプ光沢



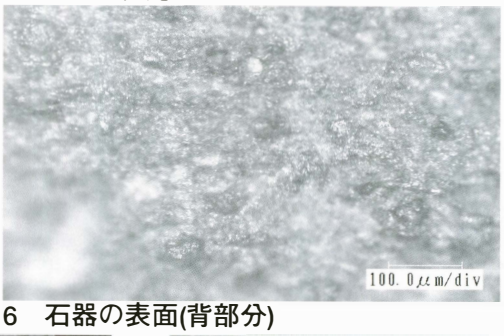
3　Bタイプ光沢(背部分)



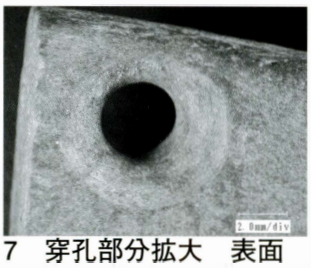
4　Bタイプ光沢



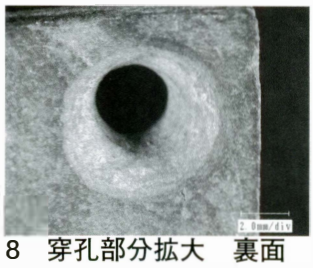
5　石器の表面



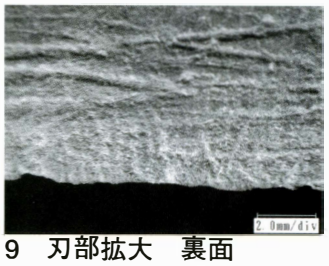
6　石器の表面(背部分)



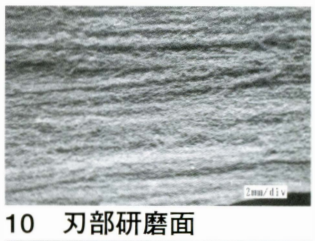
7　穿孔部分拡大　表面



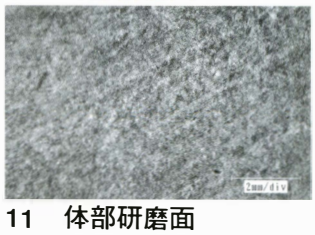
8　穿孔部分拡大　裏面



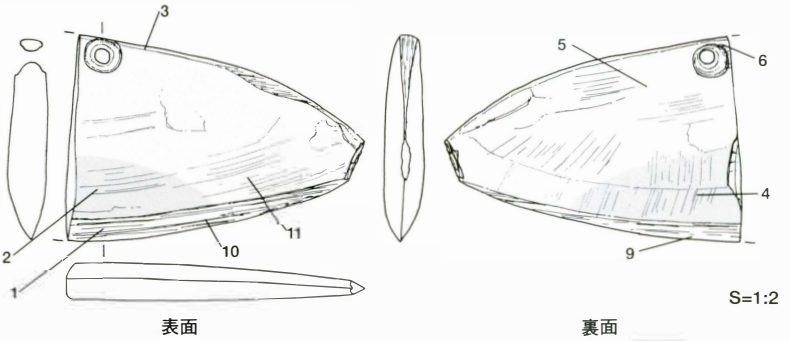
9　刃部拡大　裏面



10　刃部研磨面



11　体部研磨面



文章中図版2　石庖丁の使用痕

遺物の時期を特定できなかった。

分析の結果、表面の風化が激しく光沢などは確認できなかった。

4.まとめ

野笹遺跡出土の石庖丁は、これまで確認されている石庖丁と同様な使用方法が確認された(池谷2001、須藤他 1984,96、石器使用痕研究会他編　2002、高橋 2002、松山 1992)。また、すでに野笹遺跡では、穿孔のない磨製石庖丁も出土し、同タイプの光沢が検出されており、石庖丁を伴う稲作文化が濃尾平野の北端に入り込んでいることがより確実なものとなった。

石庖丁はこれまでの研究から、根刈りに使用されたと考えられる「大型直縁刃石器」あるいは大形石庖丁とセット関係にあると考えられている(斉野 1993,1994)。野笹遺跡では打製石鎌状石器や「大型直縁刃石器」と考えられる石器も出土したが、石器表面が激しく風化しているため、同様な光沢は確認できなかった。出土位置の関係からも、今回の分析から、仙台平野や大阪平野でなどで確認されているセット関係は、この地域では確認できなかった。

石庖丁の研磨面において、刃部と体部の間に、砥石の異なりが確認された。このことは、石庖丁の製作と使用の間に、異なる研磨技術があったことを示唆し、石庖丁の製作から使用されるまでの流通を考える上でも重要である。

野笹遺跡で収穫具の存在を示唆することが明瞭となった。しかし、各石器の出土状況から、時期が特定できず、これらの石器がどの段階でこの地域に入り込んだか、収穫具にセット関係があるのかなど、不明な点も多い。

このようにこの地域における収穫具の時期や分布、流通など、解明されなければならない問題は山積みである。今後の課題としたい。(高橋　哲)

参考文献

阿子島香　1989　『石器の使用痕』考古学ライブラリー56　ニュー・サイエンス社

池谷勝典　2001　「荒田遺跡における石包丁の使用痕分析」『尼ヶ辻遺跡・荒田遺跡発掘調査報告書』和歌山県埋蔵文化財センター pp.157-162

梶原洋・阿子島香　1981　「頁岩製石器の実験使用痕研究-ポリッシュを中心とした機能推定の試み-(東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2)」『考古学雑誌』　67-1　pp.1-35

斉野裕彦　1993　「弥生時代の大型直縁刃石器（上)」『弥生文化博物館研究報告』2　pp.85-109

1994　「弥生時代の大型直縁刃石器（下)」『弥生文化博物館研究報告』3　pp.31-68

石器使用痕研究会・大阪府立弥生博物館編　2002　『弥生文化と石器使用痕研究　-農耕に関わる石器の使用痕-』第7回石器使用痕研究会

須藤隆・阿子島香　1984　「下ノ内浦遺跡SK2土壙出土の石包丁」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第69集 pp.59-66

須藤隆・佐藤道子・高橋哲　1996　「中在家南遺跡出土弥生石器の分析」『中在家南遺跡他』第2分冊分析・考察編　仙台市文化財調査報告書第213集　pp.167-179

高橋哲　2002　「栗木作遺跡の使用痕分析」『栗木作遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第90冊 pp.153-159

松山聡　1992　「石庖丁の使用痕」『大阪文化財研究』3　pp.1-10

第5章　ま　と　め

当遺跡は、木曽川の河岸段丘上に位置し、地山には木曽川が運んできた大量の砂が堆積している。遺跡の北と南では段丘面が異なっており、北が一段高い段丘面（L3）に位置する。段丘の比高差は約３ｍある。段丘の境には湧水地点があり、湧水に伴ってできた自然流路が西の加茂川に向かって流れている。遺跡のほぼ中央にある自然流路地点が一番低くなり、そこから南は木曽川の自然堤防に向かって地形は高くなっている。平成８・９年度にⅠ区、平成11・12年度にⅡ・Ⅲ区・赤池４号古墳が調査され、当調査区（Ⅳ区）はⅠ区の南西隅に隣接している。Ⅰ区北側とⅢ区は上位段丘（L3）に位置し、Ⅰ区南側・Ⅱ区・Ⅳ区は低位段丘（L4）に位置する。

Ⅰ～Ⅲ区とⅣ区とは、出土遺物の時期等に多少の違いはみられるが、土器・石器ともにほぼ同じ特徴をもっている。特にⅠ区とⅣ区は隣接することもあり、出土土器の時期幅が似ている。これに比べⅡ区では、Ⅰ区で確認されていない弥生時代中期後葉、古墳時代前期の遺物が出土している。石器では、Ⅰ～Ⅳ区ともに下呂石の円礫の石核が多いという木曽川に近い遺跡の特徴が表れている。また、石鏃の他には打製石斧の出土量が多く、自然流路周辺で狩猟・採集が行われていた様子がうかがわれる。穂摘み具の磨製石庖丁や、根株の刈り取りや除草に使う粗製剥片石器、有肩扇状石器、直縁刃石器の出土もⅠ～Ⅳ区で共通点がみられ、付近に水田が広がることをうかがわせる。

当遺跡を南北方向に長く調査しており、遺構の分布範囲が時代別に移り変わっていることがわかる（第32図参照）。上位段丘に住居や屋敷が広がる時期は、弥生時代後期（竪穴住居３軒）・古墳時代後期（竪穴住居跡２軒）・中世前期（屋敷の区画溝）・中世後期（溝・掘立柱建物）である。一方、低位段丘に住居が広がる時期は、縄文時代中期末・弥生時代中期前葉・弥生時代終末期・古墳時代後期（竪穴住居跡29軒）・中世前期（大溝）・中世後期（溝、掘立柱建物、柵列）である。当遺跡の調査地点全体の遺構数では古墳時代後期に大きなピークが見られる。

Ⅳ区で検出された遺構は古墳時代後期（自然流路１条）、中世前期（溝２条）、中世後期（溝４条）と近世（土坑２基、ピット３基）であるが、自然流路からはⅠ～Ⅲ区の出土状況と同じく、縄文時代中期～古墳時代後期の土器が出土しており、北の居住域からの流れ込みが堆積したものと思われる。以下に遺物の詳細を述べる。

縄文時代～弥生時代

縄文土器は出土土器のうちの35%（破片総数）をしめる。縄文時代中期が21点（212ｇ）、晩期が22点（874ｇ）である。弥生前期～中期の土器（条痕文系の土器）は全体の13%である。縄文晩期～弥生時代前期の土器は、破片数が縄文時代中期と差がみられないのにもかかわらず質量が多いことから、破片が大きくかなり残りが良いといえる。この時期の土器・石器の出土分布状況を見ると、第30図より01溝・05溝・15溝・D3から出土している。第29図からは、遺物の分布を東から投影しているため地形の傾斜を念頭に置く必要はあるが、01溝よりも自然流路中心に遺物が出土していることがわかる。おそらく北の居住域からの流れ込みと思われる。縄文晩期～弥生中期に出土量のピークがみられ、石器もほぼ同時期のものが多く出土している。剥片石器の石材のほとんどは下呂石で、製品は石鏃が多

くをしめている。石鏃の次に多く出土しているのは打製石斧で、狩猟・採集の道具が全体をしめているようである。また、磨製石庖丁・大型直縁刃石器・打製石鎌状石器などの収穫具が少数であるが出土している。

古墳時代～奈良時代

土師器は全体の19%、須恵器は５%である。須恵器は６～８世紀の時期である。７世紀の坏身・短頸壺・提瓶は、赤池４号古墳と時期を同じくする古墳が近くに存在して混入したものか、北側にある居住域から流れ込んだものと思われる。消失した赤池古墳群にも関連するものと思われる。８世紀の須恵器には鉄鉢がみられる。出土分布状況を見ると01溝・05溝から出土しているため、上流からの流れ込みや、溝をつくった際の撹乱と思われる。

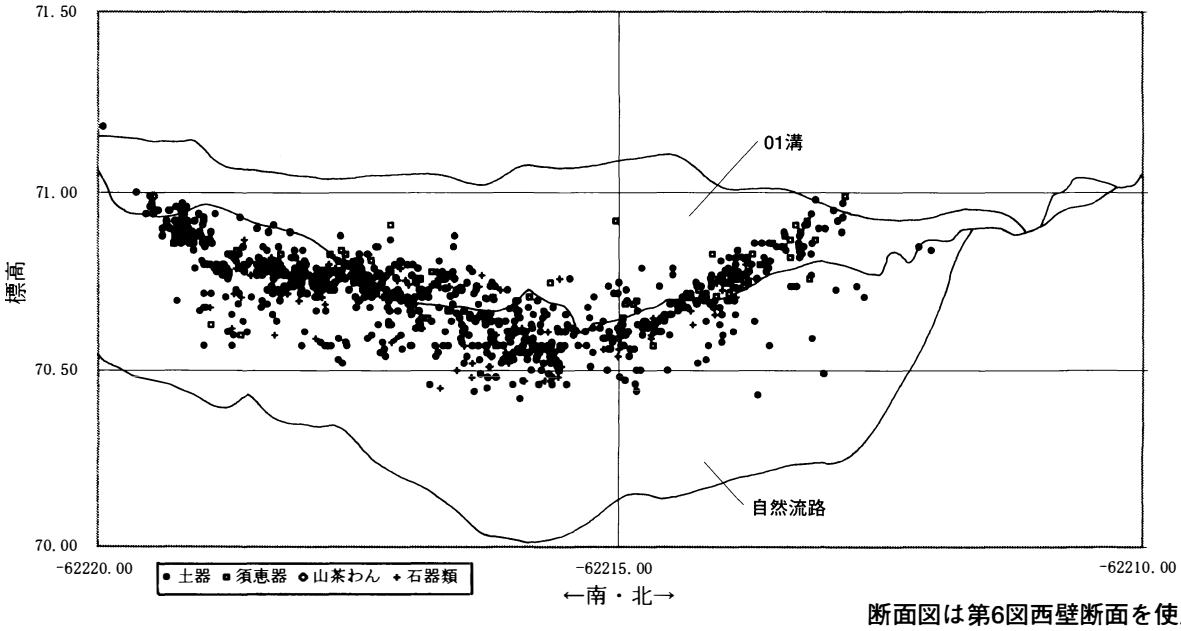
中世前期

調査区は南から北に傾斜しており、01溝はⅣ区の一番低い所にある自然流路を利用してつくられている。01溝は堰を伴っており、時期は溝から出土している山茶碗と、東に続くⅠ区の調査結果を合わせて考えると12～13世紀である。Ⅰ区とⅣ区の溝を図面上でつなげてみると、Ⅰ区からの流れがⅣ区ではややかわるようである。溝全体でみると、３つの堰を伴い、上流の堰の川上には粘土と敷石の施設がみられ、堰で水をためて生産域に水を流す施設であったようである。Ⅰ区から続くと思われる導水施設は当調査区では撹乱をうけているため不明である。

中世後期

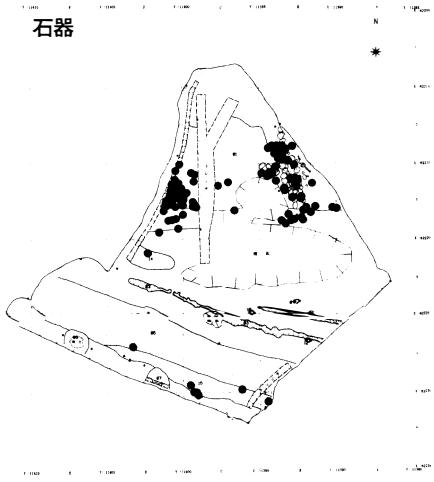
地形が一番高い位置には15世紀の溝（05・15溝）を検出しており、Ⅰ区の遺構図とのつながりから、方形の区画溝か東流する溝とつながる可能性がある。05溝は15溝を切っており、15溝からは多くの陶器と礫が出土しているが、05溝からは陶器と礫がほとんど出土していない。出土遺物からは２条の溝に時期差があまりみられない。05溝からは煮沸具が出土しており、付近に居住域が広がると思われる。また、05溝の埋土から出土した14世紀の龍泉窯系青磁盤（171）は、Ⅰ区（表採）とⅡ区（05溝より約48m南東方向）でも出土しており、同一個体と考えられる。

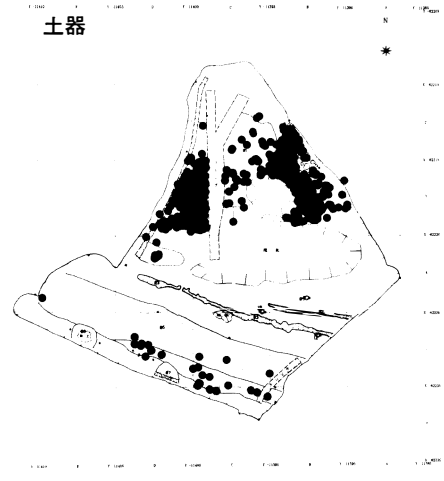
以上のことから、縄文時代～奈良時代の遺物が多量に出土しているが、確認された遺構は中世前期と後期の溝跡で、それ以前の時代の遺構は本調査区の北側に分布しているものと思われる。

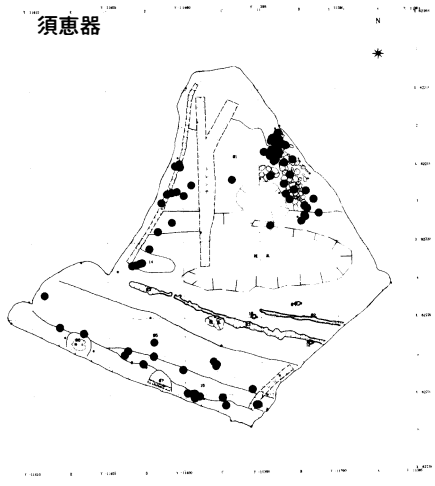


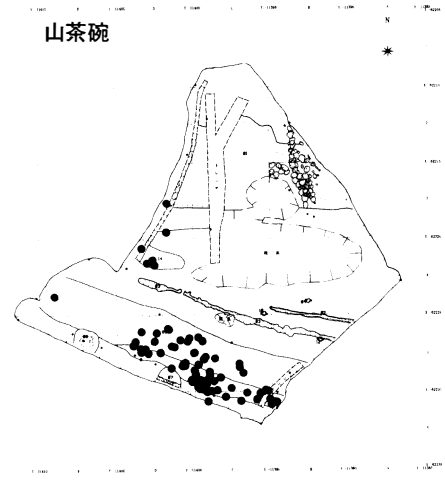
断面図は第6図西壁断面を使用

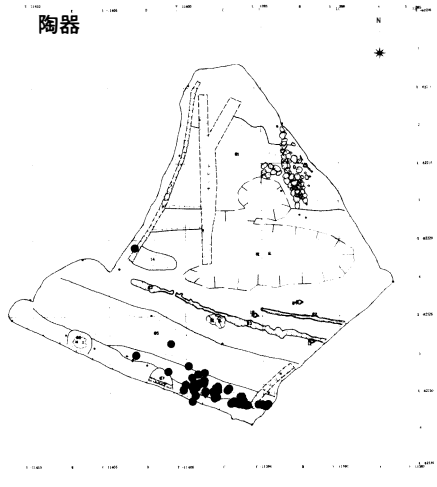
第29図　01溝、自然流路　X（南北）軸投影遺物分布図







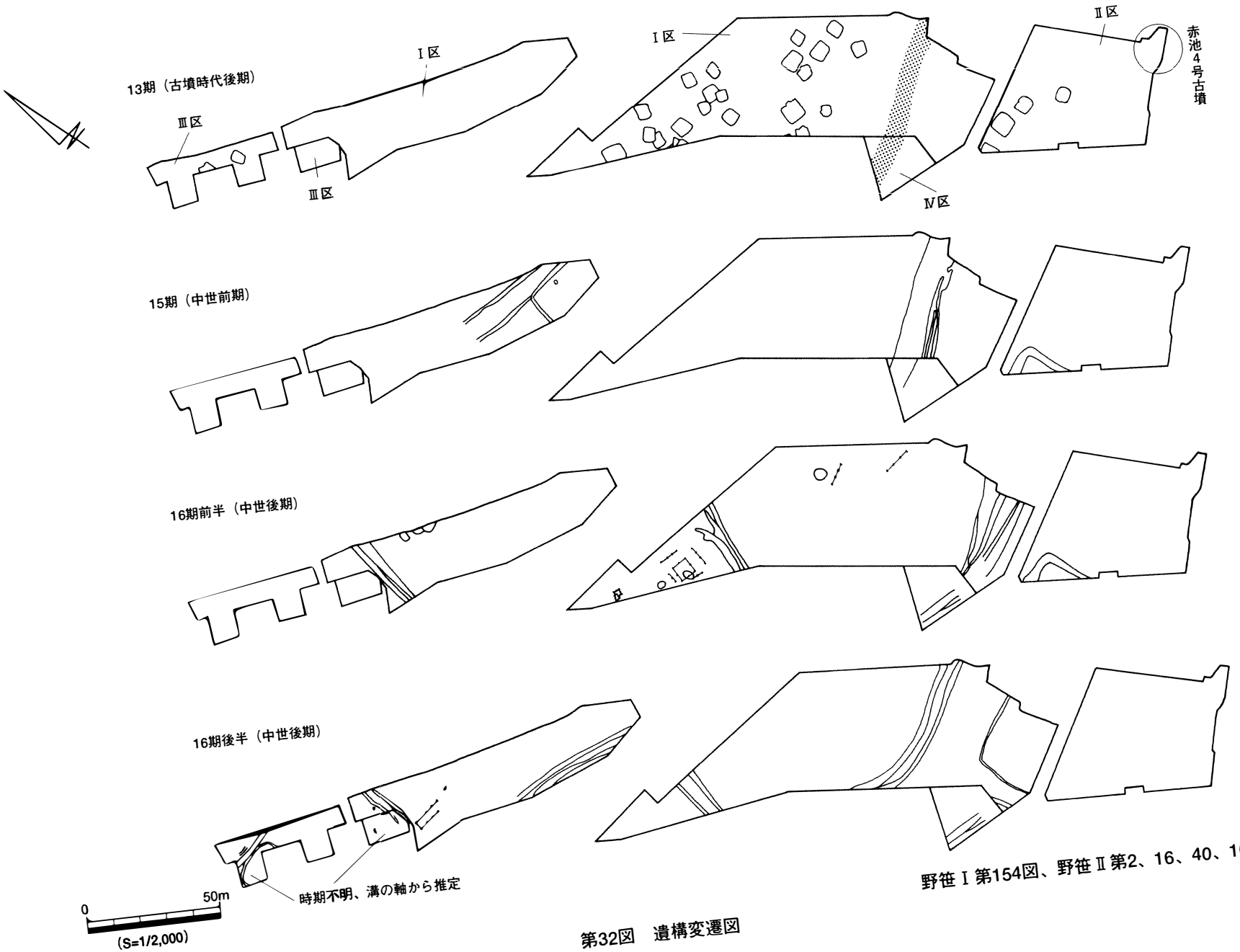




第30図　遺物種別散布状況図（S=1/500）

（野笹Ⅰ　17、18、68、69図を合成）

第31図　野笹Ⅰ・Ⅳ区　01溝、05溝　平面図



第32図　遺構変遷図

野笹Ⅰ第154図、野笹Ⅱ第2、16、40、104図合成

表10　器種別土器組成表　　残存率計÷12

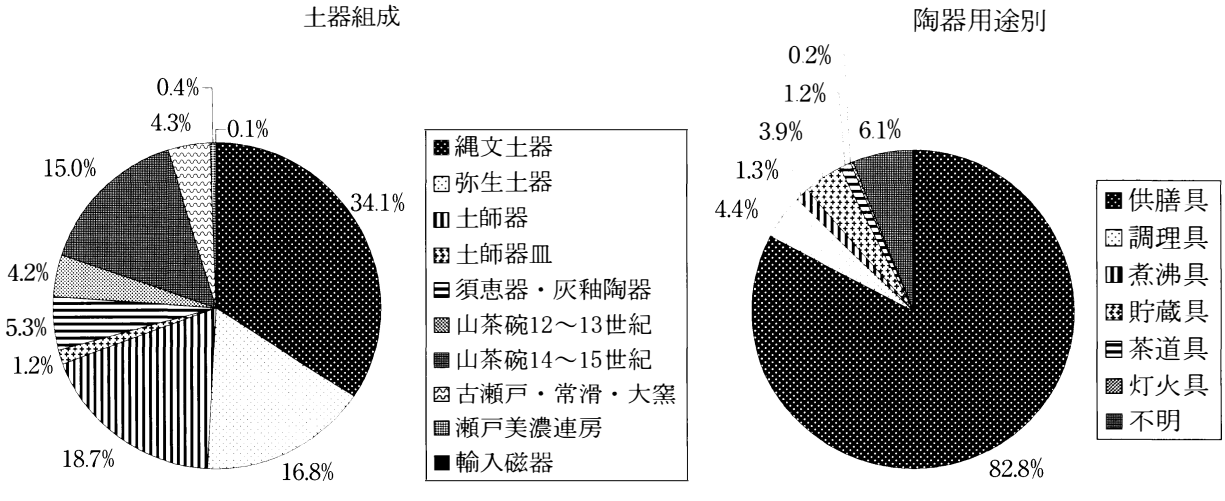
	01溝 破片数	自然流路 破片数	02溝 破片数	05溝 破片数	07土坑 破片数	14溝 破片数	15溝 破片数	包含層 破片数	破片数計	比率%	口径残存 率個体数	底径残存 率個体数
縄文土器中期	15	1		1	2			2	21	0.53		
縄文土器晩期	4	18							22	0.56		1.00
縄文土器	522	371	1	39	5	34	48	275	1,295	32.97		0.08
弥生土器　前期前葉	19	6				1		1	27	0.69		
弥生土器　前期	6	19					1	1	27	0.69		1.80
弥生土器　前期~中期	190	123		10		9	12	87	431	10.97		
弥生土器　中期	11	35						1	47	1.20	1.23	0.60
弥生土器　後期	1								1	0.03		
弥生土器　弥生末~古墳初	97	14					6	10	127	3.23		
土師器古墳前期				1				1	2	0.05		
土師器（古墳）	45	7				1	1	16	70	1.78	0.26	2.58
土師器	373	109	1	19	1	11	12	135	661	16.83	0.91	2.00
須恵器	78	28		20		2	7	70	205	5.22	2.48	3.82
灰釉陶器				3			1	1	5	0.13	0.29	1.00
土師器皿				21				26	47	1.20	0.60	
山茶碗　12~13世紀	28	3		20		8	19	84	162	4.12	1.38	9.56
山茶碗　14~15世紀	10		3	214			146	217	590	15.02	7.48	11.77
山茶碗				2					2	0.05		0.75
古瀬戸				14			47	10	71	1.81	0.86	1.94
常滑陶器				9		1	12	12	34	0.86		
瀬戸美濃大窯				1			6	1	8	0.20	0.03	0.41
瀬戸美濃連房				12				2	14	0.36		
時期不明陶器	2			11			3	39	55	1.40		
輸入磁器				1			1	2	4	0.10	0.10	0.34
破片数計	1,401	734	5	398	8	67	322	993	3,928		15.62	37.65
比率%	35.67	18.69	0.13	10.13	0.2	1.71	8.2	25.28				

表11　用途別陶器、磁器組成表（中近世）

	01溝 破片数	自然 流路 破片数	02溝 破片数	05溝 破片数	07土抗 破片数	14溝 破片数	15溝 破片数	包含層 破片数	破片数計	比率%	
供膳具	38	3	3	259		8	178	249	738	82.83	碗・皿・蓋・盤・土師器皿
調理具	1			7		1	20	10	39	4.38	鉢・擂鉢・片口鉢・卸皿
煮沸具				9			1	2	12	1.35	鍋・釜
貯蔵具	1			9			13	12	35	3.93	甕・壺・瓶・徳利
茶道具				2			2	7	11	1.23	天目茶碗・湯呑
灯火具				1				1	2	0.22	灯明皿・重圏皿
不明				16			15	23	54	6.06	
破片数計	40	3	3	303	0	9	229	304	891		
比率%	4.49	0.34	0.34	34.01	0	1.01	25.70	34.12			

表12　器種別土器組成表（質量）

	01溝 質量(g)	自然流路 質量(g)	02溝 質量(g)	05溝 質量(g)	07土坑 質量(g)	14溝 質量(g)	15溝 質量(g)	包含層 質量(g)	質量計(g)	比率%
縄文土器中期	118.1	14.6		3.0	7.1			68.9	211.7	0.67
縄文土器晩期	38.2	835.9							874.1	2.77
縄文土器	2,864.7	1,766.6	7.8	253.5	47.8	141.5	287.4	1,910.8	7,280.1	23.08
弥生土器　前期前葉	252.2	87.7				1.6		25.7	367.2	1.16
弥生土器　前期	145.0	293.5					30.3	121.7	590.5	1.87
弥生土器　前期~中期	1243.8	571.5		63.3		32.7	58.6	835.9	2,805.8	8.89
弥生土器　中期	73.9	274.0						24.2	372.1	1.18
弥生土器　後期	7.0								7.0	0.02
弥生土器　弥生末~古墳初	495.2	61.3					9.6	74.8	640.9	2.03
土師器古墳前期				2.5				2.5	5.0	0.02
土師器（古墳）	738.4	39.7				6.3	6.6	277	1,068.0	3.39
土師器	2,126.3	528.6	1.2	121.6	12.7	45.9	38.5	1,073.6	3,948.4	12.52
須恵器	1,555.7	333.3		220.4		36.5	154.5	779.4	3,079.8	9.76
灰釉陶器				48.2			1.7	6.6	56.5	0.18
土師器皿				76.7				74.9	151.6	0.48
山茶碗　12~13世紀	449.4	121.0		202.5		124.4	377.6	1,322.1	2,597.0	8.23
山茶碗　14~15世紀	21.0		6.9	1,338.7			822.3	874.1	3,063.0	9.71
山茶碗				20.7					20.7	0.07
古瀬戸				330.9			936.9	153.4	1,421.2	4.51
常滑陶器				1,232.7		5.3	699.0	302.0	2,239.0	7.10
瀬戸美濃大窯				8.9			21.4	6.3	36.6	0.12
瀬戸美濃連房				76.3				37.0	113.3	0.36
時期不明陶器	117.4			87.6			38.3	281.8	525.1	1.66
輸入磁器				13.3			37.9	21.3	72.5	0.23
質量計(g)	10,246.3	4,927.7	15.9	4,100.8	67.6	394.2	3,520.6	8,274	3,1547.1	
比率%	32.48	15.62	0.05	13.00	0.21	1.25	11.16	26.23		



第33図　土器組成・陶器用途別グラフ

表13　石器組成表

	堰	01溝	自然流路	02溝	05溝	07土坑	14溝	15溝	包含層	点数計	比率%
剥片	8	116	120		10	1	12	15	362	644	81.42
尖頭器状石器		1							1	2	0.25
尖頭器状石器未製品		1								1	0.13
石鏃		3	4					1	4	12	1.52
石鏃未製品		1	1			1		1	2	6	0.76
削器		2							1	3	0.38
使用痕剥片		1							1	2	0.25
二次加工剥片		1	1		1			1	1	5	0.63
石核		8	1		1			0	3	13	1.64
両極石器			1					1		2	0.25
打製石斧		7	9		4			2	11	33	4.17
打製石斧未製品					1					1	0.13
打斧剥がれ		24	9		3		4	1	21	62	7.84
大型直縁刃石器		1								1	0.13
磨製石庖丁		1								1	0.13
打製石鎌状石器									1	1	0.13
敲石									2	2	0.25
点数計	8	167	146	0	20	2	16	22	410	791	
比率%	1.01	21.11	18.46	0	2.53	0.25	2.02	2.78	51.83		
砥石								1			
茶臼								1			

表14　石材別個数表

	下呂石	安山岩	チャート	凝灰岩	ホルンフェルス	粘板岩	泥岩	黒曜石
剥片	642		1		1			
尖頭器状石器	2							
尖頭器状石器未製品	1							
石鏃	9		3					
石鏃未製品	6							
削器	2		1					
使用痕剥片	1							1
二次加工剥片	4			1				
石核	13							
両極石器	2							
打製石斧		1			26	1	5	
打製石斧未製品					1			
打斧剥がれ		4			58			
大型直縁刃石器						1		
磨製石庖丁						1		
打製石鎌状石器							1	
敲石				1	1			
点数計	682	5	5	2	87	3	6	1
比率%	86.22	0.63	0.63	0.25	11.00	0.38	0.76	0.13
砥石					1			
茶臼				1				

表15　土器観察表

掲載番号	出土区	層位	接合	破片数	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	口径残存率 /12	底径残存率 /12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整 外面	整形・調整 内面	種類	器種	時代	産地	備考	挿図	図版
1	01溝	M1		1	28.1			(4.5)			密	良好	明黄褐	10YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/4	隆帯、押し引き		縄文土器	深鉢	縄文中期			10	6
2	01溝	M1		1	19.7			(4.1)			密	良好	にぶい黄橙	10YR5 3	にぶい黄橙	10YR5/4	半截竹管による沈線文		縄文土器	深鉢	縄文中期			10	6
3	01溝	M2		1	20.9			(3.3)			密	良好	明黄褐	10YR7/6	にぶい黄橙	10YR7 3	張り付け突帯.押圧		弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
4	01溝	M2		1	7.6			(2.6)			密	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	張り付け突帯.押圧		弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
5	01溝	M1		2	21.8			(5.4)			密	良好	黒褐	10YR3 2	灰黄褐	10YR4/2	張り付け突帯.押圧		弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
6	01溝	M2		1	50.0			(6.2)			やや粗	良好	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR5/2	張り付け突帯.押圧		弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
7	01溝	M2		1	41.3			(5.5)			やや粗	良好	褐灰	10YR4 1	にぶい黄橙	10YR7/4	張り付け突帯.押圧		弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
8	01溝	M1		1	17.4			(4.9)			やや密	良好	灰褐	7.5YR4/2	にぶい橙	7.5YR6 4	条痕		弥生土器	甕（砲弾形）	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
9	01溝	M2		2	26.7			(5.3)			密	良好	灰褐	7.5YR4/2	にぶい黄褐	10YR5/3	条痕．煤		弥生土器	甕（砲弾形）	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
10	01溝	M2		3	22.1			(6.6)			密	良好	にぶい黄褐	10YR5 3	にぶい黄橙	10YR6 4	条痕．煤		弥生土器	甕（砲弾形）	弥生前期前葉初頭			10	6
11	01溝	M2		1	5.8			(3.0)			密	良好	黒褐	7.5YR3/1	灰褐	7.5YR4 2	条痕		弥生土器	甕（砲弾形）	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
12	01溝	M2		1	9.3			(3.1)			密	良好	にぶい黄橙	10YR6 4	橙	7.5YR6 6	条痕．二又状工具		弥生土器	甕（砲弾形）	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
13	01溝	M1		1	4.1			(1.6)			密	良好	黒褐	10YR3 2	にぶい黄褐	10YR4 3	条痕	押し引き	弥生土器	甕（砲弾形）	弥生前期前葉初頭		樫王併行	10	6
14	01溝	M1		1	24.1		6.7	(2.4)		1.7	やや密	良好	にぶい黄橙	10YR7 3	灰	N4/	条痕		弥生土器	甕	弥生前期			10	6
15	01溝	M2		1	30.4		6.5	(3.6)		2.7	やや密	良好	にぶい黄橙	10YR6 3	にぶい橙	7.5YR6 4	条痕		弥生土器	甕	弥生前期			10	6
16	01溝	M2		1	8.7			(2.9)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7 3	にぶい黄橙	10YR7 4	条痕		弥生土器	甕か？	弥生前期			10	6
17	01溝	M2		1	16.5			(5.2)			密	良好	浅黄橙	10YR8 4	にぶい黄橙	10YR7 4	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6
18	01溝	M1		1	11.6			(2.7)			やや密	良好	褐	7.5YR4 3	にぶい褐	7.5YR5 4	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6
19	01溝	M1		1	9.4			(3.0)			やや粗	良好	橙	7.5YR6 6	橙	7.5YR6 6	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6
20	01溝			1	6.7			(2.6)			密	良好	明黄褐	10YR6 6	にぶい黄褐	10YR5 3	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6
21	01溝	M2		1	42.8			(6.6)			やや密	良好	にぶい黄褐	10YR5 3	灰黄褐	10YR5 2	条痕		弥生土器	甕	弥生前期～中期			10	6
22	01溝	M2		1	12.6			(3.4)			密	良好	黒褐	10YR3 1	にぶい黄橙	10YR7/4	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6
23	01溝	M1		1	35.9			(6.1)			密	良好	にぶい黄橙	10YR6 4	黄褐	10YR4 2	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6
24	01溝	M1		1	18.0			(4.4)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	浅黄橙	10YR8 4	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	6
25	01溝	M1		1	17.0			(3.3)			密	良好	橙	7.5YR7 6	橙	7.5YR7/6	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			10	7
26	01溝	M1		1	25.3			(3.7)			密	良好	褐灰	10YR4/1	にぶい黄橙	10YR6 3	条痕		弥生土器	甕	弥生前期～中期			10	7
27	01溝	M1		1	8.8	9.6		(2.8)	1.0		密	良好	にぶい黄橙	10YR7 4	にぶい黄橙	10YR6/3	条痕		弥生土器	壺	弥生中期前葉		朝日併行	10	7
28	01溝	M1		1	3.6			(1.3)			密	良好	橙	5YR6 8	橙	5YR7 8	条痕.押し引き		弥生土器	壺	弥生中期前葉		朝日併行	10	7
29	01溝	M2	01溝1層	2	19.3			(2.3)			やや密	やや不良	明赤褐	5YR5 6	にぶい橙	7.5YR6 4	口縁押し引き		弥生土器	甕	弥生中期前葉		朝日併行	10	7
30	01溝	M2		1	7.3			(1.6)			密	良好	橙	7.5YR7 6	橙	7.5YR6 6	条痕	条痕	弥生土器	不明	弥生中期前葉		朝日併行	10	7
31	01溝	M1		1	2.2			(1.1)			密	良好	黄橙	10YR8 6	明黄褐	10YR7 6	条痕	条痕	弥生土器	不明	弥生中期前葉		朝日併行	10	7

掲載番号	出土区	層位	接合	破片数	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	口径残存率 /12	底径残存率 /12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整 外面	整形・調整 内面	種類	器種	時代	産地	備考	挿図	図版
32	01溝	M2		1	8.2			(3.0)			密	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	条痕		弥生土器	不明	弥生中期前葉		朝日併行	10	7
33	01溝	M2		1	5.6			(2.7)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	条痕		弥生土器？	不明	弥生中期前葉		朝日併行	10	7
34	01溝	M2		1	2.0			(1.8)			密	良好	明黄褐	10YR7/6	橙	7.5YR6/6	条痕？		弥生土器	不明	弥生中期前葉		朝日併行	10	7
35	01溝	M2	01溝1層	2	16.9			(3.5)			密	良好	橙	7.5YR6/6	にぶい黄橙	10YR6/3	二又状工具		弥生土器	壺	弥生中期前葉		朝日併行	10	7
36	01溝	M2		1	7.0			(1.9)			密	良好	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	10YR8/3			弥生土器	高坏	弥生後期		山中	10	7
37	01溝	M1		1	15.8			(3.4)			密	良好	にぶい橙	7.5YR7/3	灰黄褐	10YR5/2		磨き	弥生土器	高坏	弥生末～古墳初		廻間	10	7
38	01溝	M1		1	37.0			(5.1)			密	良好	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/3			弥生土器	高坏	弥生末～古墳初		廻間	10	7
39	01溝	M2	01溝1層	3	28.7			(5.2)			密	良好	浅黄橙	7.5YR8/3	にぶい橙	5YR7/4	穿孔		弥生土器	高坏	弥生末～古墳初		廻間	10	7
40	01溝	M1		1	59.5			(1.6)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	褐灰	10YR5/1		指撫で	土師器	高坏	古墳前期		松河戸	10	7
41	01溝	M1		1	35.4		5.0	(2.9)		5.0	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/4			土師器	鉢	古墳時代(7世紀以前)			10	7
42	01溝	M2		1	23.1			(4.8)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	指押さえ		土師器	小鉢？	古墳後期(7世紀以前)		ミニチュア？	10	7
43	01溝	M1		1	9.9	10.4		(3.1)	1.0		密	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	浅黄橙	10YR8/3		刷毛目	土師器	不明	古墳後期(7世紀以前)			10	7
44	01溝	M2	01溝1層	3	13.0	9.5		(3.0)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	板撫で	刷毛目	土師器	甕	古墳時代(7世紀以前)			10	7
45	01溝	M2	B3-Ⅲ	2	34.8	12.2		(4.4)	0.6		密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3			土師器	甕	古墳後期(7世紀以前)			10	7
46	01溝	M1		1	46.0		6.8	(2.3)		3.0	密	良好	にぶい橙	7.5YR7/3	灰	N4	板撫で	板撫で	土師器	甕	古墳時代(7世紀以前)			11	7
47	01溝	M2	01溝1層	3	59.4		5.4	(1.9)		8.5	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	明赤褐	5YR5/6		板撫で	土師器	壺	古墳時代(7世紀以前)			11	7
48	01溝	M2		2	58.4		7.0	(3.6)		5.0	やや密	良好	明黄褐	10YR7/6	浅黄橙	10YR8/4			土師器	甕	古墳時代(7世紀以前)			11	7
49	01溝	M2	01溝1層	5	130.1		6.1	(3.9)		9.5	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	指押さえ	板撫で	土師器	甕	古墳後期(7世紀以前)			11	8
50	01溝	M1		1	5.3			(1.9)			やや密	良好	灰黄褐	10YR4/2	褐灰	10YR4/1		刷毛目	土師器	甕	不明			11	8
51	01溝	M1		1	6.1			(2.0)			やや密	良好	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR5/2	板撫で	刷毛目	土師器	甕	不明			11	8
52	01溝	M1		1	4.6			(2.3)			密	良好	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄橙	10YR6/3		刷毛目	土師器	甕	7世紀以降			11	8
53	01溝	M2		1	5.2			(2.2)			やや密	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	刷毛目	刷毛目	土師器	甕	不明			11	8
54	01溝	M1	B3-Ⅲ	2	62.3			(3.2)		12.0	密	良好	浅黄橙	7.5YR8/6	浅黄橙	7.5YR8/3	指押さえ		土師器	ミニチュア？	不明			11	8
55	01溝	M1		5	15.5	11.5		(2.9)	1.3		密	良好	灰	N5/	灰	N5/	削り		須恵器	坏身	6世紀末～7世紀初			11	9
56	01溝	M2	01溝1層	6	27.2	11.8		(3.5)	1.5		密	不良	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR7/2			須恵器	坏身	7世紀			11	9
57	01溝	M2		3	52.2	12.8	4.0	3.4	0.4	8.0	密	良好	灰白	5Y7/1	灰	5Y6/1	削り、自然釉		須恵器	坏身	7世紀			11	9
58	01溝	M1		7	121.9	7.9	3.2	4.9	7.0	12.0	やや密	良好	緑灰	5G5/1	オリーブ灰	2.5GY5/1	削り、底部外面線刻あり		須恵器	短頸壺	7世紀			11	17
59	01溝	M1	C3,D4・D3Ⅲ. C2Ⅰ, 14溝M1		516.2	8.8		(4.4)	7.5		密	やや不良	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	掻き目？削り		須恵器	提瓶	7世紀			11	9
60	01溝	M1									密	やや不良	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	掻き目？削り		須恵器	提瓶	7世紀		59と同一個体の可能性高い	11	9
61	01溝	M2		2	103.1	23.2		(5.6)	2.6		密	不良	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	削り		須恵器	鉄鉢	8世紀			11	8
62	01溝	M2	01溝1層	6	162.4	22.7		(6.4)	3.2		密	良好	灰	N6	灰	N6/			須恵器	鉄鉢	8世紀		63と同一個体の可能性高い	11	8
63	01溝	M2									密	良好	灰	N6/	灰	N6			須恵器	鉄鉢	8世紀			11	8

掲載番号	出土区	層位	接合	破片数	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	口径残存率 /12	底径残存率 /12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整外面	整形・調整内面	種類	器種	時代	産地	備考	挿図	図版
64	01溝	M1		1	3.7			(2.8)			やや粗	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	自然釉	自然釉	山茶碗	小碗	12世紀世紀中	南部系		11	10
65	01溝	M1		1	12.3		4.0	(1.7)		3.0	やや粗	良好	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/3			山茶碗	小碗	12世紀世紀中	南部系		11	10
66	01溝	M1		1	13.3		5.0	(1.5)		2.5	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2			山茶碗	小皿	12世紀後～13世紀前	南部系		11	10
67	01溝	M1	B3-Ⅲ	4	61.9	15.6	8.0	4.2	1.0	5.0	やや粗	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	回転糸切り痕	底部内面使用痕	山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系		11	10
68	01溝	M1		1	18.5	16.4		(2.6)	2.0		やや粗	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2		煤？付着	山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系		11	10
69	01溝	M1		2	20.0	14.4		(3.7)	2.0		密	良好	灰白	5Y7/2	浅黄	5Y7/3		自然釉付着	山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系		11	10
70	01溝	M1		1	39.3		6.6	(2.0)		3.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	回転糸切り痕		山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系		11	10
71	01溝	M2		5	247.2		9.7	(3.7)		12.0	やや粗	良好	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	回転糸切り痕		山茶碗	碗	12世紀～13世紀	南部系		11	17
72	01溝	M3	C4Ⅲ	2	4.1	13.0		(2.3)	1.4		密	良好	浅黄	2.5Y7/3	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	碗	14世紀～15世紀	北部系		11	10
73	NR	M3		1	14.6			(2.7)			やや粗	良好	浅黄橙	10YR8/4	にぶい黄橙	10YR7/2	隆帯		縄文土器	深鉢	縄文中期			12	11
74	NR	M3	01-1.01-2	4	83.0			(8.4)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	明褐	7.5YR5/6	条痕後撫でか？		縄文土器	深鉢	縄文後期以降			12	11
75	NR	M3	01-1.01-2	10	659.9		8.0	(15.1)		12.0	密	良好	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR5/3		煤付着	縄文土器	深鉢	縄文後期以降			12	11
76	NR	M3		2	26.9			(8.0)			密	良好	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/4	削り		縄文土器	深鉢	縄文晩期			12	11
77	NR	M3		1	14.7			(3.7)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	撫で．煤	撫で	縄文土器	深鉢	縄文晩期			12	11
78	NR	M3		1	51.4			(4.1)			粗	不良	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR5/3	押し引き（貝殻）		縄文土器	深鉢	縄文晩期			12	11
79	NR	M3		1	21.2			(3.4)			やや密	良好	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	張り付け突帯．押圧		弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭		樫王併行	12	10
80	NR	M3		1	8.7			(3.3)			やや密	良好	暗灰	N3	にぶい赤褐	5YR4/4	条痕		弥生土器	甕（砲弾形）	弥生前期前葉初頭		樫王併行	12	10
81	NR	M3		1	5.8			(1.4)			やや密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	橙	5YR6/6	条痕．押し引き		弥生土器	壺	弥生中期前葉		朝日併行	12	10
82	NR	M3		2	22.5			(4.8)			やや粗	良好	暗灰	N3	灰白	10YR8/2	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			12	10
83	NR	M3		1	11.7			(3.3)			密	良好	黒褐	7.5YR3/2	にぶい褐	7.5YR5/4	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			12	10
84	NR	M3		1	11.6			(3.3)			やや密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			12	10
85	NR	M3		1	11.2			(3.7)			やや密	良好	暗灰	N3	褐灰	10YR5/1	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			12	10
86	NR	M3		1	9.8			(4.4)			やや密	良好	にぶい褐	7.5YR6/3	明赤褐	5YR5/6	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			12	10
87	NR	M3	01-1.01-2	15	190.8		8.4	(3.9)		9.5	やや粗	良好	明赤褐	5YR5/6	灰褐	5YR4/2	条痕掻き上げ．底部圧痕	煤付着	弥生土器	甕	弥生前期			12	17
88	NR	M3		1	37.3		7.5	(1.3)		2.7	やや密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	灰	N5/	条痕	剥がれ	弥生土器	甕	弥生前期			12	10
89	NR	M3		1	13.8			(3.7)			密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	条痕．跳ね上げ文		弥生土器	壺	弥生中期前葉		朝日併行	12	10
90	NR	M3	01-2	4	42.9	13.1		(4.3)	2.5		やや粗	良好	暗灰	N3/	灰黄	2.5Y7/2	条痕		弥生土器	壺	弥生中期前葉		岩滑	12	10
91	NR	M3		5	63.8		5.5	(8.3)		4.5	やや粗	良好	灰黄褐	10YR5/2	褐灰 暗灰	10YR4/1 N3		板か棒削り	弥生土器	壺	弥生中期			12	12
92	NR	M3	01-1.01-2	7	52.6	10.6		(6.4)	1.3		やや密	良好	灰白	10YR8/2	にぶい黄橙	10YR7/2	刷毛目．板撫で	刷毛目	弥生土器	壺	弥生中期～後期初頭	信州系持込		12	12
93	NR	M3	01-1.01-2	15	90.6			(11.8)			やや密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/4	刷毛目	刷毛目	弥生土器	壺	弥生中期～後期初頭	信州系持込		12	12
94	NR	M3		1	9.8	14.3		(2.7)	0.8		密	良好	にぶい橙	7.5YR7/3	灰褐	7.5YR6/2			土師器	甕	古墳時代(7世紀以前)			12	12
95	NR	M3	D6Ⅲ	2	5.9	12.1		(2.0)	1.4		密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1			須恵器	坏蓋	7世紀			12	12

掲載番号	出土区	層位	接合	破片数	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	口径残存率 /12	底径残存率 /12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整 外面	整形・調整 内面	種類	器種	時代	産地	備考	挿図	図版
96	NR	M3	01溝1層	5	131.0	9.5	5.7	3.1	2.5	12.0	密	良好	灰白	N7/	灰白	N7			須恵器	坏身	7世紀			12	18
97	NR	M3		1	8.3	10.3		(2.6)	0.7		密	良好	灰	N6/	灰	N6/			須恵器	坏身	7世紀			12	12
98	NR	M3	01-1 C2 I	6	59.2		6.4	(3.2)		9.0	密	良好	黄灰	2.5Y6/1	灰黄	2.5Y7 2			須恵器	坏身	7世紀			12	18
99	NR	M3	01-1.01-2. B3 I	6	35.4			(10.5)			密	良好	灰白	N7/	灰白	N7/	掻き目？	剥がれ	須恵器	提瓶	7世紀			12	12
100	NR	M3		1	4.0	18.8		(0.8)	0.7		密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1			須恵器	坏蓋	8世紀			12	12
101	NR	M3		1	53.6	7.9	3.4	2.4	1.4	12.0	やや粗	良好	灰白	5Y8/1	灰白	2.5Y8/2	回転糸切り痕	使用か？	山茶碗	小皿	12世紀後～13世紀前	南部系		12	18
102	NR	M3	01-1	2	67.4		7.8	(4.4)	3.3		やや粗	良好	褐灰	10YR6/1	黄灰	2.5Y5/1		漆？付着	山茶碗	碗	12～13世紀	南部系		12	12
103	14溝	M1	01-3	3	64.1	10.7	5.2	3.3	3.5	9.0	やや粗	良好	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1			山茶碗	小碗	12世紀中	南部系		13	18
104	14溝	M1		2	22.1	15.3		(4.4)	2.0		やや密	良好	灰白	10YR7/1	にぶい黄橙	10Y7/2			山茶碗	碗	12世紀中	南部系		13	12
105	14溝	M1		1	27.3		7.0	(1.8)		2.2	密	やや不良	灰白	5Y7/1	灰白	2.5Y8/2	回転糸切り痕	使用か？	山茶碗	碗	12世紀中	南部系		13	12
106	02溝			1	2.3	16.8		(1.8)	0.3		密	良好	灰白	2.5Y8/1	灰黄	2.5Y7 2			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		13	12
107	15溝	M2		1	30.3			(7.8)			密	良好	明黄褐	10YR7 6	橙	7.5YR7 6	縦羽状		弥生土器	甕	弥生前期			16	15
108	15溝	M2		1	4.2			(2.4)			密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰黄	2.5Y7 2	自然釉	自然釉	須恵器	不明	不明			16	13
109	15溝	M1		1	20.1		12.2	(2.3)		0.6	密	良好	灰白	5Y7 1	黄灰	2.5Y6/1	自然釉付着		須恵器	坏身	8世紀		金属器写し	16	13
110	15溝			1	94.1			(7.8)			密	良好	黄灰	2.5Y5/1	浅黄	2.5Y7 3	叩き痕	自然釉	須恵器	甕	不明			16	13
111	15溝	M2		1	1.7	14.3		(1.4)	0.6		密	良好	灰白	2.5Y8 1	灰白	2.5Y7 1			灰釉陶器	碗	不明			16	13
112	15溝	M2	05-3	3	189.7		7.3	(3.0)		10.0	やや密	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰黄	2.5Y7/2	回転糸切り痕	使用	山茶碗	碗	12世紀	南部系		16	18
113	15溝	M1		3	55.9	16.7	8.0	4.9	0.6	0.3	やや密	良好	灰白	5Y7 1	オリーブ黄	5Y6 3		自然釉	山茶碗	碗	12～13世紀	南部系		16	13
114	15溝	M2		1	8.9	16.8		(3.0)	0.4		やや粗	良好	灰黄	2.5Y6 2	灰黄	2.5Y7/2		自然釉	山茶碗	碗	12～13世紀	南部系		16	13
115	15溝	M2		1	14.4		8.0	(1.7)		3.3	やや粗	良好	灰白	2.5Y7 1	灰白	2.5Y7 1			山茶碗	碗	12～13世紀	南部系		16	13
116	15溝			1	58.8		8.6	(2.2)		3.0	やや粗	良好	灰白	5Y6/1	灰白	5Y7/1		使用？	山茶碗	碗	12～13世紀	南部系		16	13
117	15溝	M2		4	15.0	8.7	6.2	1.1	2.0	7.9	密	良好	灰白	2.5Y7 1	灰白	2.5Y7/1	回転糸切り痕	自然釉	山茶碗	皿	14～15世紀	北部系		16	13
118	15溝		D6Ⅲ	2	14.4	8.1	5.3	1.2	3.3	5.5	密	良好	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/2	回転糸切り痕	指撫で痕．自然釉	山茶碗	皿	14～15世紀	北部系		16	13
119	15溝			1	10.7	8.6	4.3	1.2	2.4	3.5	密	良好	灰白	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	回転糸切り痕		山茶碗	皿	14～15世紀	北部系		16	13
120	15溝	M1		3	38.1		5.0	(1.5)		7.5	密	良好	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	回転糸切り痕	指撫で痕	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	13
121	15溝	M1		4	20.9	12.1		(2.8)	2.9		密	良好	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	14
122	15溝	M2	15-3	5	26.1	11.4	5.1	2.3	2.6	4.0	密	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	14
123	15溝	M2	15-1	10	65.7	12.0	4.9	2.5	6.2	10.8	密	良好	灰褐	7.5Y6/2	灰黄褐	10YR6/2			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	18
124	15溝	M2		2	50.1	11.5	5.0	2.8	5.5	6.0	密	良好	灰白	2.5Y8 2	灰白	2.5Y8/2	回転糸切り痕		山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	14
125	15溝	M2	15-1	12	125.5	11.5	4.6	3.5	12.0	12.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰白	2.5Y8/2	回転糸切り痕	籾殻圧痕	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	18
126	15溝	M1	05-3	3	46.2		4.5	(2.5)		11.0	密	良好	灰白	5Y7 1	灰白	2.5Y8/2	回転糸切り痕 板目圧痕	指撫で痕	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	14
127	15溝	M1		3	58.2		5.6	(2.6)		6.0	密	良好	灰黄	2.5Y7 2	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	14

掲載番号	出土区	層位	接合	破片数	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	口径残存率 /12	底径残存率 /12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整外面	整形・調整内面	種類	器種	時代	産地	備考	挿図	図版
128	15溝	M2	05-3	2	39.7		4.8	(1.7)		12.0	密	良好	灰白	5Y7/2	灰白	5Y7/2		指撫で痕	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	14
129	15溝	M2		2	29.9		5.1	(2.5)		2.1	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2		指撫で痕	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	14
130	15溝			1	52.9		6.3	(2.6)		5.7	密	良好	灰白	5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	底部板目圧痕	指撫で痕	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		16	14
131	15溝	M1		1	37.9		5.8	(2.6)		4.1	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰白	5Y8/2	削り	釉	白磁	碗	不明			16	16
132	15溝	M2	D5Ⅲ.05-1	11	121.5	13.0	5.5	5.3	2.6	7.0	密	良好	灰白	2.5Y8/2	淡黄	2.5Y8/3	釉	釉	陶器	平碗	15世紀前半	古瀬戸		16	18
133	15溝			1	15.5	14.5		(4.0)	0.4		密	良好	赤黒	10R2/1	にぶい赤褐	5YR4/3	釉	釉	陶器	天目茶碗	15世紀前半	古瀬戸		16	16
134	15溝			1	30.1	16.8		(4.5)	0.3		やや粗	良好	にぶい赤褐	5YR4/3	暗赤褐	5YR3/3	釉	釉	陶器	鍋	15世紀	古瀬戸		16	15
135	15溝	M1		3	86.6	19.0	9.3	5.0	1.0	3.1	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	口縁釉. 底部削り	口縁釉	陶器	不明	15世紀？	古瀬戸		16	16
136	15溝			1	22.9	26.8		(4.0)	0.3		密	良好	浅黄	5Y7/3	浅黄	5Y7/3	釉	釉	陶器	折縁深皿	15世紀後半	古瀬戸		16	16
137	15溝	M2	15-1	3	25.8	30.4		(4.0)	0.4		やや密	良好	にぶい赤褐	2.5YR4/4	にぶい赤褐	2.5YR4/3	釉	釉	陶器	擂鉢	15世紀後半	古瀬戸？		16	15
138	15溝	M1		4	28.6	34.0		(2.5)	1.7		やや密	良好	灰褐	5YR4/2	褐灰	5YR4/1	釉	釉	陶器	擂鉢	15世紀後半	古瀬戸		16	15
139	15溝	M2	15-1	2	101.8		11.1	(5.4)		1.9	やや密	良好	灰褐	5YR5/2	褐灰	5YR5/1	釉	釉. 卸目	陶器	擂鉢	15世紀後半	古瀬戸		17	15
140	15溝	M2	B6Ⅲ	3	33.9		8.4	(5.7)		0.8	やや粗	良好	にぶい赤褐	5YR5/3	灰黄	2.5Y7/2	釉	卸目	陶器	擂鉢	15世紀後半	古瀬戸		17	15
141	15溝	M2									密	良好	灰オリーブ	7.5Y6/2	灰オリーブ	7.5Y6/2	釉	釉	陶器	不明	15世紀？	古瀬戸？	141～143は同一個体	17	16
142	15溝	M2									密	良好	灰オリーブ	7.5Y6/2	灰オリーブ	7.5Y6/2	釉	釉	陶器	不明	15世紀？	古瀬戸？	141～143は同一個体	17	16
143	15溝	M2	D5Ⅲ.15-1	8	292.7		9.5	(1.3)		3.5	密	良好	灰オリーブ	7.5Y6/2	灰オリーブ	7.5Y6/2	釉	釉	陶器	不明	15世紀？	古瀬戸？	141～143は同一個体	17	16
144	15溝	M2		6	21.4	10.2		(5.6)	0.4		密	良好	黒褐	5YR3/1	暗赤褐	5YR3/2	釉	釉	陶器	天目茶碗	17世紀	瀬戸美濃		17	16
145	05溝	M3		1	26.9	17.8		(3.7)	0.7		密	良好	橙	7.5YR7/6	にぶい黄橙	10YR7/3	刷毛目、板撫で	刷毛目	土師器	甕	7世紀			18	15
146	05溝	M1		2	5.8	12.2		(2.0)	1.5		密	良好	浅黄	2.5Y7/4	浅黄	2.5Y7/4			灰釉陶器	碗	不明			18	13
147	05溝	M1		1	42.4		5.0	(1.9)		12.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2		使用か？	灰釉陶器	碗	10世紀			18	13
148	05溝	M1		1	16.5	15.8		(3.6)	0.8		密	やや不良	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/2			山茶碗	碗	11世紀後～12世紀初	南部系		18	13
149	05溝	M1		1	26.0		7.2	(2.4)		2.5	やや密	良好	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3			山茶碗	碗	11世紀後～12世紀初	南部系		18	13
150	05溝	M1		1	3.5	7.8	3.8	1.0	0.8	2.0	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1			山茶碗	Ⅲ	14～15世紀	北部系		18	13
151	05溝	M1		1	3.3	7.6	4.8	0.8	1.0	1.5	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	Ⅲ	14～15世紀	北部系		18	13
152	05溝	M2	05-1	2	5.7	8.3	5.6	1.0	0.5	4.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	Ⅲ	14～15世紀	北部系		18	13
153	05溝	M2		1	4.5	8.4	4.8	1.0	1.5	2.0	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1			山茶碗	Ⅲ	14～15世紀	北部系		18	13
154	05溝	M3	15溝	2	33.4	8.1	5.2	1.0	8.0	10.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	回転糸切り痕		山茶碗	Ⅲ	14～15世紀	北部系		18	18
155	05溝	M3		1	6.6	8.2	4.0	1.1	0.5	2.5	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	回転糸切り痕		山茶碗	Ⅲ	14～15世紀	北部系		18	13
156	05溝	M2	D5Ⅲ. D5Ⅱ	3	36.3	11.6	5.0	2.2	2.0	9.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	浅黄	2.5Y7/3	回転糸切り痕		山茶碗	小碗	14～15世紀	北部系		18	18
157	05溝	M2	15-02.03.05-1	5	71.0	12.0	4.4	2.3	8.0	8.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	18
158	05溝	M2		1	58.7	12.0	4.6	3.0	6.0	7.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	浅黄	2.5Y7/3	回転糸切り痕		山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
159	05溝	M3	05-1	3	27.9	12.0	4.0	2.8	1.5	4.0	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	回転糸切り痕		山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	13

掲載番号	出土区	層位	接合	破片数	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	口径残存率 /12	底径残存率 /12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整 外面	整形・調整 内面	種類	器種	時代	産地	備考	挿図	図版
160	05溝	M3		1	44.8	13.0	4.0	2.6	3.0	6.0	密	良好	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	回転糸切り痕		山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
161	05溝	M3		3	36.3	12.2	5.0	2.7	0.3	7.0	密	良好	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	回転糸切り痕	自然釉	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
162	05溝	M3	C4Ⅲ.E5Ⅲ	4	31.7	13.0		(2.7)	4.5		密	良好	灰白	10YR7/1	灰白	10YR7/1			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
163	05溝	M3		2	30.5		4.0	(3.0)		4.5	密	良好	淡黄	2.5Y8/4	淡黄	2.5Y8/4		漆？付着	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	13
164	05溝	M1		1	17.7	13.2	3.2	4.3	1.5	1.0	密	良好	淡黄	2.5Y8/3	淡黄	2.5Y8/3			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	13
165	05溝	M3	15-2	2	12.7	15.0		(3.8)	2.0		密	良好	灰白	5Y8/2	灰白	5Y8/2			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	13
166	05溝	M1		1	13.3		5.2	(3.0)		2.5	密	良好	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2		指撫で	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
167	05溝	M1		1	17.8		4.8	(1.8)		4.5	密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	明黄褐	10YR7/6	回転糸切り痕	指撫で	山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
168	05溝	M2		1	28.5		4.4	(2.4)		6.0	密	良好	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	回転糸切り痕		山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
169	05溝	M2		1	24.4		7.0	(2.5)		3.0	密	良好	淡黄	2.5Y8/4	淡黄	2.5Y8/3			山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
170	05溝	M3		1	28.2		8.0	(2.9)		3.0	密	良好	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	回転糸切り痕		山茶碗	碗	14～15世紀	北部系		18	14
171	05溝	M1		1	13.3			(2.2)			密	良好	緑灰	10G6/1	緑灰	10G6/1	釉	釉	青磁	盤	14世紀以降	龍泉窯		18	16
172	05溝	M1		2	8.1			(1.5)	2.0		密	やや不良	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	指押さえ	指撫で	土師器	皿	不明			18	15
173	05溝	M1	15-2.D5Ⅲ	8	50.3	18.2		(3.0)	4.0		密	良好	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3			土師器	皿	15世紀後半	京都系		18	15
174	05溝	M3		1	54.8		5.6	(1.6)		7.0	密	良好	灰黄	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y7/2	回転糸切り痕.漆付着	断面に漆付着	陶器	緑釉小皿	15世紀	古瀬戸		18	15
175	05溝	M3		1	32.0	28.0		(2.7)	0.3		やや粗	良好	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1			陶器	片口鉢	15世紀前半	古瀬戸		18	15
176	05溝	M1	15-1	2	44.2	26.0		(4.6)	1.2		密	良好	にぶい赤褐	2.5YR5/3	灰赤	2.5YR4/2	釉	釉	陶器	擂鉢	15世紀後半	古瀬戸		18	15
177	05溝	M2	E5Ⅲ	2	51.0	27.0		(4.0)	1.4		密	良好	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR5/3	釉	釉	陶器	鍋または釜	15世紀	古瀬戸		18	15
178	05溝	M2	05-1	3	76.7	30.0		(10.9)	0.8		密	良好	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR6/3	釉	釉	陶器	鍋または釜	15世紀	古瀬戸		18	15
179	05溝	M2		1	8.9		3.7	(0.6)		3.0	密	良好	橙	5YR6/6	にぶい橙	5YR6/4			陶器	重圏皿	16世紀	瀬戸美濃		18	15
180	C4	Ⅲ		1	16.8			(3.6)			やや密	良好	浅黄橙	10YR8/4	にぶい黄橙	10YR7/4	縄文？		縄文土器	深鉢	縄文中期			21	16
181	B3	Ⅲ		1	52.1			(6.1)			やや粗	良好	にぶい赤褐	5YR4/3	にぶい赤褐	5YR4/3	隆帯．縄文		縄文土器	深鉢	縄文中期			21	16
182		Ⅰ		1	29.9		6.5	(3.6)		1.0	やや密	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR6/6	削り	削り	縄文土器	深鉢	不明			21	16
183	A4	Ⅲ		1	25.7			(4.0)			やや密	良好	灰褐	7.5YR5/2	灰褐	7.5YR4/2	張り付け突帯．押圧		弥生土器	甕	弥生前期前葉初頭		樫王併行	21	16
184	B3	Ⅲ		1	14.9			(4.2)			密	良好	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR6/3	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			21	16
185	A4	Ⅲ		1	5.4			(3.7)			密	良好	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			21	16
186	D3	Ⅲ		1	17.5			(3.9)			やや密	良好	浅黄橙	10YR8/3	黒褐	7.5YR3/1	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			21	16
187	C3	Ⅲ		1	25.3			(4.9)			密	良好	灰黄	2.5Y7/2	橙	7.5YR6/6	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			21	16
188	B3	Ⅲ		1	21.8			(5.4)			やや密	良好	灰褐	7.5YR4/2	にぶい黄褐	10YR5/3	条痕		弥生土器	不明	弥生前期～中期			21	16
189	A4	Ⅲ		1	121.7		6.7	(3.7)		5.0	やや粗	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	条痕		弥生土器	甕	弥生前期			21	16
190	D3	Ⅲ		1	24.2		6.2	(3.0)		2.7	やや密	良好	暗褐	7.5YR3/3	明赤褐	5YR3/4	条痕．底部布目		弥生土器	甕	弥生中期			21	16
191	C4	Ⅲ		1	44.4			(4.0)			密	良好	浅黄橙	7.5YR8/3	橙	7.5YR7/6		刷毛後撫で後磨き	弥生土器	器台	弥生末～古墳初			21	17

掲載番号	出土区	層位	接合	破片数	質量g	口径cm	底径cm	器高cm	口径残存率 /12	底径残存率 /12	胎土	焼成	外面色調	土色帳	内面色調	土色帳	整形・調整 外面	整形・調整 内面	種類	器種	時代	産地	備考	挿図	図版
192	C2	Ⅰ		2	23.5			(4.0)			やや密	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	浅黄橙	10YR8/3			土師器	不明	古墳後期(7世紀以前)		ミニチュア？	21	17
193	D3	Ⅲ		2	20.5	16.8		(2.7)	0.8		密	良好	橙	2.5YR6/6	にぶい橙	7.5YR7/4	撫で	刷毛目	土師器	甕	古墳後期(7世紀以前)			21	17
194	B3	Ⅲ		1	219.5	8.7	4.3	5.9	10.0	12.0	密	良好	灰白 灰	10YR8/2 N4/	灰白 灰	10YR8/2 N5/	指撫で	指撫で、板撫で	土師器	小鉢	不明			21	18
195	A4	Ⅲ		1	11.9	14.1		(2.9)	0.3		やや粗	良好	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4			土師器	甕	不明			21	17
196	C2	Ⅰ		1	9.1			(2.6)			やや密	良好	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい黄橙	10YR6/3			土師器	甕	不明			21	17
197	B4	Ⅲ		1	26.8		10.8	(3.1)		1.2	密	良好	灰	10Y5/1	灰白	10Y7/1	透かし孔		須恵器	高坏	6世紀			21	17
198	D3	Ⅲ		1	8.6	11.9		(2.4)	1.0		密	良好	灰	5Y6/1	灰	5Y6/1			須恵器	坏身	7世紀			21	17
199	C4	Ⅲ		1	18.3			(1.4)			密	良好	黄灰	2.5Y6/1	灰白	2.5Y7/1			須恵器	坏蓋	8世紀前半		つまみ付	21	17
200	C4	Ⅱ		1	11.0		13.1	(1.4)		1.0	密	良好	灰白	7.5Y7/1	灰白	7.5Y7/1			須恵器	坏身	8世紀後半			21	17
201	C4	Ⅲ		1	19.9		11.9	(1.4)		2.0	密	良好	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1			須恵器	坏身	8世紀後半			21	17
202	D4	Ⅲ		1	15.6		11.5	(1.7)		0.1	密	良好	黄灰	2.5Y6/1	灰黄	2.5Y7/2			須恵器	坏身	8世紀末～9世紀初			21	17
203	B3	Ⅰ		1	6.6	7.4		(2.4)	1.4		密	良好	灰黄	2.5Y6/2	にぶい黄	2.5Y6/3	自然釉	自然釉	灰釉陶器	瓶	不明			21	17
204	C4	Ⅲ	E5Ⅲ	2	21.3	16.1		(4.5)	1.2		密	良好	灰オリーブ	5Y6/2	灰オリーブ	5Y6/2	釉	釉	青磁	碗	12世紀	同安窯系		21	17
205	D3	Ⅲ		1	28.2			(5.0)			密	良好	にぶい赤褐	5YR4/3	灰褐	5YR4/2	釉	釉	陶器	釜	15世紀後半	古瀬戸	耳の下の受け	21	17
206	B5	Ⅲ		1	6.3		5.1	(1.0)		2.0	密	良好	暗灰黄	2.5Y5/2	黄灰	2.5Y5/1			陶器	重圏Ⅲ	16世紀	瀬戸美濃		21	17

表16　石器観察表

報告書掲載番号	推定時期	遺構・層位	器種	石材	残存率	刃部属性	形態形成加工	剥片剥離技術	素材剥片形態(石核の場合、剥離される剥片形態)	原石の種類	備考	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	挿図	図版
207		01溝1層	凹基鏃	チャート	完形	SP	SP	不明	剥片	不明	縄文時代の石鏃と思われる。	22.4	19.1	3	0.9	23	19
208		C4Ⅲ	凹基鏃	下呂石	左脚欠	SP	SP	不明	剥片	不明	縄文時代の石鏃と思われる。	26.3	14.8	3.9	0.9	23	19
209		自然流路3層	凹基鏃	下呂石	両脚欠	SP	SP	不明	剥片	不明	縄文時代の石鏃と思われる。	15.2	12.6	3.4	0.6	23	19
210		自然流路3層	凹基鏃	下呂石	先端欠	SP	SP	不明	剥片	不明	縄文時代の石鏃と思われる。	16.8	13.7	3.1	0.5	23	19
211		C4Ⅲ	凹基鏃	下呂石	完形	SP	SP	不明	剥片	不明		17.9	11	2.2	0.1	23	19
212		A4Ⅲ	石鏃未成品	下呂石	先端欠	SP	SP	HvD	剥片	不明		23.8	22.2	4	2.6	23	19
213		15溝1層	石鏃未成品	下呂石	完形	SP	SP	D	剥片	不明		26.9	19.7	6.9	3.1	23	19
214		01溝1層	石鏃未成品	下呂石	完形	SP	SP	D	縦長剥片	不明		28.2	19.1	4.9	2.2	23	19
215		B3Ⅰ	石鏃未成品	下呂石	先端欠	SP	SP	不明	剥片	不明		19.8	19.2	5	1.9	23	19
216		自然流路3層	石鏃未成品	下呂石	先端。基部欠	S'P	S'P	不明	剥片	不明		18.5	15	5.1	1.2	23	19
217		A4Ⅲ	削器	チャート	完形	S'P	なし	HvD	両極石器	不明		20.9	17.5	6.5	0.9	23	19
218		01溝1層	削器	下呂石	完形	素刃＋mf	S'D	HD	矩形剥片	円礫		39.3	48.5	11.1	18.4	23	19
219		01溝2層	削器	下呂石	完形	S'D	S'D	D	剥片	分割円礫		52.8	41.4	16.1	34.6	23	19
220		01溝2層	使用痕剥片	黒曜石	完形	素刃＋mf	なし	D	剥片	不明	右側辺に摩耗した部分あり。	22.2	13.1	4.4	1.3	23	19
221		D5Ⅲ	使用痕剥片	下呂石	完形	素刃＋mf	なし	不明	剥片	不明		27.6	37.3	13.8	7.9	23	19
222		01溝1層	二次加工剥片	下呂石	完形	S'P	S'P	HvD	剥片	不明		18.3	14.7	3.8	1.2	23	19
223		052区上層	二次加工剥片	下呂石	完形	S'P	S'P	不明	剥片	不明		19.5	26	6.8	3	23	19
224		A4Ⅲ	二次加工剥片	下呂石	完形	なし	S'D	不明	剥片	不明		26.2	32.5	8.5	5.9	23	19
225		自然流路3層	二次加工剥片	下呂石	完形	S'P	S'P	不明	剥片	円礫		24.4	26.5	9.6	4.2	23	19
226		15溝下層	両極石器	下呂石	完形	なし	HvD	HvD	剥片	不明	二次加工の垂直打撃と思われる。	23.1	23.5	8.3	4.5	23	19
227		自然流路3層	両極石器	下呂石	下半欠	なし	HvD	HvD	剥片	円礫	二次加工の垂直打撃である。	26.4	20	4.5	2.2	23	19
228		15溝3層	剥片	下呂石	完形	なし	なし	HvD	HvD剥片	円礫		37.4	23.8	8.5	5.5	23	19
229		01溝1層	作業面再生剥片	下呂石	完形	なし	なし	HD	矩形剥片	円礫		43.6	52	12	24.1	23	19
230		01溝1層	石核	下呂石	完形	適用外	適用外	HD	矩形剥片	分割円礫	剥離角120° 程度	50	44	20.2	40.5	24	19

報告掲載番号	推定時期	遺構・層位	器種	石材	残存率	刃部属性	形態形成加工	剥片剥離技術	素材剥片形態(石核の場合、剥離される剥片形態)	原石の種類	備考	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	挿図	図版
231		01溝2層	石核	下呂石	完形	適用外	適用外	HvD	HvD剥片	分割円礫	剥離角100°程度	35	57.1	31.1	66.8	24	19
232		053区上層	石核	下呂石	完形	適用外	適用外	HD	矩形剥片	円礫		74.8	57.6	22.7	83.8	24	19
233		表採	石核	下呂石	完形	適用外	適用外	HvD	HvD	円礫		94.9	83.6	41.9	374.6	24	19
234		01溝1層	両極石核	下呂石	完形	適用外	適用外	HvD	HvD剥片	不明		39.8	30	24.6	22.3	24	19
235		01溝1層	両極石核	下呂石	完形	なし	HvD	HvD	HvD剥片	不明		34	37.9	8.8	11.3	24	19
236		01溝2層	両極石核	下呂石	完形	適用外	適用外	HvD	不明	不明		34	49.8	19.1	29	25	19
237		01溝2層	両極石核	下呂石	完形	適用外	適用外	HvD	HvD剥片	円礫		46.8	34.3	14	24	25	19
238		01堰2層	両極石核	下呂石	完形	なし	HvD	HvD	HvD剥片	円礫		43.2	35.9	14	18.7	25	19
239		D3Ⅲ	両極石核	下呂石	完形	なし	HvD	HvD	HvD剥片	不明		28.3	39.6	8.7	7.9	25	19
240		自然流路3層	両極石核	下呂石	断片	なし	なし	HvD	HvD剥片	円礫	両極石核の断片	33.9	31	12.8	9.3	25	19
241		自然流路3層	原石	黒曜石	下半欠	適用外	適用外	適用外	適用外	亜角礫	ズリ状の原石。表裏とも自然風化している。	24.5	13.5	7.3	1.9	25	19
242		01溝2層	原石	下呂石	完形	適用外	適用外	適用外	適用外	円礫		45.5	41.9	33	91	25	19
243		自然流路3層	原石	下呂石	完形	適用外	適用外	適用外	適用外	円礫		50.3	43.4	40.6	72.5	25	19
244		011層	打製石斧	ホルンフェルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	剥片	不明	刃部正面の摩耗顕著、裏面側に刃こぼれ顕著	104.4	43	10.9	64.5	26	20
245		01溝2層	打製石斧	ホルンフェルス	基部欠	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	横長剥片	不明		83.6	49.6	9.9	60.3	26	20
246		15溝下層	打製石斧	泥岩	基部欠	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	剥片	不明		83.6	50.1	12.6	67.6	26	20
247		051区上層	打製石斧	ホルンフェルス	基部断片	不明	HD	不明	横長剥片	不明		82.2	51	13.3	60.6	26	20
248		053区上層	打製石斧	ホルンフェルス	刃部欠	不明	HD	不明	横長剥片	不明	背面に自然面を残す。	111.8	42.3	23.2	116.5	26	20
249		053区上層	打製石斧	ホルンフェルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	縦長剥片	不明	刃部正面摩耗顕著	118.6	50.5	10.3	76.6	26	20
250		自然流路	打製石斧	ホルンフェルス	完形	刃こぼれ	HD	不明	横長剥片	不明	表面風化激しい。	102.1	36.6	13.5	65.8	26	20
251		自然流路3層	打製石斧	ホルンフェルス	完形	刃こぼれ	HD	不明	横長剥片	不明		133.2	47.9	16.3	111.3	26	20
252		自然流路	打製石斧	ホルンフェルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	剥片	不明	刃部表裏先端部摩耗、刃部左側辺摩耗顕著。縦斧の可能性	99.1	35.5	14	70.2	26	20
253		自然流路3層	打製石斧	泥岩	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	剥片	不明	刃部正面の摩耗顕著、裏面側に刃こぼれ顕著	103.4	41.4	13.9	75.4	26	20
254		自然流路3層	打製石斧	ホルンフェルス	完形	刃こぼれ	HD	不明	剥片	不明	表面風化激しい。	153.7	45.7	19	129.5	26	20
255		A4Ⅲ	打製石斧	ホルンフェルス	基部欠	刃こぼれ	HD	不明	剥片	不明		92.3	58.6	16	83.9	26	20
256		B3Ⅲ	打製石斧	ホルンフェルス	完形	刃こぼれ	HD	不明	剥片	不明		115.1	43.2	11.6	54	26	20
257		B3Ⅲ	打製石斧	泥岩	刃部欠	不明	HD	不明	剥片	不明		95.7	49.7	16.9	90.2	26	20
258		B3Ⅲ	打製石斧	ホルンフェルス	基部欠	刃こぼれ	HD	不明	剥片	河原礫	背面に自然面を残す。	110.1	51.9	17.2	149.1	26	20
259		C3Ⅲ	打製石斧	泥岩	断片	不明	HD	不明	剥片	不明	バチ形	96.8	67.3	21	115.9	26	20
260		D3Ⅲ	打製石斧	泥岩	完形	刃こぼれ	HD	不明	横長剥片	楕円礫	背面に自然面を残す。	96.1	69.1	19.9	85.6	26	20
261		D5Ⅲ	打製石斧	ホルンフェルス	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	剥片	不明	刃部正面に摩耗。	106	40.9	11.1	55.9	26	20
262		F5Ⅱ	打製石斧	ホルンフェルス	完形	摩耗、刃こぼれ	CHD	不明	横長剥片	不明		90.4	36.1	17.8	74.2	27	21
263		05溝2層	打製石斧未製品	ホルンフェルス	完形	なし	HD	不明	横長剥片	不明		158.8	64.4	28.9	317.1	27	21
264		15溝上層	二次加工剥片	凝灰岩	完形	なし	HP	不明	剥片	不明		44.2	52.3	7.3	18.6	27	21
265		D3Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	完形	なし	なし	HD	縦長剥片	不明		105.3	40.6	11	111.8	27	21
266		A4	敲石	凝灰岩？	関係	適用外	適用外	適用外	適用外		端部にわずかに敲打痕	100.8	52	45.6	313	27	21
267		C3Ⅲ	敲石	ホルンフェルス	完形	刃潰れ、刃こぼれ	HD	なし	適用外	棒状礫	端部に刃潰れ顕著、側辺に一部浅い抉り部が作出されており、着柄のためと推定される。主面部に敲打痕がある。これも着柄のための工夫と推定される。この石器は、石斧のように装着されて使用されたと推定。	208.1	70.2	49.5	990.1	27	21
268	晩期後半～弥生	D5Ⅲ	凹基鏃	下呂石	完形	広SP	広SP	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	27.6	18	4.5	1.7	28	21
269	晩期後半～弥生	土坑7上層	石鏃未成品	下呂石	完形	広SP	広SP	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	25.7	16.6	5.3	1.9	28	21
270	晩期後半～弥生	01溝2層	有茎鏃	チャート	完形	SP	SP	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	24.2	13.4	4.7	0.6	28	21
271	晩期後半～弥生	15溝下層	有茎鏃	チャート	完形	SP	SP	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	20	11.2	4.3	0.8	28	21
272	晩期後半～弥生	01溝2層	有茎鏃	下呂石	完形	SP	SP	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	27.3	13.9	6.8	2.4	28	21
273	晩期後半～弥生	自然流路3層	有茎鏃	下呂石	先端。基部欠	SP	SP	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	21.4	12.8	5.1	1.4	28	21
274	晩期後半～弥生	自然流路3層	有茎鏃	下呂石	完形	SP	SP	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	29	16.6	7.5	2.7	28	21
275	晩期後半～弥生	A4Ⅲ	有茎鏃	下呂石	上半欠	SP	SP	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	23	15.6	5.6	1.4	28	21
276	晩期後半～弥生	A4Ⅲ	尖頭器状石器	下呂石	完形	広SP	広SP	D	剥片	円礫	晩期後半～弥生所産と思われる。	35.9	22	9.9	5.7	28	21
277	晩期後半～弥生	01溝1層	尖頭器状石器	下呂石	先端欠	広S'P+S'I	広S'P+S'I	不明	剥片	不明	晩期後半～弥生所産と思われる。	32.3	23.3	9	6.1	28	21
278	晩期後半～弥生	01溝2層	尖頭器状石器未成品	下呂石	完形	広SP+SI	広SP+SI	D	横長剥片	円礫	晩期後半～弥生所産と思われる。	40.2	23.1	5.3	4.8	28	21
279	弥生	01溝1層	磨製石庖丁	粘板岩	左側欠	研磨	研磨	不明	不明	不明	刃部に摩耗痕あり。	54.1	78.8	10.7	57	28	22
280	弥生	01溝2層	大型直縁刃石器	粘板岩	右側欠	HD	HD	不明	HvD	不明		78.4	86.3	18.2	135.2	28	22
281	弥生？	C5Ⅲ	打製石鎌状石器	泥岩	完形	摩耗、刃こぼれ	HD	不明	剥片	円礫	右側辺に抉りを作出	48.5	115.2	12.7	83.5	28	22
282	近世	15溝	茶臼（下臼）	凝灰岩	断片	摩滅	適用外	適用外	適用外	不明	磨面はかなり摩滅している。	72.1	73.6	73.7	167.6	28	22

図　　版

遺跡全景（南から）

作業風景

作業風景

図版2

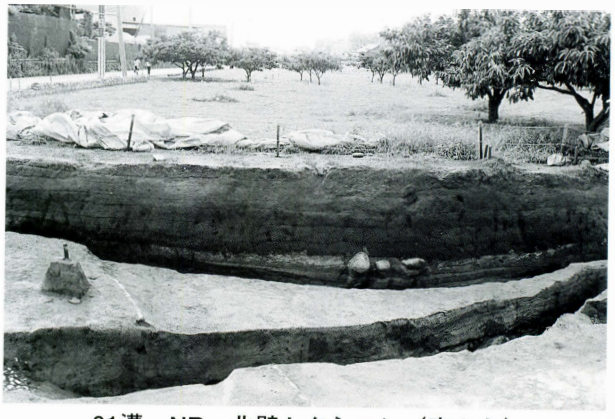
調査区南壁メインセクション中央（北から）

東壁メインセクション中央（西から）

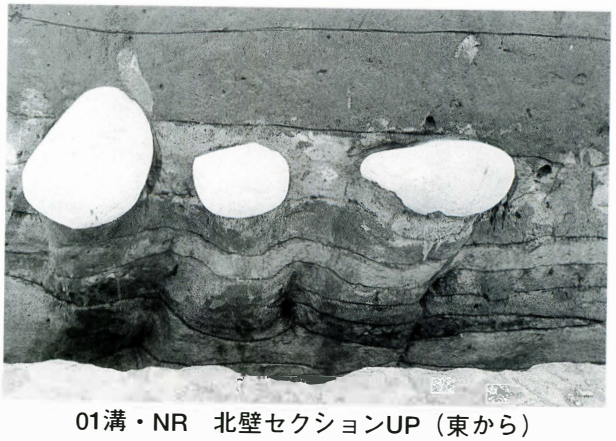
北壁西側セクション（南から）

01溝・11堰　検出状況（南から）

01溝全景（東から）

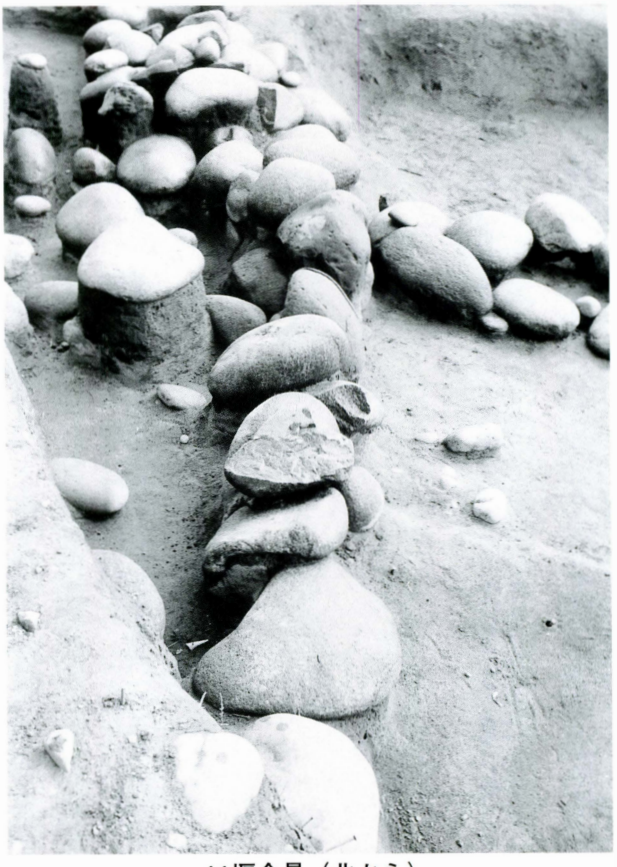


01溝・NR　北壁セクション（東から）



01溝・NR　北壁セクションUP（東から）

11堰全景（南から）



11堰全景（北から）

11堰全景（西から）

11堰東西ベルトセクション（北から）

14溝全景（北から）

14溝セクション（南から）

図版4

02溝・03溝全景（南から）

調査区全景（南東から）

調査区全景（北東から）

05溝　検出状況（南から）

05溝・15溝全景（南から）

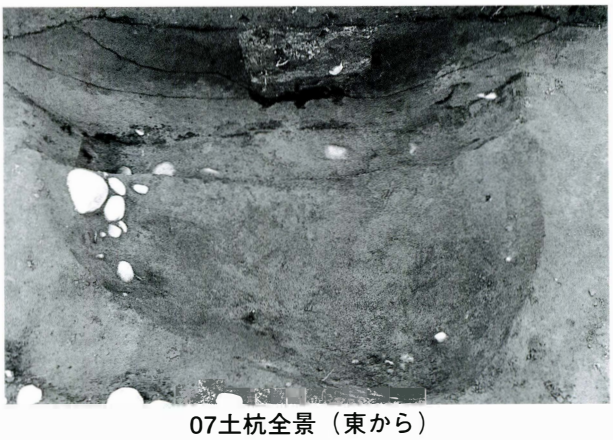
05溝・15溝　a-a'セクション（南から）

05溝・15溝　b-b'セクション（南から）

05溝・15溝　c-c'セクション（北から）

作業風景

07土杭セクション（東から）

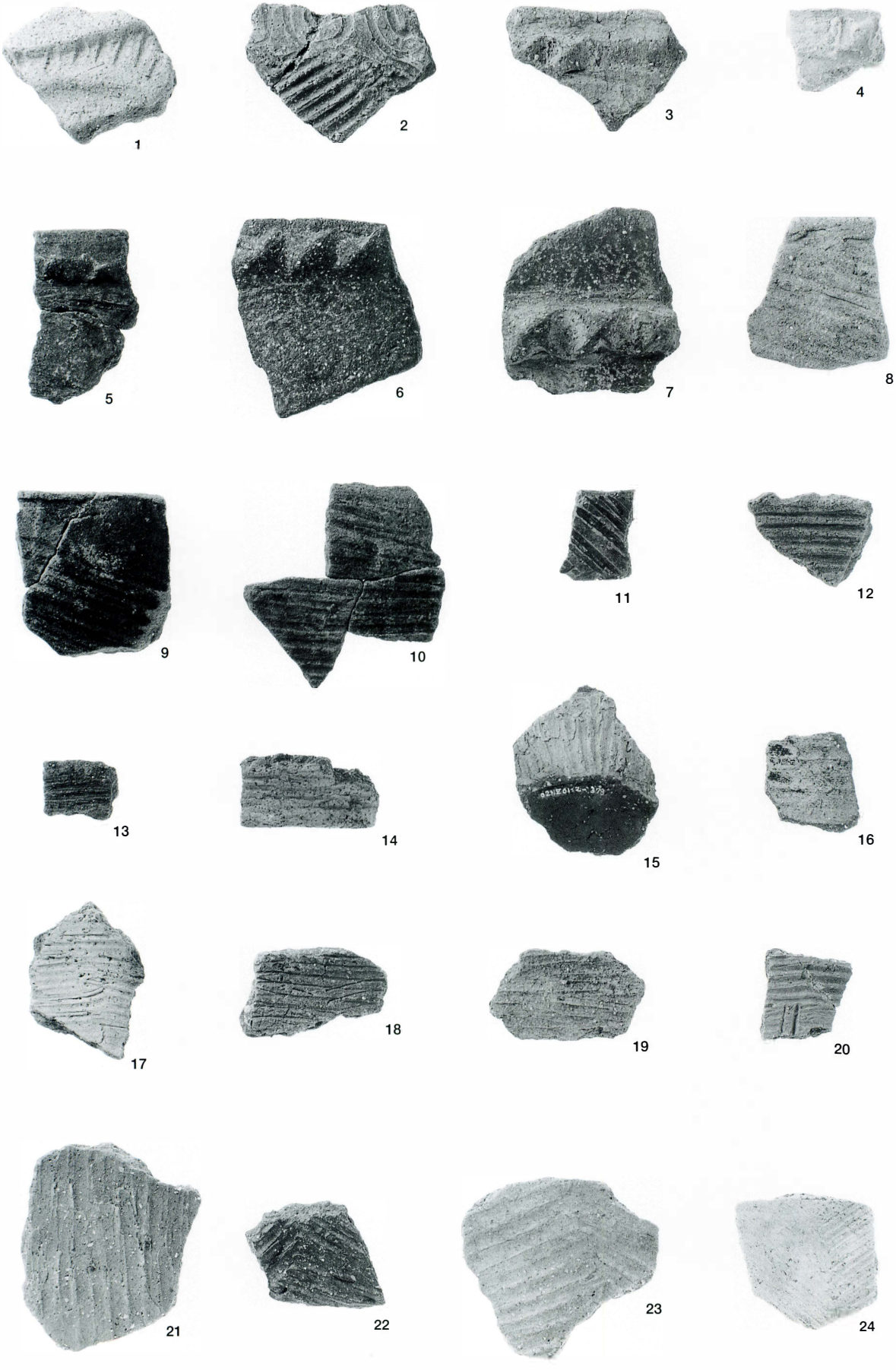


07土杭全景（東から）

08土杭セクション（東から）

08土杭全景（東から）

図版6



01溝出土遺物（1）

25

26

27

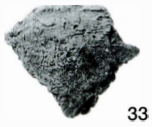
28

29

30

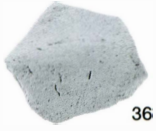
31

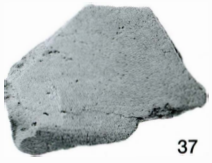
32

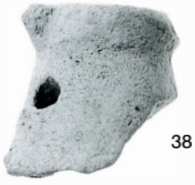

33

34

35


36


37

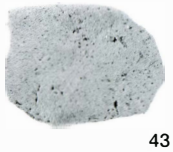

38

39

40

41

42


43

44

45

46

47

48

01溝出土遺物（2）

図版8

50

51

52

53

49

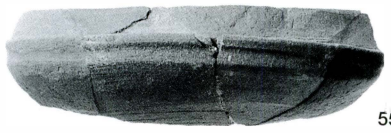
54

61

62

62

63



55

56

59

57

60

60

01溝出土遺物（4）

図版10

64

65

66

68

67

69

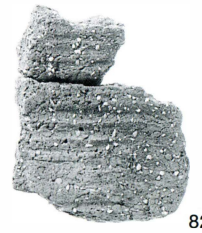
70

72

79

80

81


82

83

84

85

86

88

89

90

90

01溝出土遺物（5）、自然流路出土遺物（1）

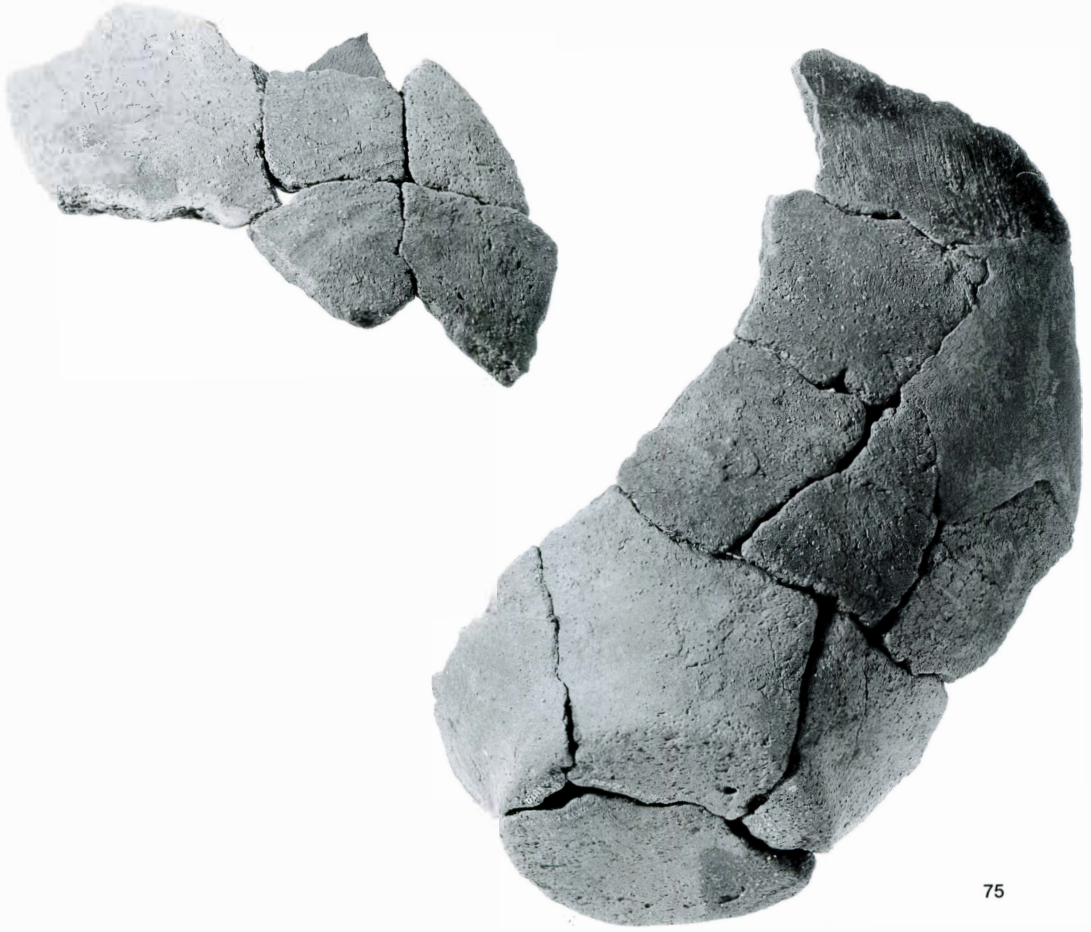
73

77

76

74

78


75

自然流路出土遺物（2）

図版12

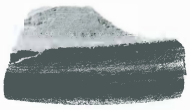
92

91

93

94

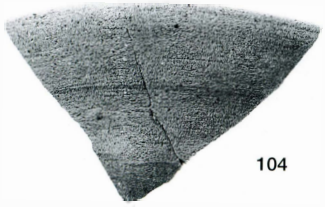
95


97

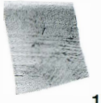
99

100

102


104

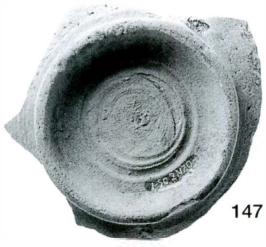
105

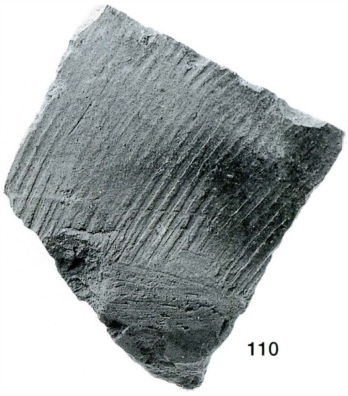

106

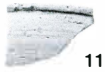
自然流路出土遺物（3）、14溝・02溝出土遺物

108

109


147

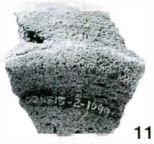

110

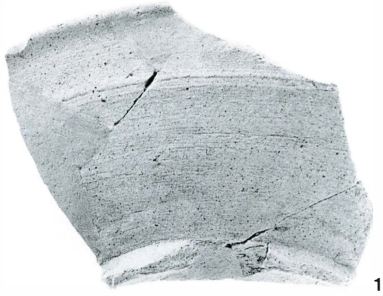

111

146

148

114


115

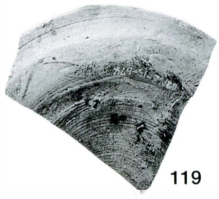

113

149

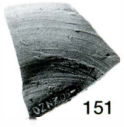
116

117

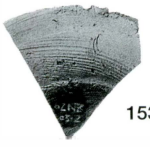
118


119

150


151

152

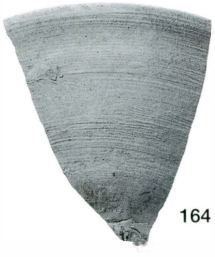

153

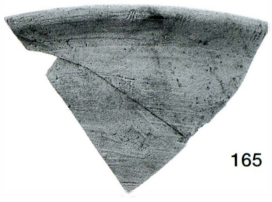
155

120

159

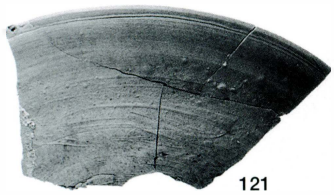
163


164


165

05溝・15溝出土遺物（1）

図版14


121

122

124

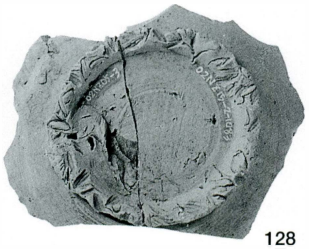
158

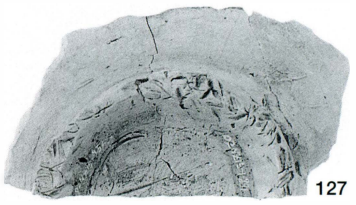
160

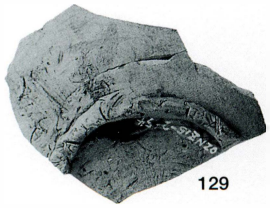
161

162

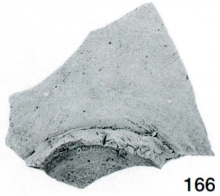
126


128


127


129

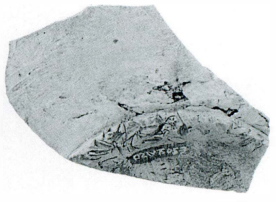
130


166

167

168

169

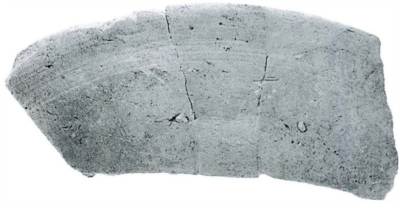

170

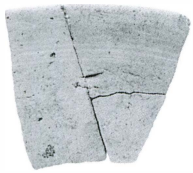
05溝・15溝出土遺物（2）

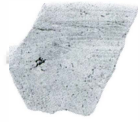
107

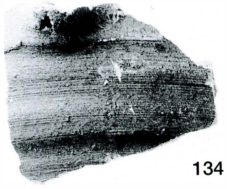
145

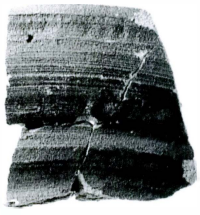
172


173






134

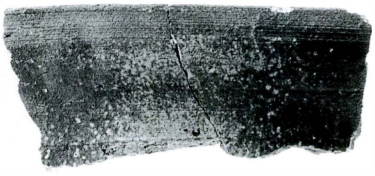

137

138

139

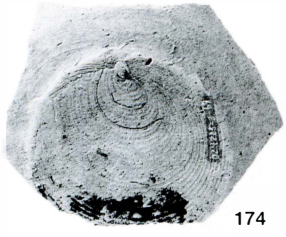
140

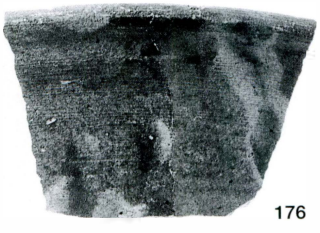
175


177

178

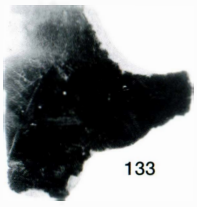
179

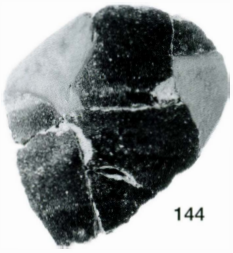

174

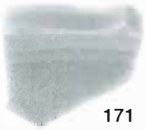

176

05溝・15溝出土遺物（3）

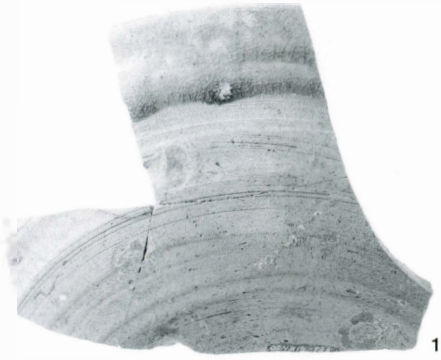
図版16

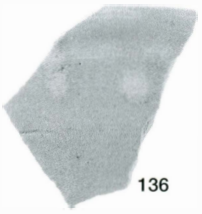

133

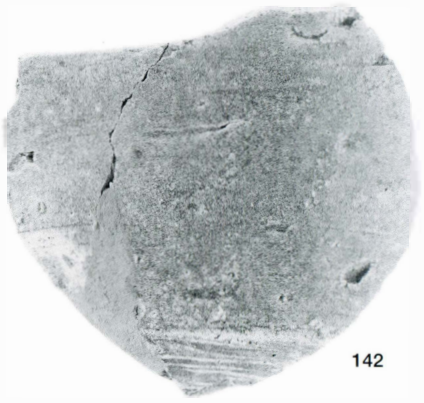

144

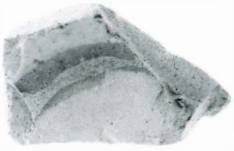

171

141


135


136


142


131

143

180

181

182

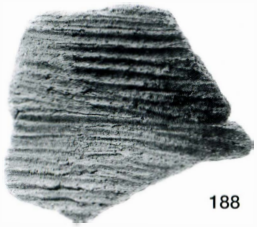
183

184

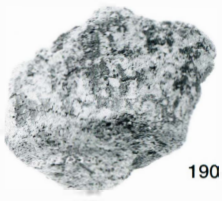
185

186

187

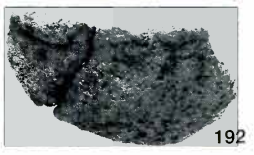

188

189

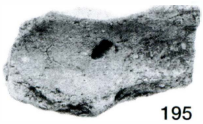

190

05溝・15溝出土遺物（4）、包含層出土遺物（1）

191


192

193

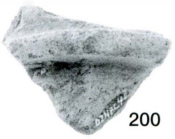

195

196

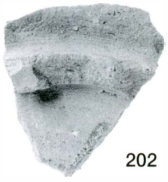
197

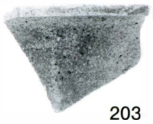
198

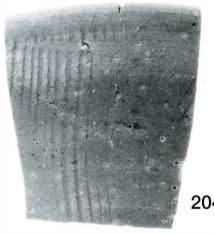
199


200

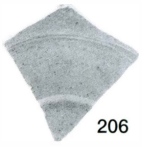
201


202


203


204

205


206

58

87

71

01溝

87

自然流路

包含層出土遺物（2）、01溝・自然流路出土遺物

図版18

96

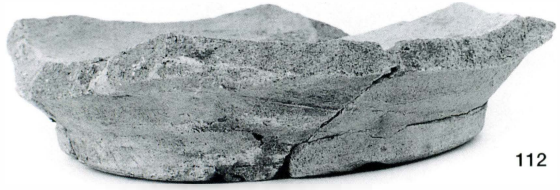
98

101

自然流路

103

14溝出土


112

123

15溝出土

125

132

15溝出土

156

157

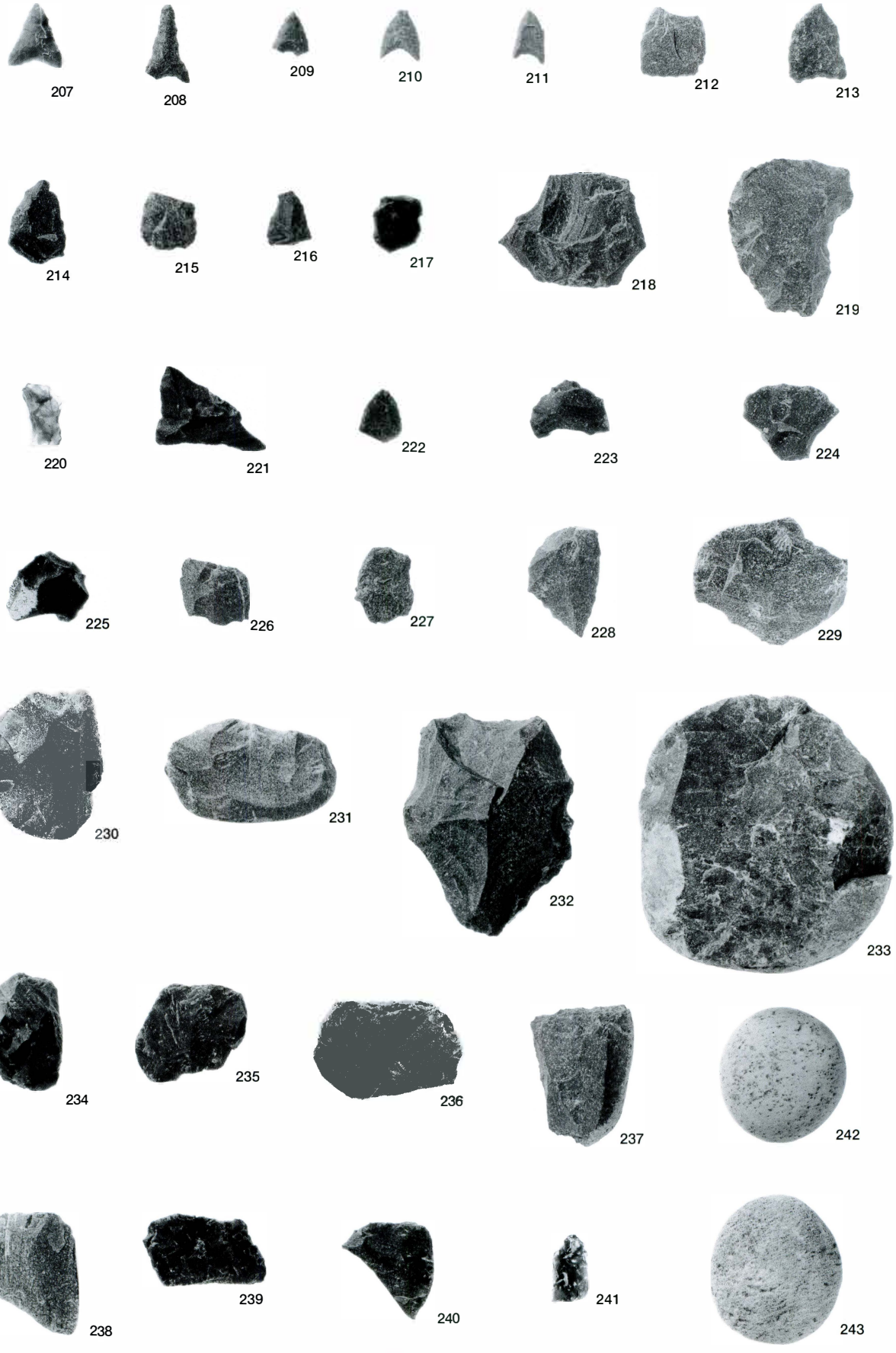
154

05溝出土

194

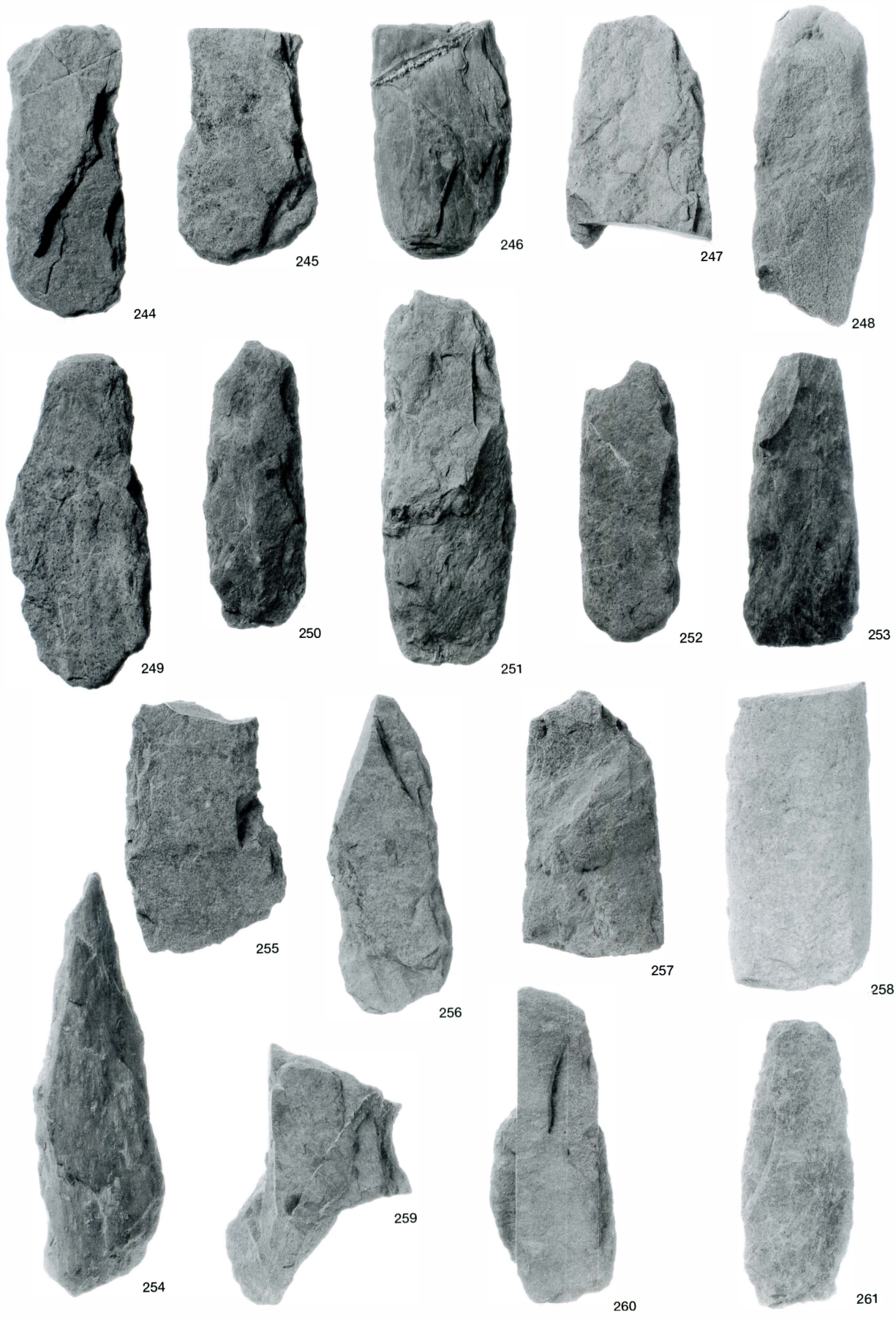
包含層出土

自然流路、14溝・15溝・05溝、包含層出土遺物


207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
242
238
239
240
241
243

包含層出土石器（1）

図版20



包含層出土石器（2）

262

263

265

267

264

266

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

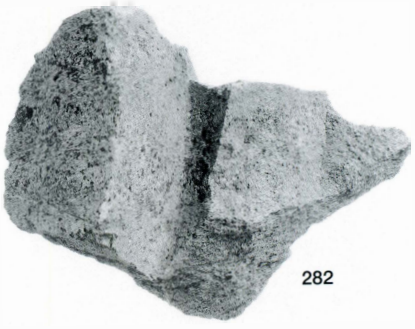
包含層出土石器（3）

図版22

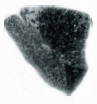
279

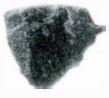
280

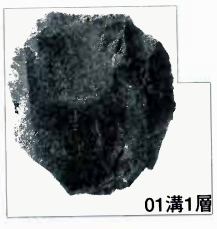
281


282

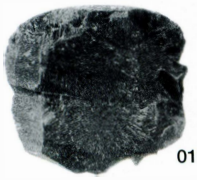
01溝1層

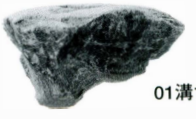

C301溝1層




01溝1層

01溝2層


01溝2層


01溝1層

C3Ⅲ

包含層出土石器（4）、包含層出土剥片・石核

報 告 書 抄 録

ふりがな	のざさいせき　3
書名	野笹遺跡Ⅲ
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第87集
編著者名	近藤正枝　藤岡比呂志
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
所在地	〒502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　TEL　058-237-8550
発行年月日	西暦2004年3月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
野笹遺跡（のざさいせき）	岐阜県美濃加茂市野笹（ぎふけんみのかもしのざさ）町2丁目（ちょう）字紙屋（あざかみや）	21211	08845	35° 26′ 20″	137° 2′ 27″	20020624 ～ 20020820	500㎡	一般国道248号道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野笹遺跡	集落跡	中世	溝跡　6条 堰　1本 土坑　2基 ピット　3基	石器 縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 土師器皿 山茶碗 中国製磁器 中世陶器	野笹遺跡Ⅰで検出された12世紀の大溝につながる溝跡を確認。野笹遺跡Ⅰでも確認された堰を伴う。Ⅰ・Ⅱ区で出土したものと同一個体の可能性が高い12世紀の青磁盤（龍泉窯系）も出土している。

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書　第87集

野　笹　遺　跡　Ⅲ

2004年３月19日

編集・発行　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東１－２６－１

印　　刷　サンメッセ株式会社